
ショーウィンドウのドール・新学期

ろーりんぐ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

シヨールウィンドウのドール・新学期

【Nコード】

N1437L

【作者名】

ろーりんぐ

【あらすじ】

新学期を向かえたミカ達。相変わらずシヨールウィンドウでマネキンのバイトを続けるミカ。学校の外でも中でも新しい仲間も増えたり、おまけにライバルも増える予感！？ 前作「シヨールウィンドウのドール」の続編となります。

第一話・恋は戦争（前書き）

どうも、ろーりんぐです。

とうとう続編を書いてしまいました。

今まで番外編や特別編やらは書いていたのですが……。

第一話：恋は戦争

ピンクのフリフリ、リボンにお花。そんなメルヘンな中で、私はハートのクッションの置かれたソファアーに座っている。

その手には、可愛らしいブーケを持って、ぼんやりとそこから街行く人々の姿を眺めていた。

時折、此方に向かって携帯を構える人や、ボーと惚けたように私を見ている人がいたりなんかして……。

けれども私は、そんなものは気にならず、ただ外を眺め続けていた。

はい皆さん、初めましての人もそうでない人も。どうも私、一ノ瀬ミカです。

この度私、めでたく高三に進級となりました、気持ちも新たにと言いたい所ありますが、最初の三ヶ月という期限付きでのこのバイトも、はや半年以上も経ってしまいました。もう時期一年になってしまっやもしれませんね……。

え？ 何のアルバイトかですって？

フツ、初めての人にはお教え致しましょう。

このアルバイトであります、ある日私の姉によって頼まれたものであります。

それは、姉の店のショーウィンドウでマネキンをしてくれないかという、非常に普通とはかけ離れたものであります。

私、一ノ瀬ミカは普通が大好き。

普通であるために、日頃から努力を惜しまぬ程であります、私のバイブル的存在である小説、「オヤジ達の沈黙シリーズ」をかうお金を稼ぐために、血の涙を流しながら姉の頼みをきいたのであり

ます。

何より姉の店というのが曲者で、何とロリータのお店なんですこ
とよ、皆さん！

まあ、そんなこんなでバイトをしていた私、大嫌いなイケメンに一
目惚れされたり、気に入られたり、時に求婚されたりと色々と紆余
曲折がありまして、今では如月呉羽というステキングな彼氏も出来
て、とても幸せな毎日を過ごしております。

今こうしてバイトに勤しんでいるのも、全て彼とのデート資金を
稼ぐため。あ、別に呉羽に甲斐性が無いという訳ではありませんよ。
彼もちゃんとバイトしてますからね。それも自分のお父上のお店
です。呉羽はお父上が嫌いなんですよ。

それなのに、私の為に頭を下げてバイトをさせてもらってるんで
す。

はうつ、私愛されてます……。

でもでも、頼るばかりの彼女にはなりたくないですもん！ 時
に頼り頼られる、そんなカップルに私はなりたいんです！

だから私も、目立つの嫌ですけど頑張ってバイトしますよ！

いつもであれば、このショーウィンドウ内にいる間は現実逃避に
「オヤジ達の沈黙」を読んでいるんですけど、今日は何だかそち
らには集中出来ません。

何故なら、今日呉羽がお店の前を通るかもしれないからです。

「お袋の仕事の手伝いでさ、近くに行くかもしれないから、様子見
に行つてやるよ」

そんな事を言っていた呉羽。正直恥ずかしくて、嫌ですと拒んだ
のだけれど、それでも予定外の時間に会えるというのは少なからず

嬉しい事。

私は彼を、今か今かと待っていたのだった。

はづっ、どうしたんでしょうか？ 呉羽が来ません。

いつまで待っても呉羽は来なかった。

拒んだから遠慮して来ないんでしょうか……。

そんな事を思っていると、私の傍らに置いてある携帯が鳴った。

いつもは電源をオフにしているんですけど、今日は特別に姉にOKを貰っています。

「ええー！？ 呉羽君が来る？ いやーん、ショーウィンドウ越しに愛を語らうなんてメルヘン！」

なんて言つてキヤイキヤイはしゃいでいた。

お陰で私の携帯は、姉によりロリータ仕様に改造されてしまった訳で……。

何と言つか、とにかくゴテゴテきらきら。

極め付けはゴツチャリと付けられた可愛い系のストラップの数々……。

「大丈夫よ！ すぐに取り外せるようになってるから！」

と姉は言っていたが、これを使わなくてはいけないという、私の心のストレスはそう簡単には取り外しなど出来ないのだ！

おっと、こんな事を考えている場合じゃなかった。

私は鳴り続ける携帯を開き、画面に出ている名前に心を弾ませる。ピッと通話ボタンを押すと、

「もしもし、呉羽ですか!？」

自然と声が明るくなる。

もし私に犬の尻尾が付いていたら、間違いなくブンブンと振れていた事だろう。

すると、低く聞き慣れた彼の声が私の耳に届いた。

『ああ、ミカ?』

うわーい、呉羽の声だー

「はい! どうしたんですか? 呉羽、見に来るって言ってたのに

……」

『フツ、何だよ。あんなに嫌がってたくせに』

「そうですね……でもでも、やっぱりどんな時でも会いたいですもん。クラス別々になっちゃって、凄く淋しいんですよ……」

そうなのだ。三年になって、クラス替えの貼り紙を見て、私はその瞬間奈落に突き落とされた。

呉羽も、私のお友達の乙女ちゃんも、最近その彼氏になった日向君も、別のクラスとなってしまったのだ。

『ああ、そうだよな……でもそれって……』

「あつっ! 皆まで言わずとも分かりますよう。全部私が悪いんです!」

そう、これは私の責任……。

え？ クラス替えなんて生徒個人の意志でどうこうできるものでもないだろうって？

ところがどっこい、聞いておくんなましや奥さま！ 私ってば、特進クラスに入ってしまったことよ！

なんてこつたい、うっかりテストでいい点とってしまったが為に……。

そんないい大学なんて行くつもりは無かったのに……。
あの時風邪さえひいていなければ……。

「うつつ、熱でうまく頭が働かなかつたばかりに……うつつかり全問解いてしまって……気付いた時にはもう遅く、慌てて最後のあがきで間違ってみただけど、一問しか間違えられなくてうつつかり学年一位になんぞなつてしまい……」

『いや、なんかそれ変じゃね？』

「あつつ、ごめんね呉羽。バツチリの体調であれば、楽勝で平均点採れてたのに」

『……あの、だからさ、ミカのその台詞ちょっと違うね？ 普通逆じゃあ……』

「ええ！？ でも大変なんですよ、平均点採るの！ 前もって生徒の学力をリサーチして、平均点は多分これ位だろうと把握した上でテストに望み、一応全問埋めてみましたけどいくつかは間違っていました的な感じで、しかも間違え方にも色々とバリエーションがありました……」

『……そっか、それは大変だな……』

おおうつ、分かってくれましたか！ なんか言葉に気持ちが籠もってないように思わなくもないですが、とにかく分かってくれて嬉

しいであります！

『あー、それでだな。今日ちょっとそつちには行けなくなって……』
「何ですと!?! 何か不足の事態でも!?!」

『うん、まー……お袋の担当してる雑誌の専属モデルがなんつーか我儘でさ……ちょっと撮影に手間取ってて……』

「モデルさんですか？ それは大変そうですね」

彼のお母上は出版会社に勤めていて、以前そのロリータ専門の雑誌にモデルとして出た事がある。

実を言うと、その写真を撮った日に、呉羽と初チューをしました！
いやーん、嬉し恥ずかしな記念日ですう！

思い出して、体をくねらせてしまった私。

ハッ、やばい！ 見られてた！

私の目の前には、薄ら笑いを浮かべつつ生温かい視線を送ってくる通行人が……。

私は慌てて気を引き締めた。

『じゃあ、そついう事だから悪い』

『あー、こんな所に居たの呉羽！ 私、もー待ちくたびれちゃったあ』

『うおっ!?! ちょっと、今はっ!』
「……………」

やけに甘ったるく鼻に掛かった声が聞こえてきた。

もしかして、この声の主が今呉羽が言っていたモデルなんだろう

か。

『この私を待たせるなんて、なんて身のほど知らずって言いたいくるんだけど、呉羽だったら許しちゃう。だってあなたは私の恋人』

『わー！！ 言っな！ 今それ言っな 』

「……………」

プチッ。

私は無言で携帯を切った。

フー溜息をついて外を見やる。

人々は行き交い、車やバスが道路を通り過ぎていった。

その時、私の頭の中では、爆撃と空襲警報が鳴り響いていた。

9

敵が、敵が攻めてきたぞっ！！ ゲリラだ！！ 敵襲だ！！

隊長！ 隊長戻ってきてください！

我々には、これを止める手立てはありません！！ 隊長ー！！

「アレ？ ミカちゃんどうしたの？」

「あは まだ休憩じゃないぞ？」

「ゲリラです！」

『は？』

姉と従業員である杏ちゃんが、此方を真ん丸い目で見ている。

「呉羽に敵がつ、空襲でっ、隊長が居なくてどうしたらっ!!」

頭の中がゴチャゴチャで、何を言っているのか支離滅裂であった。そして、私のパニックが伝染した姉は、あわわわと慌てふためいている。

「ミミミミカちゃん! と、とにかく落ち着いて! お姉ちゃんにも解るよつに喋って!」

「うわー、何か前にもこんなシーンがあったかも。なっつかしい」

「ふーん、そっか……同志に謎の女の影ねえ……」
「謎というか、恐らく呉羽が言っていた我儘なモデルさんだと思います……」

ここは控え室。

グスツと鼻を嚼る私の前には、杏ちゃんの格好の天塚杏也さんが居る。

彼、杏也さんは何を隠そう、鬼畜おかま変態な、しかも姉の彼氏という、将来私の義理の兄最有力候補な人間なのだ。因みに、ロリータを脱いだ彼は、甘いマスクの遊び人風のイケメンである。もひとつおまけに泣き顔フェチである。

姉はと言うと、私と一緒にパニックになると、話が聞きだせないからと一人お店の方に居ます。

「でもさ、同志の恋人とかって言ったんだろ? その電話の女はさ

……」

杏也さんの言葉に、胸がズキンと痛んだ。
チラツと携帯に目をやると、今は電源がオフになっている。

先程一度、携帯が鳴りましたけど、呉羽からだと確認した私は、
姉たちの前で「えい！」と言って電源を切ったのでした。

目がジワリと熱くなる。ポタリと雫が落ちた。

「電話の人が恋人って事は、私はもう呉羽の恋人じゃないんですか？
く、呉羽と別れなくちゃいけないんですか？」

ギュツと手を握り締める。

そんなの嫌です！ この先もずっと、呉羽の恋人でいたいです！

「ミカはさ、どう思ってる訳？ やっぱり同志が浮気とかしてると
思ってる？」

「そんなんっ！ そんなの……呉羽が浮気なんかする筈ありません！」

純情少年の呉羽ですよ！？ 真面目人間の呉羽ですよ！？ 優しく
てお母上や弟君想いなあの呉羽ですよ！？

「ハッ、でも呉羽は優しいので私に中々言えないのかも……」

途端に不安な気持ちに苛まれる私に、杏也さんはハアと溜息をつ
いた。

「全く……信じてんだか、そうでないんだか……」

「うっっ……」

「あのさあ、俺が思うにそれはないと思うぜ？」
「何ですか？」

私が首を傾げると、杏也さんはニツと笑って此方に顔を近付けてくる。

「同志はミカにベタ惚れだぜ？ 恐らくこの先、生涯を捧げる覚悟も出来てる位にはさ……。そんな男が、例え一時の気の迷いであれ、別の女と出来たんだとしても、必ずミカの所に戻ってくるとみた」

私は暫し、彼の顔をじつと見た。

前半部分は感動さえ覚えるものであったが、後半部分は……後半部分は……。

目の前で杏也さんが意地悪く笑っている。

「うわーん、それ何のフォローにもなってますーん!!」

すると、扉がいきなり開いたかと思うと、

「ちよつと杏也君！ 何でミカちゃん泣いてるの!？」

姉が控え室に入ってきた。そして、わんわんと泣いている私をギョツと抱き締め杏也さんから遠ざける。

「あれ？ マリ、お店は？」

「もー、ミカちゃん泣いてるのにそんな場合じゃないわ！ お店は今日はもう閉めました！ それで何があったの？」

そうして杏也さんから話を聞いた姉は、励ますように私を抱き締

める力を強め、

「大丈夫よミカちゃん！ 呉羽君は浮気なんかしないわ！」

「本当？」

グスツと涙目で姉をじつと見上げると、何故か姉は頬を染め、キヤーンと変な声を上げたかと思うと、思い切り頬摺りしてきた。

「んもー、当然じゃない！ こんなラブリーかつプリティなミカちゃんを前にしたら、他の女なんて目に入る筈無いじゃない！ もう、らあぶ！ 堪んない！ そんな顔されたらお姉ちゃん堪んないから！」

むちゅーと頬つぺたにキスをされた。

非常に寒気を覚えたので、私は拳を前に突き出した。拳は見事姉の鳩尾へとめり込み、姉はその場に崩れ落ちた。

「あららら。マリ、大丈夫？」

杏也さんは困ったように笑いながら姉を助け起こす。

そして、真っ白になった姉を椅子に座らせた。

「もういいです！ こうなったら勇気を振り絞って呉羽に訊いてみますー！」

そう言って、携帯のボタンを押そうとした時、杏也さんがそれを阻んだ。

「まあ待ってって、ミカに良い事教えてやるよ」

「良い事？」

私は胡散臭げに彼を見上げる。

なんか杏也さんが、お伽話に出てくる主人公に甘い言葉を言っ
て悪の道に誘い込もうとする悪い魔法使いに見えてくる。

しかし、

「うまくすれば同志はミカをもっと好きになること間違いなしだ」
「っ！！ 本当ですか!？」

私はその甘い言葉にすぐ様飛び付いた。

呉羽がもつと私を好きになる!? そんな素敵魔法がありますの
かな!?

ああ、どうやら私は悪の道に染まってしまいそうです。

こうして私は、杏也さんの言葉を真剣な顔で聞く事に。

「恋ってというのは駆け引きなんだぜ？」

「はい? か、駆け引きですか？」

「そう、駆け引き……」

何だそれかと思っていると、杏也さんはニッコリと笑う。

「同志を引き止めておきたいのなら、そういう事も覚えておかない
とな。時には引いて、時には押す」

「引いて、押す、ですか？」

「ああ、甘いだけなんて飽きちゃうだろ? スパイスも利かせなく
ちやな」

「甘く、スパイスも、ですか？」

料理を得意とする私にもちよいと難解な言葉。

しかし、杏也さんの次の言葉に、ドンピツシャー！と私の中で衝撃が走った。

「どちらが主導権を握るか、ある意味戦争なんだぜ？ 恋愛ってのは」
「っ！！」

せ、戦争でありますかー！！

その時、私の中でファンファーレが流れた。そして、ずっと不在であったあの人が現れたのだ。

戦争と言われれば、私が出ない訳には行くまい！

おおー！ 隊長ー！！

隊長が戻ってきたぞー！！

さあ、反撃開始だお前達！！

イーエツサーー！！

こうして私の中で隊長は復活した。

私自身も闘志をメラメラと燃やす。

なのでその時、杏也さんがボソリと、

「同志には悪いけど、より面白くなるようにしといたぜ……」

こんな独り言を言っている事には気付かなかったのであります。

うおー！！ 隊長ばんざーい！！

隊長お帰りなさい！！

ハッハッハッ、止めないかお前達！

ばんざーい、ばんざーい！！（胸上げ）

第一話：恋は戦争（後書き）

と言うわけで、隊長復活しました。

前作同様、行き当たりばったりになるかもしれません。

新しい登場人物も次回から続々出して行けたらなあと思っております。

予定では、同じクラスのがり勉君や、先生、後輩、モデルさんなんかが主でしょうか……。

お馴染みのキャラも勿論活躍する予定です。

では、ご意見ご感想がありましたら、随時受け付けます。

第二話：遭遇、素敵お姉さま？

オレはその日、普通にお袋の仕事の手伝いに来ていた筈である。決して、モデルの機嫌取りに来た訳ではない。そう思いたい。

オレは壁際に居るお袋に近づき、小声で言った。

「なあ、お袋……オレ、いつまでこんな事しなくちゃいけないんだ……？」

出来る事なら今すぐミカの所に行つて誤解を解きたい所。

しかしお袋は、オレに向かつて手を合わせると、

「本当ごめんね呉羽。もう少しだけ我慢して。」

あの子、この前RAMISのモデルオーディション落ちちゃって、今荒れ期突入しちゃってんのよ」

「……何だよ荒れ期って……それに、あの女うちの専属モデルなんだろ？ いいのかよ、他んどこ行かせて」

「いいのいいの、もし本当にオーディション受かってうちを辞めちゃったとしても、RAMISのモデルは以前ここで専属モデルしてましたって言って自慢できるじゃない？ 箔も付くし」

「箔ってなあ……こっちは迷惑だっつーの！」

「まあまあ落ち着いて！ その分バイト代弾むから！ ホラ、デー卜代稼ぐんでしょ？」

「だから！ そのデー卜も出来なくなっちゃうかもだろ！？」

勘違いしたままで愛想つかされるなんて、目も当てられねーぞ。

「その点はホラ、呉羽の愛の見せ所？ ガンバ！」

グツと顔の前で両手を握って片目を瞑り、可愛こ振るいい歳こいたオバサンがっ……。

すげームカつく……こちとらミカと全然連絡とれねーからイラ付いてんだよ。お袋のおふざけに構ってるよゆーもねーんだよ……。

オレが冷たい視線を送れば目を泳がせるお袋。

「え、ええええつとおー、もしもの時はお母さんがちゃんとミカちゃん误解を解いてあげるから、ね？」

このとおりと言うように手を合わせて見せる。

オレはチツと舌打ちをすると、辺りを見回した。

「そついや、あの女は？」

今回の騒ぎの元凶であるモデルの姿を探す。

「呉羽？ あの女じゃなくて、ちゃんと“ちゆりちゃん”て名前前で呼んだだけ？ 一度機嫌が悪くなると、中々元に戻らないのよ。機嫌が良ければ仕事も早く終わるし、仕事が早く終われば呉羽も解放されるでしょ？ どうせ、撮影が終わるまでの恋人なんだし」

あの女……モデルの名前は深山ちゆりと言う。今は大学二年だそっだ。

まあ今日限りの付き合いになるだろうから覚える気はない。

すると、たった今話題にのぼった深山ちゆりが此方にやってくると、すぐさまオレの腕に自分の腕を絡めてきた。

ズシツと彼女の重みが腕に掛かる。

嫌そうに眉を顰めてみても、この女には関係ないようで益々しな垂れ掛かってくる始末。

「フフフ、そんな嫌そうな顔しないで？ どうせ今日だけの恋人なんだしい」

「オレ、恋人居るんすけど……」

暗に嫌だと言っているのだが、深山ちゆりは笑みを深くさせると、

「だからいいんじゃない。後腐れもないし……あ、そうだ。この後、撮影が終わったらデートね」

「は！？ んなっ！ ちょっと待て」

「ああ、あなたに拒否権はないから。ただ、私に惚れるような真似はしないでね、後々付き纏われるのは面倒だし。」

それと、私の恋人でいる間はさつきみたいに他の女と電話するような真似は止めてね。まあ例えしたとしてもまた邪魔してやるけど」

フフフ、と不適に笑うこの女を前にオレはお袋に目をやったが、お袋は肩を竦めただけだった。

「つか、やっぱあん時割り込んだのはわざとだったのか……。取り敢えず、今日はミカに連絡するのは諦めた方がいいみたいだな。」

ハアと溜息をついて肩を落とすオレ。

今日は厄日だ。

つくづくそう思うのだった。

+++++

パンパカパン (脳内ファンファーレ)

ようし、お前達！ 準備はいいかあ！！

隊長！ 我々はいつでも出撃可能であります！！

いよーし！ では、反撃開始である！！

イエッサーー！！

私の脳内では、そんな戦いの狼煙のぼしが上がる中、実際には落ち着いた様子で着替えなどをしている。

その後、杏也さんから色々と恋人同士での主導権の握り方とか、小悪魔テクとかを教えてもらいました。

何だかどどん普通とは掛け離れていく気がしないでもありませんが、これも全て呉羽の為。未長くラブラブする為であります！
ですから私、大いに頑張りますよ！

「それじゃあ、私行きますね」

「ああ、頑張んな」

「え！？ 頑張るって何が!？」

着替えも済んで出かける準備も万端である。

真っ白になっていた姉もすっかり我に返り、今は杏也さんの隣で不思議そうな顔をしている。

そんな姉に、杏也さんはニヤツと笑ってみせると、腰を引き寄せた。

「恋愛での主導権の取り合いについて……マリもたまには主導権取
つてみる？」

「ひえ！？」

主導権を握らせてくれると言われていても拘らず、姉は杏也さ
んに対して怯えた表情を見せる。

これが、普段から主導権を握られている者の条件反射というもの
であろうか……。

と言うか、見せ付けないでください！ 折角心を鬼にして頑張ろ
うと決意しているのに、物凄く呉羽に甘えたくなくなってしまったじゃ
ないですか！

きつと今呉羽に会ったら、主導権を握る事も小悪魔になる事もな
く抱きついて、べたべたしてしまいそうです。

そんな事になったらバカカップル一直線になってしまいます。

そしたら、そしたら……。

先程杏也さんが言っていました。

「いいか、ミカ。今からそんなバカカップルぶりだと、すぐに倦怠期
に突入して、その内自然消滅なんて事に成り兼ねないぜ？」

その言葉は深く深く私の心に突き刺さる。それと同時に恐怖も感
じました。

い、嫌です！ 自然消滅、無関心、それが何より嫌であります！

私はがくがくブルブルと震えながら、気持ちを引き締めたのでし
た。

そうして、店を出る私。けれど開けた扉のすぐ向こうに、なんと人がいた。

ゴッソ!

「キャン!」

子犬の様な可愛らしい悲鳴を上げ頭を押えているのは、少々可愛らしさとは掛け離れたとても背の高い女の人。

「ああっ! ごめんなさい! 大丈夫ですか!？」

「くっつ! わ、私こそ扉の前に……邪魔して御免なさい」

私はその女の人から目が離せなくなる。

何故なら、背が高い事を取り除けば、メガネに一本に縛った長い髪。ロングスカートにカーディガン。とても地味な格好をした人であつたのだ。

おおおっ! なんとステキな地味さでありますか!

私の心の師匠の斎藤陽子さんの様な完璧な普通さはないけれど、このそこはかとなく漂う普通さと地味さは、見習うべきものであります!

それに何より、そのメガネ! 私の掛けているMYオアシスに負けず劣らずの普通メガネであります!

「素敵なメガネですね!」

私は思わずそう誉め讃えてしまっていた。

するとその女の人は、驚いた顔をした後、微妙な顔をしつつ「あ、ありがとうございます。」と礼を述べた。

でもこの人、こんな所で何をしてたんだらう？
こんなお店の裏口で……。

「このお店に何か用ですか？ もう今日は閉めるみたいですよ？」
「そ、そうなの？ 歩いてたら、素敵なお店だなんて思って
「な、何ですと！？ こんなメルヘンチックなお店が！？」

言ってしまったからハツとする。

人の趣味などその人の自由である。よって、何を素敵と思うかもその人の自由。

けれどその人は気を悪くする様子もなく、少し淋しそうに笑いながら、

「似合わないって分かってはいるんだけど。ちっちゃな頃から、こ
ういった可愛くてメルヘンチックな物に憧れてて……。」

「何を仰います！ 似合う似合わないなど関係ありません！ 憧れ
る事は自由です。好きな物は貫き通してこそ価値があります！

斯く言う私も、普通に憧れ、普通を目指しています！ だからち
っとも変じゃないと思います！」

ハツ！ 思わず力説してしまった……。ひ、引いていないでしょ
うか？

案の定、女の人は啞然とした顔をしていた。

けれど、暫し間を置いてから女の人はクスクスと笑い出す。

「普通を目指してるなんて変わってるんだね。でも素敵だと思う。
普通が一番だもんね」
「っ!!」

私は心に衝撃を受けた。

思わず涙がちよちよ切れそうになったであります！
こんな風に理解してくれる人がいるなんて……初めてかも。
それに何だか胸がほんわかする。
なんて素敵な人なんでしょう……。

私は次の瞬間彼女に向かって、「お友達になってください！」と
お願いしていた。

乙女ちゃんじゃないけど、お姉さまと呼びたくなくなってしまいましたよ。

女の人は驚愕した顔をした後、にっこりと嫌な顔一つせずに笑って、「此方こそ」と言ってくれた。

はわわわわ！　なんて優しい人！

この人なら、私の大好きなオヤジ達の話をニコニコと笑って聞いてくれそうですね。

こうして私は、この女の人とお友達と相成った訳であります。
ケー番メルアドも教え合いました。

このステキな地味地味お姉さまのお名前は、葛城繭羅さんと仰るそうで、ただ今大学二年生だそうです。

「ロリータ好きならここで働けるように口利きしましょうか？」

私は彼女の為を考えて、そう言っていた。
何よりこの店の店長は私の姉。
すると、一瞬嬉しそうな顔をしたけれどすぐに首を振った。

「ありがとう。気持ちは嬉しいけど、止めておくわ。あのショーウインドウのモデルの子が、あまりに可愛かったからちよっと気になっちゃってただけだから」

「っ！！」

ギクーン！ な、何ですと!？

「まさか、繭羅さんもドール教信者!？」

なんてこつたい、最近はそのロリータ三人衆も、来年は受験戦争だとあまり来なくなって静かになったと思ってたのに……。

「え？ どーるきょうしんじゃ?」

しかし、繭羅さんは聞き慣れない言葉に、頻りに首を傾げている。
どうやら、この名称については知らないようだ。

一先ずホツとした私。

おっとそうだった！ こんな所で立ち話している場合ではなかったのであります！ ただ今反撃の最中でありました！

あ、そうだ。携帯の電源オンにしたのに、呉羽から掛かってきませんね。何かあったのでしょうか？

うつつ、気になるけれどまだ此方からは掛けてはならないのです。

「……？ ミカちゃん？ 携帯がどうかしたの？」

携帯をじつと睨み付けていたので、繭羅さんが不思議そうに訊ねてきた。

「いえ、それがですね。今反撃開始中ですよ……」

「は、反撃！？」

「はい！ ただ今ヤキモキ作戦展開中なんです！ ところがどっこい、逆にこっちがヤキモキしてしまいそうで……」

くっそー、中々連絡が取れずに、焦らせる作戦なのに！

流石は呉羽です。そう簡単には引つ掛からないという事でしょうか？

「ええーと……？」

繭羅さんは訳が分からないといった様子で、思い切り困った顔をしている。

なので私は、今回の事の一部始終を繭羅さんに語って聞かせる事に。

「……そんなこんなで私は今、主導権を握る為に小悪魔を目指しているのです！」

「へえ……がんばってね……」

「はい！」

何だかその時、繭羅さんがとても微妙な顔をしていたのだけれど、私は気付かず元気に返事をしていました。

「あ、いました！　今あそこで椅子を運んでいるのが、私の彼氏の呉羽です！」

「えっと、もしかしてロツクな感じの髪の色が派手な人？」

「はい！　その派手派手ロツクな金髪サイド赤です！」

「へ、へえ……こわ　イ、イケメンな彼氏だね」

「はい！　おまけに真面目で優しい自慢の彼氏です！」

何か今、繭羅さんが言い掛けたような気がしたけれど誉められた事で嬉しくなってしまった私。

はい、ただ今私、敵状視察の真つ最中でありませぬ。

隊長！　敵は此方に全く気付いておりませぬ！

よし！　このまま待機！　例え怪しい女性の影を確認しても、暫くは様子を見よ！

イエッサー！

凜々しき隊長の指示が脳内に響き渡る中、私は繭羅さんの疑問の声を聞く。

「ところで私達は一体何をしているの？」

「え？　何って隠れてるんですか？」

そう私達は今、植木を影にして隠れているのだ。けれど繭羅さんは周りを気にしながら、

「えっと、でも通行人には丸見えだけど……」

「別に隠れるべき相手からは隠れているのでいいんです」

いつもだったら目立つ事は極力避けようとする私であったが、今回ばかりはそんな事は言ってられない。

あ、でも繭羅さんはこの事とは関係無いから、隠れなくてもいいんだけど……。

私は「繭羅さん、繭羅さん」と彼女に声を掛けた。

「別に繭羅さんは私に付き合ってくれなくてもいいんですよ」

けれど繭羅さんは、一度何かを気にしたように建物の中を見てか

ら、

「私も隠れたい気分だし、ミカちゃんに付き合っわ」

はっつ、やっぱり繭羅さんはいい人です。

「まゆ？ ちょっとあんたこんな所で何してるの!？」

「ひゃっ！ ちちちゆりちゃん!」

「ぼえ?」

いきなり背後から声を掛けられたかと思ったら、どうやら繭羅さんの知り合いのようである。

振り返れば大人っぽい女性が、そこに立っていた。

うわっ、モデルっぽい人です……。

「そ、そういえば、ちゆりちゃんはここでモデルの仕事してるんだ

ったよね」

と思ったら本当にモデルさんでした。

でも何で繭羅さんはおどおどしているのでしょうか？

すると、目の前の女性はフンと鼻で笑うと、繭羅さんを睨め付ける。

「何白々しい事言ってるのよ。私があんたをここに呼んだのに。なのにいつまで経っても来やしない。ARAMISの専属モデルだからっていい気にならないでよね」

……………チーン。

な、何ですって！！ ARAMISの専属モデル！？

ARAMISってあの大手ファッション企業の！？

私が子供の時に乙女ちゃんの兄、薔薇屋敷輝石に誘拐され掛けた忌まわしきあの！？

……………ノーン！！

こ、こんな所で思わぬ襲撃にあってしまった……………。

「御免なさい、ちゆりちゃん……………」

「フン、まあいいわ。もうあなたには用はないし。私、これからデートなのよね」

とても機嫌が良さそうな繭羅さんのお友達のちゆりという人。

「え？ でも彼氏とは昨日別れたって　ハッ！」

繭羅さんが何故か私を振り返った。

そして、建物の中を指差し、

「えっと、もしかして髪の色が派手な人？」

「へえ、鈍いあんたにしては、よく分かったわね」

「……………」

繭羅さんがゆるゆると此方を振り返る。

た、隊長ー！！　敵に易々と防御を突破されましたあ！！　敵は既に目の前であります！！

いつかーん！　お前達、気をしっかり保つのだ！！　次なる作戦を決行する為にっ！

イエッサー！

「へえ、デートですか？　素敵ですね。何処に行くとか予定は組んでいるんですか？」

「ミ、ミカちゃん？」

「何、この子？　まゆ、あんたの連れ？」

「どうも、一ノ瀬ミカと言います。繭羅さんとはついさっきお友達になったばかりです。」

それよりも、素敵な彼氏ですね、羨ましいです。

それで？　告白はどちらから？」

「あの？　ミ、ミカちゃん！？」

「ねえ、まゆ？　この子物凄く胡散臭いんだけど」

「ち、ちゆりちゃん！」

繭羅さんは私とちゆりという人の狭間でおろおろとしている。

私は携帯を取り出すと、ピッと電話を掛けた。
すると、ワンコールを待たずして相手が出る。

『あはん、お姉さま？ 永遠のあなたの妹、薔薇屋敷乙女ですわ！』

そう、掛けた先は乙女ちゃん。

「乙女ちゃん。何も聞かずに、今すぐ私に吏緒お兄ちゃんを貸してください」

『あら、お姉さまとわたくしは一心同体。執事だって共有するのは当たり前ですわ！』

「それで場所は」

『そんなものは聞かずとも、お姉さまに仕掛けてある発信機で直ぐ様発見できますわ！』

発信機など何時の間に！？ と思って少しばかり恐くなるが、何とか気持ちを落ち着ける。

「じゃあ、なるべく早く吏緒お兄ちゃんを寄越して」

『フフ、それでしたらお姉さまが杜若の名前を言った時点で、既に動きだしましたわ。近くを通り掛かった買い物帰りの主婦から、ママチャリを借り受けそちらに向かっておりますわよ』

「マ、ママチャリ……」

ハッ、思わず想像してしまった。

それはさぞや目立つことであろう。

そして私は礼を述べ、携帯を切ると、不機嫌さMAXのちゆりな

る女性を、繭羅さんが宥めている。

「ちよつと！ 話の途中で携帯かけるなんて凄いい失礼じゃない！」

「まあまあ、ちゆりちゃん落ち着いて」

私はそんな不機嫌さMAXのちゆりという人にニツコリと笑い掛けると、また携帯のボタンを押した。

「ちよつとあんた、私に喧嘩売る気!？」

私はそんな彼女を完全に無視すると、相手が出るのを待った。
すると、

『もしもしミカ!？ あれは違うんだ!！』

呉羽の声。

相当焦っているように聞こえる。

建物内を見れば、後向きの呉羽が、周りを気にしながらも携帯に出ているのが見えた。

「フッフ、何が違うんですか？ いいじゃないですかデート、楽しそうで……ちゆりさんと仲良く行ってきたらどうですか？」

『なっ!! 何でミカがそんな事知ってるんだよ!？』

「何でって、本人から聞いたに決まってるじゃないですか」

『はあ!？ 本人って』

呉羽が首を巡らし、キョロキョロとする中で、とうとう此方を向いた。

そして漸く私に気付くと、傍らに居るちゆりという人に目を向け、驚きに目を見開き、同時にその顔が真っ青になってゆくのが見えた

の
だ
っ
た。

第二話：遭遇、素敵お姉さま？（後書き）

新キャラ、深山ちゆりと葛城繭羅登場。二人は幼馴染まゆらだったりする。

深山ちゆりは性格悪いですが、根はそんなに悪い人ではありません。
ん。（多分）

葛城繭羅は、背が高い事にコンプレックスを抱いていて、可愛い物が基本的に大好きだけど、自分には似合わないからと元より諦めてしまっている根暗っこです。

何故彼女がモデルになれたのかは、後々書いていきます。

第三話：暗黒執事リオデストロイ！

「えー！？　じゃあ、あんたが呉羽の彼女？」

私の隣で、ちゆりという人は私と呉羽とを交互に見ている。そして、何故か彼女はニヤリと笑って私を見てきた。

「ふうん、あなたが呉羽の彼女なんだ？　あんまり趣味はよくないのねえ。でも、この私を前に堂々と挑戦状を叩き込んで来るとはい度胸じゃない」

「はい？」

イエエ、アナタニ挑戦状ヲ叩キ込ンダ覚エ八毛頭ゴザイマセン。

私はただ、呉羽に先制攻撃を仕掛けただけである。

その時、バンと建物のガラスが音を立てる。

『ミカ！　その女の言う言葉には惑わされんな！』

見れば目の前に、必死な形相でガラスを叩く呉羽の姿が……。

「別にまだ惑わされてはいませんよ。でも否定しないって事は、デートは本当にするんですね？」

『それは』

「ええ、その通りよ。仕事が終わったら夜までずっと」

ちゆりと言う人が呉羽の代わりに答えた。夜までずっと、という言葉にギュッと胸が締め付けられ、目にジワリと涙が浮かぶ。

「呉羽のバカ……嫌いです」
『ミカ?』

その時である。

チリンチリンという音と共に、猛スピードのママチャリが、ジャジャツと音を立てて横向きで止まった。

道には止まった際に付いたと思われるタイヤ痕と、摩擦熱による煙と焦げ臭い匂い。

どれだけのスピードを出していたのか窺える。

そしてママチャリから降りたのは、黒い燕尾服に金髪がよく映える乙女ちゃんの執事の杜若吏緒その人である。

因みに、ママチャリの籠には葱の飛び出した買い物袋が覗いている。

「私に何か御用ですか？ ミカお嬢様」

「吏緒お兄ちゃん!!」

『な、何でいきなり杜若が出てくんだった!?』

呉羽の驚愕する声を聞いた。

「凄い美形……おまけに執事?」

「お、王子様っぽいのにママチャリ……」

二人の女性はそれぞれに衝撃を受け、そんな事を述べている。

私は吏緒お兄ちゃんに駆け寄ると、「ナイスタイミングです!」
と言ってそのまま彼に抱きついた。

『なっ!?! 何してんだミカ!!!』

真っ赤な顔で怒る呉羽。

バンとまたもやガラスを叩いた後、『そこで待ってる!』と言って携帯を切ると目の前から姿を消す。

「ミカお嬢様？」

見上げると、戸惑った顔の吏緒お兄ちゃん。

何だか顔が赤いのは、全速力でママチャリを走らせた為でしょうか？

でも、息切れもしてないし、全然汗も掻いてないですよ。それどころか凄くいい匂いがするし。

思わず顔を埋めて匂いを嗅いでしまった。

一瞬、吏緒お兄ちゃんの体が強張ったけれど、直ぐ様呉羽の声がして私は顔を上げた。

「ミカ！ 離れろ！」

「嫌です！ 呉羽がその人とデートするのなら、私も吏緒お兄ちゃんとデートするんだもん！」

「なっ!?!」

呉羽は口をパクパクとしている。

すると吏緒お兄ちゃんは、私と呉羽とを交互に見てからちゅりさんを見て、なるほどと頷いた。

「つまりはミカお嬢様は呉羽様に愛想を尽かしたわけですね」

「へ？ 吏緒お兄ちゃん？」

「おいつ！ 何もそこまで言ってるーだろーが!」

そのとおりである。

悲しみと憤りと嫉妬がごちゃ混ぜになって、今にも爆発しそうであるが、私はそこまでは思っていない。

出来る事なら今すぐ仲直りして、ラブラブしたいと思っているのだ。

しかし今は、作戦実行中。目には目を、歯には歯を作戦で私と同じように、やきもちをやいてもらう作戦である。

この際、男性は誰でも良かったのだけれど、私の知り合いの男性でこんな事を頼めるのは吏緒お兄ちゃん位なもの。

日向君には乙女ちゃんという相手が既に居りますし。

他の……例えば、生徒会長の大空竜貴だったり、乙女ちゃん兄の薔薇屋敷輝石だったりしたら……。

二人は私に好意を寄せている。

なので、この二人に頼むと、これを期に本物の恋人になろうと色々と画策してきて、何かと面倒な事 になりそうな気がする。

その点、吏緒お兄ちゃんならそんな心配はありません！

あの二人みたいに恋人になろうなんて思わないだろうし。それにそれに、何たってお兄ちゃんはスナイパー渋沢ですからね！

女子供にやめっぽう弱い、最後は必ず助けてくれるさスナイパー！

と、いった感じで吏緒お兄ちゃんも助けてくれると思ったのだけれど……。

「分かりましたミカお嬢様。新しい恋人として、私を選んでくれた訳ですね」

そう言って、輝かんばかりの笑顔で私を見下ろす。

はうあつ！ 眩しい！ 眩しすぎるであります！
それは一種の兵器でありますよ、お兄ちゃん！

おまけにキユウツと抱き締めてくる。

なのでその時、吏緒お兄ちゃんが呉羽に対して挑戦的な笑みを浮かべていたなんて知る由もなかった。

「なっ！ てめっ！ ミカを離せよ！！」

呉羽が怒鳴り此方に近づく気配がする。

でも、抱き締められている私には見る事は出来ない。

そして、パチンという音が頭上でしたかと思ったら、ザザッと何人かの気配を私の背後に感じる。

「うおっ！？ 何だよお前等！」

「く、黒子！？」

「何処にこれだけ隠れてたの！？」

背後から聞こえてくる台詞によって、どうやら吏緒お兄ちゃんが黒子を呼んだらしいという事が分かった。

顔を上げてみてみれば、吏緒お兄ちゃんは不敵に笑いながら、口に手袋をぶら下げている。

顔の横には裸の手があり、どうやら先程のパチンという音は素手で指を鳴らした音のようだ。

そうだよな、今手が塞がってるもんね。

手を叩くなんて出来ないよね って、何で黒子を呼んでるの！？

それにこれって、なんかヒーローもののワンシーンのようだよね
！？

黒子達がヒーヒーって奇妙な掛け声上げそうだよな！？

ほら、通り過ぎる子供がなんか期待した目で見てるよ！ 呉羽を、これから変身するのかなあって目で見てるから！

それじゃあ何かい？ 吏緒お兄ちゃんもはヒーローもので言つとこるの悪の化身、暗黒執事リオデストロイかい？

そんでもって私はリオデストロイに捕まった一般ピーポーかい？ て事は、ここはヒーローに助けを求めめるのかい？

正義のヒーロー、サンバトラー呉羽に……。

(脳内妄想注意報)

チャラチャチャーチャラツチャ、チャラチャチャーチャラツチャ、パラパパン、パラパパン、チャラツチャーン！（無駄にヒーロー物っぽい曲）

バルブントスの名の下に世界征服を企む暗黒執事リオデストロイ。世界中に執事をばらまき、人々から自ら働く意志を奪わんとしていた！

そして今、人質^{ミカ}をとりサンバトラー呉羽の前に立ち塞がる。

「キヤー！ サンバトラー呉羽！ たあすけてえー！！」

「ははは！ 人質をとられては手も足も出まい！ 今日こそその息の根を止めてくれる！ サンバトラー呉羽！」

「くそつ、卑怯だぞ！ 暗黒執事リオデストロイ！！ 悪に染まりしお前の心、このサンバトラー呉羽が正義の名の下、この日輪の輝きの下に成敗してくれる！ とつっ！」

その時、日輪の輝きがサンバトラー呉羽を包み、聖なる力が彼に悪に打ち勝つ力を与える！

全身に漲る正義の力をその手に集め、サンバトラー呉羽は暗黒執事リオデストロイに立ち向かう！

「サンバトラー必殺奥義サンバニツシャー！！」

「説明しよう！ サンバニツシャーとはサンバトラーが日輪（太陽）のエネルギーを集めた非常に地球に優しいエコな攻撃なのだ！」

「ミカお嬢様？ 一体何を言っているのですか？」

「へ？」

非常に困惑した様子の吏緒お兄ちゃんの声がして、私はハッと我に返る。

おおうつ、思わず妄想の彼方へとトリップしてしまっていたようであります。

しかも声に出してしまっていましたかな？ いやはやお恥ずかしい……。

「う、ごめんなさい。あまりの事に現実逃避を……」

色々とありすぎて、もう何が何やら……。

すると、吏緒お兄ちゃんは私を痛ましげに見下ろすと、再びギョッと抱き締めてきた。

「ミカお嬢様が幸せであるならと諦めておりましたが、よもや呉羽様……いえ、如月呉羽がこのようにミカお嬢様を裏切るとは思いませんでした！」

「勝手に勘違いすんな！ オレはミカを裏切ってねー！」

「ほう？　ではそこにいる女性は何ですか？　ミカお嬢様の、あなたが彼女とデートすると言う話は？」

そういえばと私がそちらに顔を向けると、繭羅さんもちゆりという人も、茫然として私達を見ていた。

話に付いていけないのだろう。

「それは、この女に無理矢理一日恋人にされたんだ！　この事にオレの意志なんてこれっぽっちも無い！」

そうなんだと私は今度は呉羽を振り向こうとしたけれど、吏緒お兄ちゃんがそれを出来ないように、がっしりと抱き締めていて叶わなかった。

「例え、あなたの言う通りだとしても、ミカお嬢様の事を考えれば断れた筈。やはりあなたにはミカお嬢様を任せられません」

そう言つと漸く抱き締める力を弱めてくれる。

けれど、完全には放してくれなくて、私の事を真剣な顔で見下ろしてきた。

「吏緒お兄ちゃん？」

どうしたのかと言うように見上げていると、吏緒お兄ちゃんは青い瞳を切なげに揺らし、

「やはりあなたを他の男には任せられません」

「え？　ひゃあ！？」

私はひよいと抱え上げられた。それもお姫様抱っこである。

いきなりの事に、その見た目からは想像できない位がっしりとした首に抱き付いてしまう。

その時、何かの拍子でカシャーンとメガネが落ちてしまった。

「ああっ、Myオアシスが！」

私の大事なMyオアシス（メガネ）は滑って黒子達を越え、誰かの靴に当たって止まった。

しかしその誰かというのは呉羽で、彼は身を屈めてそれを拾うと私に向って掲げてくる。

「ミカ、いい子だからこっちに来るんだ。ほら、お前の大事なメガネだぞ」

ああっ、これは呉羽お得意の物質ではありませんか！

サンバトラー呉羽が聞いて呆れますな！

ヒーローの風上にも置けぬ所業。

と、その時である。

「え！？ ミカちゃんその顔……あのショーウィンドウの？」

「うそ……凄い美形じゃない！」

ハッ！ しまったあ！

私はバツと顔を覆うが今更隠してももう遅い。

もうこうなったら開き直るしかないであります。

私は顔から手を外すと、吏緒お兄ちゃんがこんな事を言ってきた。

「ミカお嬢様ご安心を。メガネであれば私がすぐにご用意致します。ですので、あんな卑怯な手を使う者の所へなど行く必要はございません」

「本当？」

と、私は吏緒お兄ちゃんに顔を向ける。

「ああっ、こらミカ！」

呉羽が怒鳴った。

だって呉羽、私は只今作戦実行中なのであります。

呉羽をいいように手のひらで転がし、翻弄せねばならぬのです！
そして今、手のひらで転がされているかどうかはさて置き、いいように翻弄はされているようです。

と言うか、なんか私自身も翻弄されている感は否めない気がしないでも無いような……。

隊長！！ 何故か最初に立てた作戦が大幅に脱線しつつあります！
落ち着けお前達！ まだ修正可能な段階だ！ このまま作戦を続行する！

イエッサー！！

「吏緒お兄ちゃん、早く私を連れて行って下さい。私、吏緒お兄ちゃんとデートします」

「なっ！？」

ショックを受けたような呉羽の声を聞いた。

私は呉羽の方を向くと、泣きそうな顔になりながら、「呉羽のバカちゃん！」と言って吏緒お兄ちゃんにしがみ付いた。

いえ、嘘泣きではございません。

本当に泣きそうなのです。

だって呉羽のあんな顔見たら……。

うつつ、凄く傷付いた顔してました。

でもでも、いいんですよね？ これで後々ラブラブ出来るんですよ？ そろそろですね、杏也さん！

私は心の中で杏也さんに語り掛けるが、思い浮かぶのは彼の鬼畜な笑顔だけ。

……。

……。

……。

は、果たして、私は杏也さんに頼って良かったのでしょうか？
なんか一番頼ってはいけない人のような……。

私はそろそろと顔を上げ、もう一度呉羽を見ると、彼は顔を強張らせて私から顔を逸らしてしまう。

ガン！ もう顔も見たくないって事ですか！？

あつあつつ、なんか本格的に泣けてきました。

そうですね、私が杏也さんの言葉を鵜呑みにしたばかりに……。

「うつつ、私の方がもつとバカです……」

吏緒お兄ちゃんの肩に顔を埋めての呟きだったので、きっと吏緒お兄ちゃんにしか聞こえなかっただろう。私を抱き締める吏緒お兄ちゃんの腕に力が籠もったのを感じた。

「……如月呉羽……あなたにはこの場でお仕置きをと思いましたが……」

なぬっ！？ お仕置き！？

私がビクンと身体を強張らせて不安げに吏緒お兄ちゃんを見ると、彼は私を見て安心させるようにフツと微笑んでからキッと呉羽を睨んだ。

「ミカお嬢様に免じてまたの機会にして差し上げます」

その言葉を聞いて、ホツと胸を撫で下ろす。

「それでは参りましょうか、ミカお嬢様」

吏緒お兄ちゃんはそう言うと、私をお姫様抱っこしたまま歩きだす。

私はこのままでいいんだろうかと悶々と悩みながらも、何も出来ずにいた。

+++++

「ちょっと待ってえ！ ミカちゃん、これは全部おばさんが悪いのおー！ お願い！ 呉羽を見捨てないでえー！！

って、あら？ ミカちゃんは？」

「出てくんのおせーよ。もう行つちまったって……」

「ええ！？ そんな！ せめて私が出てくるまで、何で引き止めておけなかった、私の息子！」

ガクツとその場に膝を付く音羽。

建物の外で起こっている出来事を、スタッフの一人に聞いて急ぎ駆け付けたのだが、既に事が終わった後であった。

「それで誤解して他の男に連れてかれたと……何も出来なかったのか、私の息子！」

ダンと地面を叩きつける音羽。

「んなの、あんなミカの顔見たら何も言えねーよ」

呉羽は思い出ししていた。

あの傷付き泣きそうになっているミカ表情。

「だからこそ引き止めて誤解を解いてあげるんでしょーが！ そんな所はあの人そっくりだ、私の息子！」

「っ！ あの人ってあいつの事か！？」

呉羽の脳裏に父親の顔が浮かぶ。

最近をよく話すようになったが、嫌いな事には変わらない。

そんな男とそっくりと言われて、少なからずショックを受ける呉羽。

しかし呉羽の質問に答える事なく、音羽は声の限りに叫んだ。

「ミカちゃんカラムバアーツク！ お弁当マアイラアーヴツ！」

ミカが去っていったであろう方向に向かって手を伸ばす。

「って！ 結局弁当かよ！」

呉羽の突っ込みが虚しく響くのだった。

一方、今回の原因になった深山ちゆりと、そしてミカの友となつた葛城繭羅はと言つと……。

「はあー、なんかここまで無視されると怒る気も起きないわ……何てゆーか、いきなり執事は出てくるわ。黒子は出てくるわ。しかも執事ママチャリで来るし、でも何故か帰りは高級車。残ったママチャリは黒子が乗って帰ってくし……」

「ち、ちゆりちゃん……あの、私帰っても……」

「おまけにまゆの妹分みたいだと思ってた呉羽の恋人は、本当はずつごい美人だったし。まゆはまゆで、私を差し置いてARRAMISのモデルになったっていうのに、いつまでも垢抜けなくてオドオドしてるし！」

「ひえっ、ちゆ」

「もう！ だからオドオドしないでって言ってるでしょ！ 私があなたをいじめてるみたいじゃない！ 不本意だわ！」

バンと壁を叩いて繭羅を睨み付けるちゆり。その音でビクリと震

える繭羅に益々不機嫌そうな顔をした。

「いい！ あんたはこの私を負かしたんだから、もつと堂々と自信を持ってもいいもんじゃないの！？ ていうか、持ちなさい！ ではないと私が惨めだわ！」

「でも、私なんかよりちゆりちゃんの方が……」

自信なさげに目を伏せる繭羅。

ちゆりはイラツとしながら、

「仮にも“睨みモデル”で通ってるんだから、私を睨み付けるとかしてみせなさいよ！」

「だって、好きで睨み付けてる訳じゃないし……メガネが無いと良く見えないから、どうしても目付きが悪くなっちゃって……」

何処までもオドオドする繭羅に、ちゆりは呆れた顔を向ける。

「だったらコンタクトにすればいいじゃない。だからいつまでも垢抜けないのよ。おまけに根暗なのよ！」

「だって……写真撮ってる時、皆が私を見ててなんか怖い……」

「それがモデルの仕事でしょーが……」

ガーと吠えるちゆり。美人なだけに迫力も凄かった。

「だって……だって……」

「もうっ！ だってだって言い過ぎ！ 一人前にファンだって付いてんでしょ！？ あんた！」

生意気だと言って、人差し指をグリグリと繭羅の額に押しつける。

「いたたたた。爪が痛いよ、ちゆりちゃん。それにファンって言うても、なんかその人たち怖いんだよ？ 自分の事を罵ってくれとか、踏んでくれとか、汚物を見るような目で睨み付けてくれってお願いしてくるんだよ？」

「そ、それは確かに怖いわね……」

眉を顰めて繭羅の額から指を離す。

「でしょ？ それに私が着る服って、ロック系っていうか、物凄く
恐い感じの服でね。露出度も高くて、私はもっとヒラヒラの可愛い
のが……」

「あんたバカ？」

いきなり罵られきよとんする繭羅。

ちゆりはフンと鼻で笑う。

「いい？ モデルって言うのはねえ、着る服は選べないの！ 用意
された服を如何に着こなすかがモデルなの！ どんなに露出が高く
ても、例え乳首が見えちゃっても、文句言わないで着こなすのが
モデルなの！ 第一、あんたにそんな可愛い服」

そこでちゆりは、繭羅が何か言いたそうにしているのを見た。

「何よ？」

「えっと……ちゆりちゃん、いつも着る服に文句言ってるかな……
…いたっ！」

ベチツと額を叩かれ、繭羅は涙目になる。

ちゆりは目を据わらせると言い放った。

「私はまだ一流じゃないからいいのよ」

何だか納得いかないながらも、これ以上ちゆりが不機嫌になるのは良くないと、繭羅は頷いてみせる。

そして「あ」と声を上げた。

「そう言えば、ちゆりちゃんデートはどうするの？」

折角仲良くなったミカの恋人とのデートである。

何だか、ちゆりを見る目が非難がましくなってしまう。

しかし、ちゆりは手を振ると、

「あー、なんかもういいわー。ムシヤクシヤしてたから、いじめがないのありそうな探してただけだし。あんなの見せられた後じゃ、デート行く気も失せちゃったわ」

それを聞いて、ホッとする繭羅。

今すぐミカにメールで教えてあげようと、携帯を取り出している
と、

「その代わりに、繭羅私に付き合ってくれるわよねえ？」

「え……？」

ニッコリと笑ってそう言ってくるちゆりを見て、繭羅は携帯を取り落としてしまう。

「わ、私レポート書かなくちゃ……」

「フン、そんなの私が男に頼んで書かせてやるわよ。とにかく、あなたは今日は私にとことん付き合う事。いいわね？」

有無を言わせぬ雰囲気。顔を近づけ凄んでくるちゆりに、繭羅は
うんと言わざるをえなかったのである。

第三話：暗黒執事リオDESTROY！（後書き）

な、何だろう、暗黒執事って……しかもリオDESTROYって……。
更緒ファンの方はすみません。と一応謝ってみたりなんかして……。

てな感じの今回のお話、如何でしたでしょうか。
いい感じに杏也に振り回されている一冊です。

次回、更緒とミカ二人つきりです。どうなるかな？ 自分でもドキドキ。

第四話：青い瞳とミィハー心

代々薔薇屋敷家に仕えている杜若家に生まれた。

執事として薔薇屋敷乙女お嬢様にお仕えするのはこの私、杜若吏緒である。

しかし私にはもう一人、仕える人間がいる。

薔薇屋敷とも杜若とも関係なく、私自身が心からお仕えしたいと望んだ私の真の執事魂を呼び覚ました、誠の意味での私のご主人様。

この杜若、ミカお嬢様が幸せであるならと、執事という立場で押し隠したこの想いは、一生打ち明けるつもりはなかった……。

けれど、あなたが泣くのなら……辛い思いをするのなら……私はあなたを如月呉羽から引き離し、この私が執事としてではなく只の杜若吏緒として生涯をかけてあなたの傍で、あなたを守り支えてゆきます……。

薔薇屋敷乙女お嬢様にミカお嬢様から電話が掛かってきた時、何故だか私は胸騒ぎを覚えた。

我ら杜若の一族は、かつて忍びの一族であつたらしい。

その杜若が備え持つ能力であり、主人を守る為の直観的危機感知能力がミカお嬢様の何だかの心の不安を感じ取ったようだ。

私は、お嬢様の携帯から漏れ出るミカお嬢様の声の中に、“吏緒お兄ちゃん”と私を呼ぶのを聞き、私は弾かれるように行動を起こしていた。

近くを通りすぎる主婦を引き止め、その主婦の乗る自転車を借り受けた私は、この身の持てる全ての力を使い、全力でミカお嬢様の

元へとひた走る。

血の奥底に眠るかつての忍びの力の為せる業なのか、それとも私の執事魂の呼び起こした力なのか。アドレナリンが上昇し、いつも以上の力を発揮している。

こ、これは一体どういう事か……。

辿り着いた先で私を待っていたもの。

ミカお嬢様は私の姿を見つけると、真っ先に私に抱きついてきたのだ。如月呉羽が居るにも拘らずである。

戸惑う私に、ミカお嬢様はあろう事か更に擦り寄り顔を埋めてくる始末。

その可愛い仕草に、男であるのなら誰であろうとあらがう事は不可能だ。

私はなんとか執事としての理性を働かせ、抱き返すという主人に對してのあるまじき行為はしないでおけた。

ああ、しかし……駄目ですミカお嬢様。

これ以上なされると、私はあなたの執事でいられなくなる。あなたに執事としてあるまじき不埒な事をしてしまいそうです。

けれども知った信じがたき許されざる如月呉羽の所業。

よもや、ミカお嬢様という者がありながら他の女性とデートをしようなどと……。

許すまじ、如月呉羽。

私は如月呉羽が 深くミカお嬢様を愛しているのだと思い、彼のその想いを信じ、彼にミカお嬢様を任せる決心もついた。

何より、ミカお嬢様を選んだ方。

如月呉羽が見た目ほど軽薄な人間でない事は、私とて知っている。それに私も彼に仲間意識を持っていた時期もあつたのだ。

しかしこの男はミカお嬢様を泣かせた。

錯乱して訳の分からない事を口走るほど、ミカお嬢様は傷付いて……。

もうこの気持ちを抑える事はしない。

何より、ミカお嬢様は私を選んでくれたのだ。そう、真つ先に私を……。

それは少なからず私を想っていてくれていたからだと思つてもいいのでしょうか。

私と同じ想いをミカお嬢様も抱いているからだと思つても……。だとしたら、私はこの杜若の名を捨てましょう。

薔薇屋敷家に仕える事を辞め、ミカお嬢様只一人にこの身を捧げると誓います。

しかしこの直後、私のその考えは甘かつたのだと思ひ知らされる。私はあの場で如月呉羽に宣戦布告し、ミカお嬢様を連れ出した。彼女を車に乗せ、少々浮かれた気持ちであつた事は認めましょう。けれどミカお嬢様はそんな中で言ったのだ。

「吏緒お兄ちゃん、私ちゃんと小悪魔できてたでしょうか？」

「は？」

私は一瞬、自分が車を運転しているのだという事も忘れ、ポカン

とミカお嬢様を見つめてしまった。

直ぐにハツとして前に向き直したが、安全を考え車を路肩に停め、改めてミカお嬢様に目を向けた。

まだ錯乱しているのだろうか。

そう思ったのだけれど、ミカお嬢様は私に「恋は戦場なのです！」と力一杯に言い放って、メガネ越しでないその瞳に吸い込まれそうになりながら、彼女の話すのを黙って聞いているのだった。

+++++

一体どうしてこんな事になってしまったのか……。

私の目の前には吏緒お兄ちゃんの顔が間近に迫って、今にもキスできそうな位に近かった。

そして私は彼のその鮮やかな青い瞳に、まるで囚われてでもいるみたいに身動き出来ないでいた。

確か私は吏緒お兄ちゃんの運転する車で移動中であつた筈である。そこで私は、杏也さんの教えに若干疑問などを感じながら吏緒お兄ちゃんに訊ねたのだ。私はちゃんと小悪魔できてたのかを。

だけどちよつと唐突すぎたみたいですよ。

だって吏緒お兄ちゃん凄くキョトンとした顔してましたもん。

普段あまり動揺している所なんて見ませんかからね。

そついう吏緒お兄ちゃんは、ちよつとばかり可愛いなんて思つち

やいました。

そんなこんなで私は「恋は戦場なのです！」と力一杯に言った後、私はどういう事であるのか、今回の事のあらましなどを吏緒お兄ちゃんに語って聞かせたのである。
そして……。

「という訳なんです」

「……………」

全てを説明した私。

吏緒お兄ちゃんはというと、私が話をしている間じつと耳を傾けていたのだけれど、途中から何やら思案するように額を押さえだした。

話し終えた後も、その形をキープしたまま暫し押し黙っている。

流石に心配になり、「吏緒お兄ちゃん？」とそつと声を掛け、顔を窺おうと助手席から彼の顔を覗き込む。

すると、吏緒お兄ちゃんはその状態のまま言葉を発した。

「……………つまりミカお嬢様は如月呉羽に愛想を尽かした訳でないと……」

「とんでもない！ 今も大大大好きです！」

当たり前じゃないですかと私は想いを込め力一杯そう告げた。

「私を選んだのは……………」

「だって吏緒お兄ちゃんが一番頼みやすいですし、何たってスナイパー！ 渋沢ですし！」

「……………それで、もう一度うかがいますがミカお嬢様は何を目指すと

「？」

「小悪魔です！ 呉羽を手のひらで転がし翻弄するんです！」

すると、吏緒お兄ちゃんは額を押さえていた手でそのまま髪を掻き上げると、フーッと息を吐きだした。

何だかそれが酷く疲れているというか呆れているというか……。

「あつっ、私やっぱり小悪魔には向いてないんでしょうか……そもそも杏也さんの言う事をそのまま鵜呑みにしているのもどうかとは思いますが……」

「天塚杏也の事に関して言うのであればその通りと言わざるを得ませんね……」

ぬぬぬっ、やはりそうでありますよね……。

はっっ、でもでも、何か吏緒お兄ちゃんそこはかたく怒っていませんか？

何だか彼の声は、冷たく硬質的に聞こえたのだ。

「私達はどうかやら、天塚杏也に手のひらで踊らされているのかもしれませんね……しかし」

吏緒お兄ちゃんの青い瞳が私をひたと見据える。

「はっっ！？」

私は何故だかその瞳に身動きが取れなくなる。

な、何故に！？

「ミカお嬢様……」

「は、はい？」

「あなたはわざわざそうなさらずとも、十分に小悪魔ですよ」

「本当ですか!？」

途端に私の声は弾む。

「ええ、お陰で私は翻弄されっぱなしです」

「へ!？」

思わず我が耳を疑った。

そんな……いつだってクールスナイパーなお兄ちゃんか!？」

ポカンとしてしまう私に、吏緒お兄ちゃんはクスリと笑い掛けたのだけ……。

な、ななな何ですかこれは!？」

吏緒お兄ちゃんが物凄く色っぽいというか、フェロモンがただ漏れというか……。

そもそもその眼差しは何でありますか!？」

何か分からないけれど、明らかに何らかのビームが出てますよね?

だって今、私石になったみたい動けないですもん。

ハッ、もしかや暗黒執事リオデストロイの必殺技、石化ビームでありますか!？」

私は何故だか内心焦りを覚えつつ、携帯を取出しメールを打ち始める。

「ミカお嬢様、何を？」

「や、やきもち作戦の一つですよ。今、吏緒お兄ちゃんと楽しくデートしてますよーって」

自分の中の動揺を誤魔化すように、携帯に集中する私。

あつ………そういえば、呉羽も今頃デートしてるんでしょうか……。
むむう………呉羽のバカちゃん……。いいもん、私だって吏緒お兄ちゃんとデートしてやるんだもん。

呉羽もいつぱいやきもちやけばいいんです。

私は半ばイライラとしながら携帯をいじるのだけれど、その私の手を横から出てきた手がギュツと携帯ごと握り込んできた。

手袋無しの直の肌の感触とその熱に、私は知らずドキドキと心臓を脈打たせていた。

「り、吏緒お兄ちゃん？」

「どうせならもっと徹底的にやりましょう」

「へ？」

どういう事かと訊ねるより先に、吏緒お兄ちゃんはするりと私の手から携帯を抜き取ると、何時の間にシートベルトを外したのか、此方に身を乗り出してくる。

え？ え？ 何ター！？

戸惑う間に、ますます青い瞳が間近に迫る。

彼の石化ビームは更に強さを増したようで、私は完全に固まってしまっていた。

カァーっ顔がこれでもかと言うくらい熱くなって、

「ニヤ、ニヤニヤニヤンですか!？」

と、何故だか去年の夏休みの負の遺産である猫語が、思わずといった感じで出てきてしまう。

吏緒お兄ちゃんは、そんな私の様子に大人な余裕の表情でクスリと笑みを浮かべると、

「真っ赤ですね。可愛いですよ、ミカお嬢様……」

なーんて言つて、チュツと……チュツとですね、私の頬つぺたにチューしてきたんでございますのよ、奥様!!

キヤー!! 何ですかこれ!？

何でこんなにドキドキするんですか!？

私には、呉羽っていうれっきとした彼氏が居るんですよ!？

と言うか、まさか吏緒お兄ちゃんがこんな事をするなんて……。

私がアワアワとしていると、彼はまた大人な笑みを浮かべて、更にこう囁いてきた。

「頬つぺたじゃ物足りなさそうですね。やはり口付けがよろしいですか?」

彼の指が唇に触れ、優しくなぞる。

プフウー!! 何これ!？ 何これー!？

噴く! 鼻血噴きそう!

何で私、こんなに興奮してるのでしょうか?

確かに吏緒お兄ちゃんの言うように、何か物足りない気がするよ?

うーん、何だろう……ハッ、そうか!

「髭です！」

「は？」

「後、サングラスも！」

「はい？」

「どうせならドドンとオールバックにロングコートで！」

「あ、あのミカお嬢様？」

困惑した表情を浮かべる吏緒お兄ちゃん。

そうです！ 足りないものはそれなんです！

「ぜ、是非ともスナイパー渋沢の格好で今のをお願いします！」

私は手を胸の前に持つてくると、これ以上無いっくらいに瞳を輝かせて懇願してしまう。

だって考えても見てください皆さん！

あのスナイパー渋沢が！ クールで渋いダンディー渋沢が！

私の憧れの彼があんな甘い言葉を……しかも真ん前で囁かれてもみてくださいな。

おまけに頬っぺチユーまで……いやん、何かもう凄くドッキドキ！

呉羽、御免なさい。今だけ呉羽以外に胸キユンさせてもらいます。

等と、私が心の中でそんな事を思っていた時である。

車内に笑い声が響いた。

見れば、吏緒お兄ちゃんが私から顔を背けて、肩を震わせ笑っている。

おおう、大爆笑？

「り、吏緒お兄ちゃん？」

恐る恐る声を掛ける私。

吏緒お兄ちゃんは暫く肩を震わせて苦しそうに笑っていたけれど、

「す、すみません、ミカお嬢様……予想を裏切られたと言うか……
いえ、あなたらしいと言いましたようか……」

漸く笑いをおさめ、此方を見る吏緒お兄ちゃん。

笑った為か、少々目が潤んでいて、しかも顔が上気しているので、
無駄に色っぽいというか……以前擦った時も何げに思いましたが、
吏緒お兄ちゃんはお色気むんむんですなあ。

と、彼の色気に少々当てられていた私。

しかし、吏緒お兄ちゃんはまたも大人な笑みを浮かべて、更にこ
んな事を言ってきた。

「しかしミカお嬢様？ 別に渋沢の格好をするのは構わないのです
が、また先程のように可愛い反応をされていますと、調子に乗
って今以上の不埒な事をしてしまいますよ？ よろしいのですか？」
「……っ！！」

キヤー！！ 聞きましたと奥様！ 不埒な事って何ぞましょ！？
いやーん、気になるう！

乙女ちゃんじゃないけど、鼻血ブーするよう！

ああっ、本当に御免なさい呉羽！ 私ってば浮気者ですよ！

何だか私はミーンハーン心炸裂で、さっきから頬っぺたに手を当てて、

もじもじしてしまっ。
でもそこではたと気付く。

あ、そういえばさっき吏緒お兄ちゃんが言っていた“もっと徹底的にやりましょう”とはどついつ事でしょうか？

すると吏緒お兄ちゃん。ニツと少しばかり悪い笑みを浮かべ、私に携帯の画面を見せてきた。

「なっ！ それって……」

そこに写し出されていたのは、先程の頬っぺチューの映像だった。

「い、何時の間に!？」

「どうせメールを送るなら、証拠の映像付きで如何ですか？」

「え、映像付き……」

目の前の携帯の映像には、真っ赤な顔で吏緒お兄ちゃんに頬っぺたチューされてる私の姿が。

あう……私ってば茹で蛸と言うかトマトと言うか……こんなに真っ赤な顔だったんですね。

ううっ……恥ずかしいです……。

すると、その心の声表に出してしまったようで、クスリと吏緒お兄ちゃんは笑って、

「私はとても可愛いと思いますよ」

その言葉に、私はまた真っ赤になってしまっ。

あうっ、何か吏緒お兄ちゃんに言われると恥ずかしく感じるのは何でしょうか？

いつもであれば、普通を目指す私にとっては“可愛い”というのは嬉しくない言葉。

あ、呉羽は別ですよ。呉羽に言われると嬉しくてデレっとしてしまいますからね。

「後、私が行う如月呉羽へのお仕置きですが……」
「えっ！」

バツと顔を上げる私に、吏緒お兄ちゃんはニッコリとそれはもう素敵な笑顔で、

「ミカお嬢様が一週間彼と会わないと言うのであれば、如月呉羽へのお仕置きはしないであげますよ」

「ええー！ 一週間ですか!？」

「はい。如月呉羽への罰にもなりますし、同時に私からミカお嬢様への罰でもあります」

「吏緒お兄ちゃんから私へのですか？」

そんな……罰って何の罰なの？

眉を八の字にして、目の前の金髪執事を不安げに見上げると、フツと苦笑するのが見えた。

「ほら、それですよ」

「えっ？」

「あなたのちよつとした表情や仕草は、私を天国にも地獄にも突き落とす……今日、私はどれだけ舞い上がり、奈落に突き落とされた事か……。ミカお嬢様は分かりませんかでしょう？」

今だって、あなたのそんな表情を前にして、何もできないのが腹立たしくてならないのです」

「ご、御免なさい……」

彼のその苦しげで切なそうな顔を見ていたら、思わず謝っていた。すると吏緒お兄ちゃんはずっとだけ困った顔を見ると、すぐにさっきのような悪い笑みを浮かべる。

「悪いとお思いでしたら、私の罰を受けてくださいますね？」

「あ、あうおう……」

私は何か言おうと口を開いたけれど、目の前の青い瞳が私をまた石にしてしまったようで、結局何も言えなかった。

「では、私の言うとおりにしてくださいね？ ミカお嬢様……」

青い瞳は必殺ビーム。

そして漂う色気は垂れ流し。

時に天使のように白く悪魔のように黒くなる。

暗黒執事リオデストロイ、恐るべし……。

第五話：無自覚な小悪魔

『今、吏緒お兄ちゃんとデート楽しんでます。しかも頬っぺたチュウしてもらっちゃった。やったね』

呉羽はそのメールを見て、携帯を持つ手をわなわなと震わせた。おまけに添付されてきた画像に、ピシリと固まった。真っ赤な顔で頬にキスをされているミカの姿に我が目を疑う。

「な、ななな何してんだよ！」

呉羽は顔を真っ赤にして怒鳴る。

怒りのあまり、携帯を真っ二つに壊してしまいそうだった。

「あ、何ター呉羽。もしかしてミカちゃんから？」

「ああっ、ちよっ、やめ」

呉羽が止めるより先に、携帯を音羽に奪われてしまう。そして音羽も呉羽同様、ピシリと固まった。

「これは……金髪之物凄いイケメン……負けたわ、私の息子……」

そして、至極真面目な顔で、ポンと肩を叩いて言った。

「本物の金髪と、偽物の金髪……一目瞭然よ」

「って、そこかよ！ それに、ミカは見た目なんかで人を選ばねーよー！」

そう叫んで呉羽はハツとする。

（そうだ、ミカは見た目で人を判断しない。ちゃんと中身で人を好

きになるような女だ)

そう考えた途端、呉羽は酷く落ち込んだ。

どう考えてみても、自分と比べ、更緒の方が何もかも優れている事に気付いたのだ。

(駄目だ……何をとつても、オレには勝ち目がねえ……)

呉羽は、がしがしと頭を掻いた。

きつと今、物凄く情けない顔をしているに違いない。
するとまた、携帯が鳴った。メールだ。

「あら？ ミカちゃんからだわ」

「っ!!」

呉羽はバツと携帯を奪い返す。

そしてメールを開いて中身を確認すると、その場でガクンと膝を付いた。

「終わった……」

「ちよつと呉羽？ ミカちゃん何だつて？」

呉羽のその落ち込みっぷりに、嫌な予感しかしない音羽は、息子の手から携帯を抜き取る。

力が入っていないかった為、思いの外素直に携帯を渡す呉羽。

音羽は、携帯の画面に写し出される文章を読んだ。

「えーと、何々……」

『暫く私たち距離を置きましょう』

「こ、これは……別れる一歩手前の常套句では……」

音羽は気遣わしげに自分の息子を見やった。

「あ、ほら、呉羽。ちゃんと誤解解かなきゃ！ デートの件だってなくなっただし！」

「もうずっと着信拒否だ……」

「うっ……」

音羽はグツと言葉に詰まった。

「ああっ、呉羽に手伝い頼んだ過去の私が憎い！ ごめんね、呉羽。こうなったら私が責任持ってミカちゃんちに直接出向いて……あら？」

その時音羽は、メールに続きがある事に気付いた。

“距離を置きましょう”の後、ずっと空白が続いている。

音羽は何だろうと最後まで見てみる。すると、やはりメールはそれで終わりではなかった。

『何て書いたけど、本当は今すぐ逢いたくて仕方がないよ。』

でもこれは罰なので今は逢う事はできません。一週間逢うのを我慢できたら、いっぱいラブラブしようね』

音羽はバツと口を押さえる。でないと周囲ににやけた顔を曝さらしてしまいそうだ。

（可愛いわミカちゃんってば、最高よ！ テクニシャン！ きつとあの子の事だから無自覚っばいけど、物凄い小悪魔テクだわ！）

心の中でグツジョブと親指を立てる音羽。メールを最初の行まで戻すと、携帯を呉羽に返した。

「はい、呉羽。気持ちをポジティブに持ちなさい。別れようなんてこれっぽっちも書かれてないじゃない。振られた訳じゃないんだから。ね？ ミカちゃんを信じてあげて！」

音羽はメールの事は告げなかった。

(これは自分で知った方が感動が大きいわ！)

しかし呉羽は、一度チラリとメールを見つめただけで、まるでこれ以上見たくないと言うように、そのまま携帯を閉じてしまった。

「ああっ！」

「ハア……！」

呉羽は生氣のない顔で肩を落とし、深い溜息を吐くと、立ち上がってその場から離れていってしまふ。

「呉羽！ 大丈夫よ！ ミカちゃんを信じて！ メールをもう一度じっくり！」

息子の背に呼び掛ける音羽であったが、果たして聞こえたかどうか……。呉羽は無反応だった。

「あちゃー……… 凄い落ち込みっぷり。でもまあ、なるようにしかならないか。

てゆーか、ここはもうちょっとがつついて執着心を見せるべきじゃないかしら！ 携帯掛けまくるとか！ 家に乗り込むとか！ あーもう、そういう所本当あの人そっくり！」

一人吠える音羽。誰も彼女には近づかない。

「あーでも、ミカちゃん可愛い過ぎ！ あんなの送られた日にゃ、

一生離れられないわよね、男なら！ と言っか、あれを見つけた時のあの子が見物だね。絶対に気付かせなくちゃ！」
心に誓う音羽であった。

〜その頃ミカはと言っつと……。

「ミカお嬢様、メールは送りましたか？」

「っ！！（ギクツ） え、えつと、はい！ 送りました！」

「そうですか。ちゃんと私の言っつたとおりに？」

ミカはコクコクと頷く。

それを満足そうに見やつて、吏緒は車を走らせた。

ミカはこっそりと安堵の溜息をつく。

（呉羽、気付いてくれるかな……？）

実を言っつと、“距離を置きましょう”の後の文章の事は吏緒には内緒で打っつたのだ。

確認されてもすぐにバレないように、かなりの空白を空けて最後の方に。

案の定確認されたが、バレる事はなかつた。何となく直感的に、知られてはいけないと思っつたのだ。

（でも考えてみれば、去年の夏休みは一週間以上は会えない日が続いてたし、それを考えれば楽勝です！ それに、我慢して我慢して、それで会っつた方が喜びもひとしおの筈です！）

ミカは携帯の中に保存してある呉羽の写真を見た。

(キヤーン、可愛いですう！ 呉羽には消してくれって言われたけど、そんな勿体ない事できません！)

そこに写っているのは、バイト先でウサギ耳を付けられている彼の姿。

(大丈夫です。一週間なんてあつという間です。そうだ、試練だと思えばいいんじゃないですか？ お互いの気持ちの再確認だと思えば。)

そうですねよ、最近ずっと一緒にいすぎて、それが当たり前のように思えてきましたものね。それに最初みたいな新鮮味も薄れてきたような…… 呉羽だって前みたいに純情少年になる事が少なくなつたというか、俺様な時が増えた？)

ミカは思い出して一人顔を赤らめる。

(いえ、別に俺様が嫌という訳じゃなく……だって呉羽が俺様になるのって、大体エッチな雰囲気の時なんですもん)

ミカも漸く俺様になる条件というものが分かってきた。

(あうっ、でもやっぱり可愛げがあつて萌え萌えもしたいというか……初心に、そう初心に戻りたい！ ちょっとした事で真っ赤になつていたものね。初々だったもんね)

とここで、ミカはハツとして吏緒を見る。

(もしかして吏緒お兄ちゃん、その為に?)

全く以て違うのだが、吏緒を全面的に信用しているミカはそう思
い込んでしまった。

なのでミカは、信号が赤になって車が停車した時を見計らって、
身を乗り出して彼の頬にキスをした。

「っ！！ ミ、ミカお嬢様!？」

ギョツとして頬を押さえる吏緒。

「えへへ、吏緒お兄ちゃんに感謝とお詫びと、それにさっきのお返
しですよ」

そう言っつて照れ臭そうに笑うミカを、吏緒は僅かに頬を染めなが
ら茫然と見つめている。

その笑顔は、とてつもなく可愛かった。

「あ、ほら、青になりましたよ」

ミカが信号を指差し、吏緒はハツとして車を発進させた。

吏緒の心は今、酷く動揺していた。先程の大人な雰囲気など、綺
麗さっぱり消え失せている。

もしか、彼女も自分の事を……と考え、運転したまま横目でチラ
リとミカを盗み見たところ、何やら携帯を眺めながらニマニマと笑
っているのが目に入った。

おまけに、ブツブツと「呉羽とラブラブ」と呟いているのが聞
こえ、自分の勘違いに気付く。

「ミカお嬢様、あなたは……」

「ん？ 何ですか？」

「あなたは本当に小悪魔ですね……」
「はい？」

首を傾げるミカに、吏緒はこの日最大級の溜息をついたのだった。

第六話：わんこな後輩（前書き）

新しいキャラ登場。

第六話：わんこな後輩

朝、いつもの待ち合わせの場所。オレはそこであいつを待っている。

あの、信じられねえ様な出来事なんて全部夢だ！

とまあ、女々しくも自分勝手な都合のいい事を考えてしまうオレ。昨夜は全然眠れやしなかった。

あの“暫く距離を置きましょう”と届いたメール。

お袋は何故かもう一度メールを見るなんて事を言っていたが、どうにも見る気なんか起きない。

そもそも見た所で、何かが変わるわけじゃねえだろ？ もう起きちまった事なんだし。

オレはハアと溜息をつきながら顔を上げた。

するとそこに、ずっと頭の中を占めていたあいつが現れたのだ。

ミカは俯きながら、とぼとぼと歩いていて、まだオレの存在には気付いていない。

しかし、ミカのその手の中には、あの重箱とも取れる、でかい弁当がぶら下がっている。

それを見てオレは、

ああ、あれはやっぱり夢だったんだ。

そう思ってしまったのだが、ふとミカは顔を上げ、オレの存在に気付いたようだった。

すると途端にギョツとした顔をし、立ち止まる。そして、ハツと

して周りをキヨロキヨロし出して、何故だかぎくりとした後、ちょっと泣きそうな顔をしながらオレを見やった。

な、何だ？ 何でそんな泣きそうな顔をしてんだ？

オレはそんな顔を見たくなくて、駆け寄ろうとしたのだけれど、ミカはぎくりとして後退る。

そして、弁当とオレを見た後、弁当をその場に置いて、脱兎の如く駆けて行ってしまった。

うおっ！ は、はええ……男のオレでも追いつけねえぞ。

流石は鳥の巣クラツシャーだな……。

オレはそんな現実逃避的な事を考えながら、弁当を拾いに行く。持ち上げるとずしりと重い弁当箱。

ちゃんと中身は入っているようである。

でもちゃんと作ってきてくれたって事は、やっぱり振られたって訳じゃないのか？

等と希望を胸に抱きかけた時、携帯が鳴り響いた。メールである。差出人の名前を見て、慌てて携帯を開く。すると、そこにはこう書かれていた。

『空のお弁当箱は吏緒お兄ちゃんに渡して下さいね』

それを読んだオレは、ガツクリと頂垂れる。

やはりあの事は夢ではないのだと思い知らされた。学校へと向かう足取りが重い。

ああ、一体薔薇屋敷にはなんて言われるか……。日向は、この事を知ったら、ねちねちと言ってきそうだな……。そして杜若……。

あいつとはぜってー顔を合わせたくない。

顔を合わせた途端、奴に掴みかかりそうだ。そしてそのまま返り討ちにあいそうだ……。

つーかオレ、全然奴に勝つてるとこなんて無さそうだぞ!?

な、情けねー……ハッ、いやあるぞ！ たった一つだけ勝つてる所！

オレはごそごそと自分の荷物を漁る。バッグの底にあるソレを手に取る。

ソレは「オヤジ達の沈黙シリーズ」待望の最新刊、『山脈の頂で愛を叫ぶ獣達』何でも今回は、バタフライるみ子の出生の秘密が明かされるらしい。

きつとミカは、この本の存在を知ったら飛びついてくるに違いない。

なんせ、これはまだどの本屋にも置いていない、まだ売り出されていない幻の最新作だからだからだ。

驚いた事に、あいつ……親父が偶然にもオヤジ達シリーズを出している出版社の人間と仲良くなったらしい。全く驚きだ。きつとこんな時でなければ、あいつに感謝などしないだろう。

ふん、ありがとな、親父。これで杜若に対抗できるぜ。

オレが杜若に勝っている所。

それはオヤジ達だ。オレは杜若と違って、一作品だけのファンではない。オヤジ達の沈黙シリーズ全巻のファンなのだ。

まあ、ミカ的に言うのなら、真のオヤジストって所だな。

+ + + + +

私は足取り重く、学校へと向かう。

ハア、呉羽と一週間も会えないなんて……。

すっかり習慣となってしまうたお弁当作り。こうしてしっかりと作ってきてしまいました……。

一体どうやって呉羽に渡せばいいのやら。

吏緒お兄ちゃん、それくらいは許してくれませんか……。

彼はこう言っていた。

『これは私がミカお嬢様に対しての罰ですからね。ちゃんと約束を守るか、しっかり見張っておりますからそのつもりで……』

うつつ、電話で話すのも駄目って言われました。メールも、ショートメール以外は駄目って言われちゃったし……。

まあ、そこまでやらなければ罰にはならないのだろうけど。うつつ、私が小悪魔を目指したばかりに……。

嗚呼……でも、もしあの時のメールを最後まで読んでなくて、呉羽が誤解したままだったりしたら？ 一週間の間に心変わりとかし

ちゃったら？

……チーン。

いーやー！ そんなの耐えられないよう！

話せないと思いは一向に募るばかりである。私は猛何度と知れない溜息をつくとき、顔を上げた。

そしてここが、いつもの呉羽との待ち合わせ場所だと気づき、自然と彼の姿を探してしまう。

しかし、本当にその姿を発見してしまった。

ドキンと心臓が揺れる。

おおうつ、呉羽です！ 呉羽がいる！

うー、駆け寄りたいけど駄目です。

あうつ、でもちよっとくらいなら……ハッ、駄目駄目！ 吏緒お兄ちゃんとの約束！

確が見張られてるって……。

私はキョロキョロとしてそしてその姿を見つけてしまった。

それは全身黒づくめの黒子達。

隊長ー！ 前方二時の方向に敵の偵察部隊がつ！ 後方八時の方向にも居ます！

何っ！？ 報告されたら敵罰に処される！ 此方も下手な動きはしないように！！

イエッサー！！

彼らは真つ黒であるにも拘らず、上手い事周りの景色と溶け合
い、気配も消して一般人からは気付かれては居ないようだ。

何と！ まるで忍者のようですな！

まあ、人に気付かれたら間違いない、通報されるしね。
怪しすぎるから！ ホントに！

きつと、この事は吏緒お兄ちゃんにきつちりと報告するのだろう。

うつつ、これは不可抗力ですよ……ハッ、呉羽が何か言いたげ
に此方に掛けてこようとしている！

だ、駄目です呉羽！ こっちに来ては駄目！

あ、でもこのお弁当はどうしましょう。折角作ったのだから、ど
うせなら食べてもらいたいし……うつつ……いや、ここに置い
ちやえ！

おしつ、ではサラバです！

私は全力疾走でこの場から離れる。

うえーん、これでいいんだよね、吏緒お兄ちゃん！

あ、でも食べ終わった後の空になったお弁当箱はどうやって返し
てもらいましょうか？

うん、やっぱ吏緒お兄ちゃんに渡してもらおう。何しろ、提案し
たのはお兄ちゃんだし。

私は走りながらも器用にもメールを打った。なので、その時前を
走っている生徒を追い抜いた事には全く気付かなかった。

打ち終わった携帯を仕舞い込み、校舎が見えてきたので、私は走
る速度を緩め歩きになる。

フウ、流石に全力疾走は疲れませぬ。朝っぱらから汗かいちゃいましたよ。

私がハンカチを取り出そうとしていると、タッタツという駆けてくる音がして、その足音は私の隣で止まった。

「ゼーゼーと誰かが息を切らしている。」

見た所、同じ学校の男子生徒だ。上はTシャツであるが、下はちやんと学校指定のズボンである。

きつとブレザーとシャツは、彼が方からさげている大き目のスポーツバツクの中に入っているのだろう。

かれは乱れた息を整えると、爽やかに汗を拭って私を見下ろす。

何だか物凄く人懐っこい笑みを浮かべていた。

そしていきなり、

「あんたすげーな！」

と言ってきた。

「はい？」

「おれさ、女に足で敵わなかったの初めてだぜ！」

そう言われて漸く合点がいった。

しまった！ 他の生徒に本気走りを見られてしまった！ あの、

鳥の巣クラツシャーの時に見せた本気走りを！

あわわわ、他には見られてませんよね？ 特に正しいファンクラブの方々に……。

如何やら見ていたのはこの生徒だけのようだ。

隊長、如何しましょう？

うむ、ここはじっくり慌てず騒がず、相手の事を見定めるのだ！
イエッサー！

私はまじまじとこの生徒を見る。

あ、よく見たらこの人イケメンです。

何というか爽やかスポーツマンタイプと申しましょうか。

日に焼けた肌に、がっしりとした筋肉質の体付き、髪は短く刈っ
ていて、ツンツンと毛先が立っている。

背も、更緒お兄ちゃんほどではないが凄く高い。

でも見た事ないという事は、彼は一年か二年という事でしょうか？

そんな事を思っていると、その男子生徒はキラキラとした目で私
に話しかけてくる。

「なあ、あんた何かやってんのか？」

ハテ、何の事でせう？

うーん、ああ、運動か何かかって事かな？

「いえ、これといって何もしていませんが？」

すると彼は意外そうに目を見開かせ、

「何もって訳ないだろ？ あんな走り見せてさ。そもそも周りがほ

「つとかねーよ」

「いえいえ、滅多に見せないものでほんとくも何もありません！
見せていたら、あなたの言うとおり、運動部など引っ張りダコで
しょうとも。」

等とは決して口には出さず、

「いえ、それも特に。私帰宅部ですし」

と言っておく。

すると、彼は目をまん丸に見開いて吃驚していた。

「ええ！？ 何で！？ スゲー勿体ねー！！」

「……………」

彼は身体だけじゃなく声もでかかった。

私は無言で耳を塞ぐ。

見れば彼は酷く残念そうである。

「なんと言うか、物凄く素直に感情を表す人ですねえ。裏とか無さ
そうですし。」

「私初対面でいきなり、こんなにフレンドリーに声を掛けられたの
は初めてです。」

「しかし、彼が私の嫌いなイケメンであるにも拘らず、あまり不快
な感じはしなかった。」

「何でしょうか、コロコロと変わる表情といい、感情を素直に表す
様といい、何だか大きいわんこを相手してるみたいです。」

私は、今度は此方から話しかけてみる事にした。

「そういうあなたは、何か部活やっているんですか？」

すると、しょぼんとしていた彼がバツと顔を上げ、嬉しそうに笑い掛けてくる。

おおう、ホントにわんこのようです……。

きつと尻尾がついていたなら、ぶんぶんと振れている事だろう。彼は明るい声で私の質問に答えた。

「おれは、サッカーにバスケットに野球にテニス……」

「は？ ちょ、ちょっと待ってください！？ 何で複数なんですか？」

「ん？ 別に部活は一つじゃなくちゃ駄目だって決まりはなかった筈だけど？」

「いや、確かにそうですけど……」

「おれ、体動かすの好きだからさ！」
「……………」

いくらなんでも限度というもんがあるでしょーが！

私はこめかみを押さえていた。

更に聞いた所、彼は運動部はあらかた入っているようだった。

ケツ、これだからイケメンはっ！

何で私の周りに出没するイケメンは、普通じゃないのが多いんでしょーか！

いや、イケメンな時点で普通じゃないか……。

そうこうしている内に、私達は校門の前にやってきていた。

「なあ、あんた何組だ？ おれ、一のCなんだけどさ」

彼は一年だった。

まあ、何となく予想どおりだったけど。

彼くらの変わり者だったら、他の学年にも知れ渡ってる筈ですもんね。

それがまだ広まっていないという事は、彼が新入生である証拠。

「私は…… A組です」

特進クラスはA組である。

そして、三年と言おうとして止めた。

ブレザーのラインの色を見れば、私が何年であるかは分かる筈である。

「へえ、A組か。あ、おれ部活あつから行って来るわ。校内で見かけたら声掛けてくれよ？ おれもあんた見かけたら声かけっからさ」

そう言っただけは、実に爽やかに手を振りながら言ってしまった。

おいおい、名前は訊かなくていいのか少年よ……。

あの様子だと、私が三年である事に気付いているのかも怪しそうである。

でも、三年って言わなくて正解だったかも。彼が三年の教室までやってきたら物凄く目立ちそうだもんね。

そんなこんなで、昇降口までやってきた私。上履きに履き替えようと靴を脱いでいると、

「ミカお嬢様……」

「っ!」

思わずギクーンとしてしまう。

振り返るとそこには吏緒お兄ちゃんが立っていた。

「お、おはよう御座います。吏緒お兄ちゃん」

バクバクとする胸を服の上から押さえて、引き攣った笑みで朝の挨拶をする私。

そして、吏緒お兄ちゃんが居るといふ事は、当然の事ながら彼が使えている乙女ちゃんがいる訳で、最近その彼氏となった日向君もおまけのようにくっついていてる。

二人とも私を見て、にこやかに挨拶をする。

「あはん、おはよう御座いますわ、お姉さま」

「一ノ瀬さん、おはよう」

「あ、乙女ちゃんに日向君もおはようございます」

「あれ？ 如月君は一緒じゃないの？ 一人で登校なんてバカツプルの君達には珍しい」

「うっ、それは……」

「あら、お姉さまは今、呉羽様とは会えないそうですわよ」

「へ？ 何で？」

「さあ、わたくしは杜若からそう聞いてるだけですもの」
「へえ、杜若さん、何で？」

当たり前のように吏緒お兄ちゃんに疑問をぶつける日向君。
お兄ちゃんは私の事をチラリと見ながら、フツと笑って、

「私からはなんとも……如月呉羽本人から直接訊けばよろしいのでは？」

そう言っただけ私の方に向き直ると、

「ミカお嬢様、ちょっとよろしいですか？」

ニツコリと笑う吏緒お兄ちゃんが何だか怖かった。

こういう時の吏緒お兄ちゃんには逆らわない方が身の為です……。

わたしは彼の言うとおりに、素直に後についていった。

そうして、あまり人のいない中庭へとやってきた私たち。

吏緒お兄ちゃんは先程と同様の底冷えのする笑顔を貼り付けたまま、私に言った。

それは、私の想像通りの事柄。

「如月呉羽に会いましたか？」

「んーん、会ってないよ。ただ顔を合わせちゃっただけだよ。不可抗力だよ」

「しかし、聞いた所によれば、お弁当を渡したとか……」

「そ、それは日頃の習慣で作っちゃったお弁当で、直接手では渡してないよ。地面に置いて、すぐに離れたよ」

後々考えて見れば、ここまで臆病になる事はなかったのだけれど、ニコニコ顔でちっとも目の笑っていない吏緒お兄ちゃんを前にしたらとてもじゃないけど平静でなんていられない。

私はダラダラと汗を流しながら、そんな言い訳めいた事を目の前の金髪執事に訴える。

おおう、こあいよこあいよ。暗黒ビームがビシバシ来るよう。暗黒執事リオデストロイの恐怖再び！

吏緒お兄ちゃんは私を監察するように見ていたかと思うと、すっと目を細めた。

「それですと、如月呉羽が空になったお弁当箱をミカお嬢様に渡しに来るのではありませんか？」

「そ、それだったらメールで吏緒お兄ちゃんに渡してくれるように頼みました」

ピクツと金色の形の良い眉が上がる。

「私にですか？ それはまた……フツ、まあいいでしょう。他ならぬミカお嬢様の願いとあらば、この杜若きかずにはおられません…

…」

ニツと口の端を吊り上げるお兄ちゃん。

なんでしよう……彼から、その挑戦受けてたちましよう的なオラが立ち上っているような……。

ハッ！ こ、これは、暗黒執事リオデストロイとサンバトラー呉

羽の戦い勃発ですかな！？

そ、それは……見逃せません！

私の頭の中で、ヒーロー物っぽい曲と次回予告的な物が流れてゆくのだった。

第六話：わんこな後輩（後書き）

新しいキャラ出てきたのに、名前を名乗らない展開。

「異界の旅人」も読んでくれている方は分ったでしょうが、彼は筋肉馬鹿なあの方がモデルです。

次回も新キャラ出てくるよ。

お楽しみに！

第七話：クラスメイト、カーリー登場（前書き）

新キャラ登場。

第七話：クラスメイト、カーリー登場

「おはようございます」

私は教室に入るなり、朝の挨拶をした。

そして返ってきたものは、

しーん……。

静寂だけ……いや、耳を澄ませばカリカリと何かを書いている音が響く。

つい先程まで、乙女ちゃんや吏緒お兄ちゃんと話をしていた私にとって、この静寂は逆に耳に痛かった。

ここは教室。

私のクラスメイト達は、一度此方をチラリと見た後、興味を無くした様に机に向かう。

私の事など完全無視である。

はうつ、もうちょっと反応してくれてもいいんじゃないですか？

ふえ〜ん、寂しいですう。

私はクスンと鼻を嚙りながら、自分の席に着いた。

皆さん机に嚙り付いて、参考書やら問題集などを開いて、カリカリと書いている。

いや〜、皆さん勉強熱心ですなあ。私には真似できません。

という訳で、私はオヤジ達をば……。

私はバツクの中からゴソゴソと、私のバイブル的存在の、『オヤジ達の沈黙』を取り出す。

フツフツ、今日のオヤジ達は一味違います！ 何たって、開いたそこに書かれているのは、日本語ではなく全部英語だったりするのだ！

何を隠そう、このオヤジ達は海外版！

我らがオヤジ達は、はるばる海を越えた場所でも読まれているのであるー！！

スゴイネー！！

実はこれ、私のお祖父ちゃんが送ってきてくれました。

私の祖父母は海外に住んでいるんですよ。

母方の祖母は、私が生まれる前に死んじゃってるんで、あの父の両親という事です。

あ、心配しないで下さい。至って穏やかな人たちです。

父みたいになぶっ飛んだ性格ではありませんから。

その祖父からこの前、

愛しい我が孫、ミカへ

ミカの好きだという本を此方で見つけました。

今の所、『スナイパーは夜明け前』というのと、

『君を釣ったマグロ漁船』と言う物と、

『ヒグマの鳴くコロニー』と言う三冊を手に入れる事が出来まし

た。

確か其方では十巻以上出ているとか。
他の物も見つけ次第送ります

お祖父ちゃん より

と言う便りと共に小包が送られてきた。

おおーい、おじーちゃん。何気に題名違うよー。物凄くビミョーだよー。

多分、英語の題名をそのまま直訳したんだろうけど……。
スナイパーは夜明け前つてのは、『夜明け前のスナイパー』だよ
ね！？ 君を釣ったマグロ漁船は、『マグロ漁船で君を釣る』だよ
ね！？

おまけに、ヒグマの鳴くコロニーって何！？ なんか、ひらし
の鳴く頃ののパロディっぽい題名だよな！？ ってゆーか、これに
関しては、何の話かさっぱり分からないんだけど！？

なんて心の中で突っ込みを入れつつ、お祖父ちゃんの心遣いに感
謝をした。

以前、彼の前で言ったオヤジ達の話と、実は海外版も出てるらし
いと言う話を覚えていてくれたようだ。

いやー、嬉しいなあ……。

あー、久しぶりに会いたいなあ。お祖父ちゃんとお祖母ちゃんに。
二人とも、相変わらずラブラブなのかな。

私にとって、最終的に目指すカップルの姿だよね、あれ。

ウンウンと頷きながら、私は本を開く。

え？ 英語読めるのかですって？

ええ、読めますとも！ 幼い頃からよく海外に連れて行ってもらって、一時的にですが住んでいた事もありますので、読み書きは勿論喋る事だって出来ますとも！

という訳で、私はオヤジ達海外版の『夜明け前のスナイパー』を読み始める。

え？ もう既に読んだ事があるやつじゃないかって？

まあ、それもそうなんですけど、英語に翻訳されている事によって、微妙に解釈とか違ってる事もあるので、それはそれなりに楽しみ方があるというものです。

「読書なんて余裕じゃないか、一ノ瀬ミカ。流石は学年一位。余裕だね」

まさに読み始めようとしたその時である。私はそんな皮肉めいた言葉によって、中断させられてしまったのだ。

それは私の隣の席から聞こえてきたもの。

其方に目を向ければ、先程まで一心不乱に机に噛り付いて問題集を解いていた男子生徒が此方を見ている。

彼の名前はかしやまなほ仮屋学。

その名の通り、学ぶ為に生まれて来たんでないかと思うほどに勉強熱心だ。

因みに、私が学年一位になってしまったが為に、学年二位に落ちた方です。

なんかもう、よく目の敵にされとります。何で隣の席になんぞなっってしまったんでしょー、全く……。

しかも、よく見れば顔も整っていて、磨けば相当もてそうであります。

ただ、そういった事には興味がないのか、非常にかっちりしていると云うか、お固いと言うか……。所謂、隠れイケメンというものでしょうか。

でも、そんなに嫌いじゃないんですよね、彼の事は。

他の人が無視する中、何だかんだで結構話しかけてくれるというか……。話の内容はともかく……。

なので、私は心の中で、親しみを込めて、彼の事を“カーリー”または“ガツクン”と呼んでいる。

こういった、ネチネチと嫌味を言われている時なんかは、“カーリーカリカリしちゃ駄目よ”なんて物凄く下らないギャグを心の中で言っつて、気を紛らわせていたりなんかもする。

「今まで平均点ばかり取っていた君が、よくもまあ、一位になんてなれたよね。是非とも僕にも勉強法を教えてもらいたいものだよ。とは言っつても、君の場合、人に言える勉強法なのかは怪しい所だけど……。」

フンと鼻で笑うカーリー。その目は憎々しげだ。

つまりは、「何かズルツこしていい点取ったんだらう、この恥さらしが！」と言いたいのだらう。

全く今日もカーリーはカリカリしてらっしゃる。

そんなにカリカリして疲れないんでしょうか？

そんな感じで、私は彼の事を心配してしまう。
でも、このクラスの人は全員、カーリーと同じ事を考えている
んだらうなと思って、私はハアツと溜息をついた。
そして、「ソーですね」と適当に相槌を打って、彼の言葉を受け
流す。

その瞬間、隣からは物凄い殺気が飛んできた。
かなり腹立たしいらしい。

あーもうっ！ こっちだっていい迷惑ですよ！ 特進クラスにな
んかなっちゃって……。

呉羽と……呉羽と同じクラスになりたかった……。
確かこのクラスって希望制だったですよ！？
私、一度だってこのクラスを希望した事ないよ？

一度、担任の福山先生に言った所、「間違いなく一ノ瀬は特進ク
ラスだ」と、断言されてしまった。

しかもこの先生、私わざわざと平均点とってたって何となく気付い
てるっばいんだよね。

カーツ！ これだからイケメンはっ！

そう、何を隠そう、このクラスの担任もイケメンなんだよ、コン
チクシヨー！

本名は、福山 譲あゆむ。化学を担当。

綺麗系のイケメンで、メガネを掛けている。

しかも、お洒落メガネ第二段！ でも縁無しじゃなくて銀縁だけ
ど。

クツソー！ お洒落メガネ第一段、縁なしお洒落メガネの大会
長が卒業して、メガネイケメンに付きまとわれなくなったと思っ
たのに！

福山先生のあのメガネから覗く切れ長で鋭い目は、何でもお見通しだぞと言ってるみたいでなんだか恐ろしい。

—と言うか、他の生徒からも恐れられている。

何故ならば、この先生が人前で笑った所を見たと言つる者は皆無で、それにいつも何かに怒ってるみたいに眉間に皺を寄せているのだ。

以前女子達が、「元がいいのに、あれじゃ台無しだよねえ」と話してるのを聞いた事を思い出した。

確かに、あの綺麗な顔で、全く笑わないとなると、その迫力は凄まじく、近寄る者もない。私だって極力近付きたくない。

ああ、新学期そうそう、学園生活は波乱な予感たっぷりですよ……。

「……い……おい、一ノ瀬ミカ!」

「はい!？」

物思いに耽っていた私は、青筋立てながら呼びかけてくるカーリーにハッと我に返る。

彼は、眉を顰めながら、顎をしゃくって、

「君の携帯、鳴ってるみたいだけど?」

と教えてくれる。

確かに、私のバックの中で、携帯がヴーンヴーンと震えていた。

おおう、カーリー何気に親切です……。

私は彼に、「ありがとうございます」と礼を言つと、携帯を開いた。

お？ 吏緒お兄ちゃんからのメールだ。
はて、なんざましょ？

そしてそこに書いてあったもの。

『如月呉羽が其方に向かっております。一先ず回避してください』

「何ですと!？」

私はガタンと席を立った。

そしてすぐさまハツとした。

はうつ、クラスメイト達が睨んでいる。「あんたうるさい」って顔で睨んでいます！

しかしながら、メールの内容に、あたふたとしてしまう私。

何でしょう!？ 呉羽は一体何の用事で!？

あうー、会いたい！ でも駄目！ 会ったら呉羽がお仕置きされちゃう！

「ちよつと君、何してるんだよ……」

「あうつ、ベランダに逃げ込もうと……」

私は今、窓際に座るカーリーの前を通って、窓枠に足を掛けている。

「何で逃げる必要があるんだよ……」

「諸事情により仕方なくですよ。あ、これ持ってて下さい」

私は手に持ったままになっていたオヤジ達海外版を、カーリーの机に置いた。

「ちょ、何勝手に僕の机に置いてくんだよ」

カーリーはオヤジ達海外版を手にすると、私に突き返そうとする。だけど、此方に目を向けた途端、ピシリと固まり真っ赤になって顔を逸らした。

はて、何で真っ赤に？

そう思ったけれど、急いで隠れないといけないので、「よいしょ」と言いながら窓枠を跨ぐと、ベランダで膝を抱えてしゃがみ込む。

「呉羽が来たら教えて下さい」

「は？ くれは？ それって君と恋人だとか言う如月呉羽の事？ 何でさ？」

「何でもです。お願い、ガツクン」

「なっ、ガツ！？ ガツクンって何！？ もしかして僕の事！？」

「嫌ならカーリーで」

「カーリー！？ どっちもやだよ！」

カーリーとそんな言い争いをしていると、「あ………」と声を上げるのが聞こえた。

そろっと窓から教室の中を窺うと……。

おおっ………呉羽がきちよります。

呉羽は教室前方の開け放たれた扉付近に立って、中を見回してい

る。

そして、このクラスの異様な雰囲気にもちょっとたじろいでるようにも見えた。

まあ、皆呉羽の存在なんか無いとでも言うように、一心不乱に机に噛り付いているんだから当然といえば当然かもしれません。私もそうでしたとも……。

呉羽……私分かるよ。今の呉羽の気持ち物凄くよく分かるよ……。

思わずほろりと涙が出そうになる。

しかしながら、たじろいで見せても呉羽はめげずに私を探そうとキョロキョロとしていた。

おっと、危ない。

私はさっと頭を引つ込める。呉羽が此方に顔を向けた為だ。

ムホツ、なんだかドキドキするよ？ それに、呉羽が私の事を必死に探してる……うきゃ、何だかあの時の事を思い出しちゃいます。

それは、以前この学校の生徒会長をしていた大空会長の罾により、呉羽が副会長である美倉あやめとキスしていると勘違いして屋上に身を隠した時の事です。

あの時、屋上からは私の事を必死になって捜している彼が見えていたんですね。そんな彼を見ると、嬉しくて切なくて……。

はっつ、これがもしかして初心に戻るって事でしょうか。

「おい、一ノ瀬ミカ。如月呉羽は行ったみたいだけど？」

「あつっ、もう行っちゃったんですか？」

ひよこつと窓から顔を出して呉羽の姿を探すが、そこにはもうお馴染みの金髪サイド赤は見えない。

「何で残念そうなんだ。君から隠れたくせに」

「だって、私を必死に探してくれる彼の姿って、ドキドキしちゃうじゃないですか」

「何だそれは、くだらない。そんな事の為に隠れたのか」

「いいえ、一週間は会っちゃ駄目なんです。罰ですから」

「罰？ 君、彼氏と喧嘩でもしたのか？」

カーリーは驚いた顔をしている。彼も私たちの事をバカップルと思ってるようである。

「いえ、喧嘩というほどのものでは……」

「って、おい！ 何で窓から入ってこようとしてるんだよ！ ちゃんと前から入ってこいよ！」

「えー、めんどいですし、こっちの方が早いじゃないですか」

「めんどいって……君は女だろう？ もうちょっと慎み持てよ！」

カーリーは先ほどのように顔を真っ赤にして喚いている。そして時折チラチラと視線を向ける場所を見てみると、スカートが捲れ上がり、太股が露出していた。

カーリーはそこを見て真っ赤になっていたのだ。

ほほう、カーリーってば純情少年すなあ……。

なんと言うか、懐かしい反応すなあ。最初の頃の呉羽を思い出します……。

私はよいしょと窓枠を越え終わると、捲くれ上がったスカートを元に戻しつつ、

「イヤン、ガツクンのえっち」

一応そう言っておいた。

「なっ！ えっ ……!?」

真っ赤になつて、口をパクパクさせるカーリーに、私は問題集を指差し、

「ここ、間違えてますよ」

と教えてあげると、彼はハツとして問題集に目を移し、半信半疑で私が指摘した所を見ていたが、やがて「あ……」と声を上げ、一度私の事を眉を顰めて見てから消しゴムでその箇所を消している。ついでに他の箇所にも間違えている部分を見つけ、それを指摘すると、私はカーリーにキツと睨みつけられた。

はっつ、な、何故に!?! 間違ってる所を教えてあげたのに……。

するとカーリーは睨みつけながらも何処か悔しそうに、

「一ノ瀬ミカ……君は本当は物凄く出来るんじゃないか？ この問題集、T大の入試問題だぞ？ それを、一瞬見ただけで、間違いを指摘するなんて……」

「えっと……確かに難しそうな問題解いてるなとは思ってたけど……頑張ってるカーリー見てたらつい……」

流石に不味かったかなと、しょんぼりとして答える私。

「だから、何なんだよ、その呼び名！」

彼は怒鳴りつけながらも、更にオヤジ達海外版を突き出し、

「それに君は、いつもこんな読んだのか？」

「っ！　こんなものって酷いですね。オヤジ達をこんな呼ばわりするなんて、オヤジ達に謝ってください」

プリプリと怒りながら、彼からオヤジ達を受け取ると、カーリーに何故だか物凄く疲れたように溜息をつかれてしまった。

「君と話していると疲れる。全く話が噛み合わない……」

「……でも、私はこのクラスの皆さん嫌いじゃないですよ。目的に向かって頑張ってる人は寧ろ好きです。私も目指してるものがあるので、なんかもう、同志って感じで仲間意識が芽生えますね」

何気に私がそう言うと、カーリーは私をチラリと見て、

「君が目指してるものって何？」

と訊ねてくるので、私はポツと頬を赤らめながらモジモジとして答えた。

「えっと……普通に可愛い呉羽のお嫁さんですっ」

するとカーリーが眉間を押さえて、最大級の溜息をついたのだ。

「……聞いた僕が馬鹿だった……疲れる……本当に疲れる……」

その時、今までカリカリとお勉強に勤んでいたクラスメイト達が此方を睨みつけながら、

「お前らうるさい！ 集中できないだろ！」

「そうよ！ 静かに出来ないなら、教室の外に行きなさいよ！」

等と怒鳴りつけてくる。他の生徒も「そーだ そーだ」と皆で私たちを非難する。

うおう！ ガクブルガクブル……。皆に睨み付けられてるよう。

うー……。あれ？ でも、今まで無視し続けてきたクラスメイトさん達が、怒っているとは言え、話し掛けてくれている……。

なんだろ、ちょびつと嬉しいかも……。

「ちょっ？ 何君笑ってんのさ!？」

思わずにやけてしまった私に皆が引いている。

「エヘヘー、無関心から卒業ですねえ。このまま行けば、マブだちになれるのも時間の問題かも……。」

皆が何言っただこいつという顔をする中、私は自分の席に座る。クラスメイト達も、釈然としないながらも勉強を再開した。そしてその時、またもや私の携帯が鳴った。

見れば、それは呉羽からのメールで、私はどきんとする。

く、呉羽!? もしかして、さっきの事で何か？

そう思って、メールを読んだ私は、

「何ですとう!?!」

と叫んで席を立っていた。

またもや睨まれたのは、言うままでのないのであった。

第七話：クラスメイト、カーリー登場（後書き）

今回早速出てきた新しいキャラ、カーリー登場。彼はがり勉君。他の生徒が無視する中で、何だかんだで結構構ってくれるいい奴です。

そして名前だけ出てきた担任教師。彼は白衣を着ています。

ちょっとだけ出てきたミカの祖父母の存在。

作中でも書いてあったとおり、とても穏やかな人たちです。

それからオヤジ達。海外版も出てたんだね。

ちよつと遊んでしまった。何だよヒグマの鳴くコロニーって……。

てな訳で、今回は如何でしたでしょうか？

次回は福山先生登場だよ。お楽しみに！

第八話・何じゃこりゃな三つ巴

「な、何ですと!?!」

私はその場でガタンと立ち上がり、叫んでいた。周りからの視線がチクチクと痛い。

しかし、そんな事も気にならないくらい、私は衝撃を受けていた。私の手には携帯。

そして私は今、呉羽からのメールを読んでいた。

『書店にはまだ出回っていない、オヤジ達最新巻を手に入れた。興味があれば、今日の昼休みオレのどこまで来い!』

そこにはそう書かれている。

写真まで添付され、証拠もしっかり映し出されていた。

こ、これは間違いなくオヤジ達!? しかもまだ書店に出回っていないですと!?!

た、大変です! 流石はオヤジストの呉羽! どういった経緯でこのような物を!?!

私もオヤジストとして、昼休みと言わず、今直ぐ実物を見に行かなくては!?!

私はフラフラと教室の外に出ようと歩き出す。

「お、おい! 一ノ瀬ミカ? もう直ぐホームルーム……」

そんなカーリーの言葉など聞こえない。私はそのまま廊下へ一歩足を踏み出そうとした。しかしその時、私の目の前に白い色が……。

ピシツとした清潔感溢れる白衣。紺色のネクタイ。男性的な喉仏に顎、薄い唇……。

あ、顎の所になるみ子みたいな黒子がある……。

その意外な発見に、暫しぼんやりとその黒子を見ていたら、

「……一ノ瀬、ホームルームだ。席につけ……」

ゾクリとするような美声に、ハツとして顔を上げると、銀縁お洒落メガネの奥に、切れ長で冷たい目があった。それに掛かるように、黒く艶やかな前髪。

そう、彼はこのクラスの担任の、福山先生であった。

先生は、私を中に押し込むと、後ろ手にピシヤリと扉を閉めてしまふ。

はうっ、オヤジ達が……。

「一ノ瀬……」

静かだが、有無を言わせない先生の呼び掛け。私はゆるゆると顔を上げる。

少々恨みがましくねめつける様に見てしまふ。

だってだって、この福山先生が私が特進だって言わなけりゃ、呉羽と離れ離れになる事なかつたんですよ。

今頃、呉羽に親父たちを見せてもらってた筈です……。

ううっ……でも先生、るみ子と同じ所に黒子があるなんて気が付きませんでした。まあ、こんなに間近に見る事なんて無かつたですもんね。

ムクク、福山先生は綺麗系のイケメンですから、女装すれば案外似合うかもしれません……。

ちょっとした腹いせに、私は福山先生の女装姿を思い浮かべ、思わずやけてしまいそうになるのを堪えた。

そんな私を、相変わらず冷たい目で見下ろし、

「何をしている。早く席に戻れ」

と、言ってくる。

私は一度扉の方を見てから、ハァーと溜息をつくとき、肩を落とす先生のおおりの席に着いた。

これはやっぱり、お昼休みじゃなくちゃ駄目ですね……。

あ、でも、吏緒お兄ちゃんにはれないようにしなくては……ううん、一体どうすれば……。

私はホームルームの間、吏緒お兄ちゃんにはれずに呉羽に会う方法を模索していた。

お陰で、出席を取るとき、名前を呼ばれたのに気付かず、カーリに小突かれて漸く気付いて福山先生に物凄く睨まれてしまった。

そして、ホームルームが終わって、一時限目の授業の用意をしていると、誰かが私を呼んでいる。

ハッと顔を上げると、福山先生が黒板の前で、私の名を呼んでいる事に気付いた。

はて、何ですか？

私はとことこと先生の元に行く。

福山先生は相変わらずの冷たい瞳で私を見下ろしてきた。その薄

い唇から紡ぎ出される美声。

その言葉は私を奈落へと突き落とす。

「昼休み、話があるから職員室まで来い」

ガーン！！ 何てこつたい！！ 呉羽との約束が！！

ああ、でも会っちゃいけない事になってたんだしな。吏緒お兄ちゃんに内緒で会うなんて無理っばいしな。

ああっ、でも！ オヤジ達！ オヤジ達があゝ！！

「一ノ瀬、返事は？」

頭を抱えんばかりに悩む私の耳に、そんな先生の声が届く。

私はそんな先生の質問に、小さく「はい」と返事をするしかないのだった。

+++++

オレは携帯を開き、先ほど自分で打ったメールを眺める。

うーん、ちょっと卑怯だったか？

いや、こつでもしなけりゃ、ミカはオレに会ってはくれないんじやねーか？

あの事を謝るにしろ、弁解するにしろ、まずは会って話をしない事には始まらねーもんな。

そう思って赴いたミカの教室。

しかしながら行ってみたらミカは居ないし、誰かに聞いてみたくとも、尋ねられる雰囲気じゃなかったしで、結局はメールに頼るしかなかった。

証拠の写真も添付して、後は返事を待つだけ……なのだが、いつまで経ってもミカからは何の反応も無い。

電源でも落としてんのか？

自分の教室に戻れば、会いたくない奴がいる。

そう、杜若のヤローだ。

奴は戻ってきたオレを一瞥すると、フンと鼻で笑いやがった。

きっとオレの様子に、ミカとは会えなかったのだらうと推測しての事だろうが。

何か物スゲーむか付く……。

「あれ？ 如月君、一ノ瀬さんに会って来たの？」

「あら？ でも、お姉さまには会ってはいけないのではなくて？」

首を傾げる薔薇屋敷と日向。

二人は、オレがミカと距離を置いた事を知っているようだ。

「つか、薔薇屋敷。会ってはいけないって……距離を置くってだけで、何で会っちゃいけない事になるんだよ。」

口にするのもムカつくので、オレは無言のまま席に着く。

これまたムカつく事に、席はこいつらの真ん前だ。

オレは腕を組んだまま、振り返らずに前を向き続ける。
すると、いきなりガタンと衝撃を受け、オレは其方を睨みつける
ように振り向いた。

日向が机を近づけた為、椅子の背もたれが机の側面にぶつかった
のだ。

オレはそのまま無言で睨みつける。

「うわっ、なんかすっごい機嫌わるっ！　なんか、以前の如月君に
戻っちゃってるよ！」

アハハ……いや、ごめんごめん。でもさ、何だっで一ノ瀬さんと
会えない事になっちゃってんの？　乙　薔薇屋敷さんも理由は知
らないって言うしさ。事情を知ってる杜若さんも如月君に聞けって
……」

日向の言葉はだんだんと尻窄まりになってゆく。

俺が睨みを強めたからだ。

杜若がオレに訊けだあ！？　よりによってこのオレに！！

何処までム力つくヤロー何だよ、杜若！！

それに日向！　おめーもム力つく！

今おめーは、薔薇屋敷の事下の名前で呼びそーになったろ。人の
いねー所では、すげーラブラブだって聞いたぞこら！

オレへのあてつけかってんだよ、このヤロー！

一度イライラし出すと、色んな事にム力ついてくるようで、オレ
は八つ当たりするように怒りを日向に向けている。

しかしそれは、一番そう思われたくないヤローにもそう映るよう
で、

「八つ当たりとはみっともない事をしますね、如月呉羽。ミカお嬢

様の所に行っても会えなかったのでしょうか？ ミカお嬢様はあなたにお会いになられませんよ。

まあ、どうしても必要な用事であれば、私を通してください。ちゃんと伝えて差し上げますから」

「……………」

オレと杜若の間に見えない火花が散った。

「さむっ！ 今、この教室内の温度が一気に5 は下がったよ！」

「あはん、お姉さまを巡つての男同士の戦い。泥沼チックですわ」

他の生徒もそんなオレ達の様子に気付いたのか、ハラハラとして此方を見ている。

そして、その雰囲気を打ち破ったのは、このクラスの担任で、以前もオレ達の担任をしたあの先生。病から復活した数学教師で気弱な杉本だ。

オレと杜若は睨み合いを止める。それと同時に、ガタンと席を立った。

「ああっ、如月君？ ああああの、ホームルームが始まるので席に

ヒイツ！」

教室を出ようとするオレを引き止めようと杉本が声を掛けてくるが、此方がひと睨みすると相変わらず気弱な杉本は、怯えてあっさりとい発で引いた。

目の端に、余裕の笑みを浮かべるあのヤローが映った気がしたけれど、オレは見ないフリをしてそのまま教室を出る。向かう先は屋上。オレはそこで不貞寝をする事にした。

だってよ、こんな気持ちのまま授業受けたって身に入る訳はねー

し、隠し切れないラブイオーラを放つ薔薇屋敷日向カップルと、勝てる気がしない何処までも完璧ヤローの杜若の存在がある限り、オレはどうしたってこのムカ付きを押さえる事なんか出来ねえ……。

そして、屋上にやって来たオレは、早速ふてにをしようといつもの低位置でごろんと横になるのだが、一人になる富む活よりも、ミカに会いたいという気持ちが強くなる。

ただでさえ、この屋上はミカとの思い出の詰まった場所だ。そうなって当然といえば当然かもしれない。

オレは懐から一冊の本を取り出す。

そう、オヤジ達だ。

これに釣られて来てくれるだろうか。

ぼんやりとした面持ちで、オレは携帯を取り出す。

何気なく眺めていると、不意に何故か、お袋の言葉が蘇ってきた。

『呉羽！ ミカちゃんからのメール、もう一度じっくり見るのよ！』

お袋の奴、何でそんな必死になんだ？

なんか、そのメールに隠されたミカの本当の気持ちを探れたのなんだのと……。

オレは手持ち無沙汰から、あの時のメールを開いてみた。

そこにはやっぱり、変わらず『距離を置きましょう』という文があり、こんな一文から、どうやって気持ちを探れというのか、お袋の意図が全く理解できない。

「ん？」

でもオレは、眺めていると何故だか違和感を感じてきた。

何だ？ この違和感……？

オレは首を捻りつつ、もっとよく見ようと体を起こした。

だけれど、その時丁度、ホームルームの終わりを告げるチャイムが鳴り、少しばかり気を取られていると、携帯がメールが来たとおレに知らせてきた。

ミカからのショートメールだった。

『先生に呼び出されて昼休みは行けません』

「……………」

オレは暫しそのメールを眺めていた。

そう、ミカはオヤジ達に釣られなかったのである。

「ははっ、何処まで愛想つかされてんだオレは……………」

乾いた笑いを漏らしつつ、今しがた感じたメールの違和感も忘れ、携帯を閉じてそのままその場に倒れふす。

青い空が眩しくて、オレはごろんと横を向いて、情けなくも泣きそうになったのだった。

+++++

お昼休み、Myお弁当を持った私は、うーんと悩んでいた。

「カーリー、どうしましょう。先生に呼ばれてるんですが、お昼を食べてからがいいのでしょうか」

「だから、カーリーって止めてくれよ！それに、そんなの一刻僕に聞くなよ！」

相談する相手もなく、カーリーに訊ねた所、顔を真っ赤にして怒鳴られた。

彼は自分のバックから水筒とお弁当を取り出す。

如何やらカーリーはお弁当派のようです。

「愛妻弁当ですか？」

「何で愛妻なんだよ！まだ結婚できる歳にもなってないよ！」

「カーリーは彼女もいないと……」

「なに哀れんだ顔してるのさ！君の同情される覚えはないよ！」

「では、手作りマザー弁当ですか？」

「何だよその言い方！？普通に母親が作ったでいいだろ！？」

「で？如何なんです？」

「そーだよ！母さんの手作りだよ！悪いか！」

一々真っ赤になって喚くカーリーに、私はにんまりと笑って、

「いーえー、別に悪くないですよー」

と言っておく。

するとカーリーは、ますます真っ赤になって、

「何だよその顔は！僕は別にマザーコンじゃないからな！」

「え！？ カーリーマザコンなんですかあ！？」
「何でそーなる！」

とまあ、私はカーリーをおちよくって遊んでいたのだが、

「一ノ瀬」

と不意に呼ばれて振り返ってみれば、そこには福山先生が立っている。

授業の帰りなのか、教科書などを持って私のすぐ後ろに立っていた。

わざわざ迎えに来てくれたようである。

気配もなく、怒ったような表情で冷たい瞳でこんな近くで見下ろされると、流石に怖いであります。

「ほら、先生がわざわざ来てくださってるんだから、君はさっさと行けば」

「あうっ、もうちょっとカーリーで遊びたかったのに……」

「何だよ遊ぶって！？ 僕はおもちゃか！」

「おい」

先生の低い声が響く。何だか苛立ってるように思える。

いけないいけない。カーリーと話していると、ついからかう方向にいつてしまう……。

私は今度こそからかうのを止め、福山先生に向き直る。

銀縁お洒落メガネの奥から、鋭い眼差しが私を見下ろしている。

しかしながら私はその眼差しを受け流しつつ、自分のお弁当を示し、

「あの、お弁当がまだなんです……」

「持ってきて、話しながら食べればいい」

そして、有無を言わせぬ雰囲気で、「行くぞ」と顎をしゃくって、さっさと歩き出す。

「あ、待って下さい！」

小走りに私は先生の後を追いかける。

あつつ、それにしても、先生の話って一体なんなのでしょう……

……これ以上、何か面倒な事にならなければいいのですけど……。

はつつ、でも！ この先生の話さえなければ、今頃呉羽の元に

……って、駄目駄目！

会ったが最後、呉羽が吏緒お兄ちゃんにお仕置きをされてしまふ！

あかんあかん！ その為に一週間会わない約束をしたんじゃない

ですか、私！

そうですよ！ 逆に先生に呼ばれて良かったと思わなければ！

でなければ、誘惑に負けて会ってしまったやもしれません。

オヤジ達の誘惑はそれほどまでに強いのであります！

そうして自分の中でそんな葛藤をしている間に、階段に差し掛かったのだけれど、そこで私はぎくりとしてしまう。

なんとそこに、呉羽の姿を見つけてしまったのだ。

彼は丁度、階段を下りてくる所であった。

そっちは屋上へと続く階段。彼は今まで屋上にいたようである。

お、おおおおお！！

何たる事でしょう！ 葛藤に打ち勝ちそうになった所に決心を鈍らせようと甘い誘惑がっ！！

はう〜ん、呉羽、呉羽〜！ 今直ぐ呉羽の元に〜！ ハツ、駄目です！ お仕置きが〜！！

ぬお〜！ 我慢！ 我慢です私！

幸い、あちらはまだ此方の存在に気付いていない。

何とか突破口を見つけ、この窮地を脱するのだ！！

そんな隊長の声が脳内にこだまする。

イエッサーであります隊長！

私は隠れ場所を探そうと、キョロキョロと周りを見回してみたが、そんなスパーズも物影も存在しない。

突破口は、見つける物ではない！ 造り出すのだ！！

またもや隊長の声が聞こえて来る。

あい！ またまたイエッサーであります隊長！

心の中で敬礼をしつつ、私は目の前を歩く福山先生に目がいった。

突破口みーツけ

私はトタタツと先生に駆け寄ると、彼の白衣の裾を掴み、ガバツと捲り上げた。

「いやくん、えっち！」とこれがスカートならば悲鳴を上げられている所であるが、これは白衣。

福山先生はピタリと立ち止まると、切れ長の目を見開き此方を振り返る。

私は構わずバフツとその白衣を被ると、二人羽折り宜しくで先生にぴったりと体を密着させた。

「おいつ、一ノ瀬」

『すみません、先生。匿って下さい』

「匿う？」

先生は訝しんだ後、前方にいる呉羽の姿を見て、目を眇めた。

果たして先生が、私が彼と付き合っている事を知っているのかどうかは分からないけれど、察して協力してくれればと願うばかりである。

しかし！ しかしでありますよ、皆さん！

もう少して呉羽をやり過ぎせると思った瞬間、先生ってば白衣をバサツと広げてしまったんであります！

そして先生は、あわわと焦っている私を冷たく見下ろし、銀縁お洒落メガネをクイツと上げると、ゾクリとする美声で一言。

「下らん痴話喧嘩に私を巻き込むな」

おまけに、フンと鼻で笑いやがったのであります。

下らんって……ムキー！ 痴話喧嘩じゃないし、下らんくもないんだもん！

私が抗議しようとした時、

「ミカ！？」

突然呼ばれた私。

それは、愛しい愛しい彼の声。その声で名前を呼ばれるのはとても嬉しい事。

しかしながら、それはこんな状況じゃなければの話である。

ギギツと其方に顔を向ければ、何とも表現しようのない、色々な感情の混じった複雑な表情を浮かべる呉羽が。

そして彼の目は私と福山先生を見つめ、表情が更に複雑なものになる。

その時、更に不味い事に、呉羽のその向こうで彼の教室から吏緒お兄ちゃんが出て来たのだ。

ぬ、ぬぬぬうわんてこつたい！！

吏緒お兄ちゃんはすぐさま此方に目を向け、少しだけ目を見開くと、すぐさま無表情となり、右手の手袋を左手でギュイツと引っ張ってギリリツと右手を拳の形に。そして逆の手もまた同じようにして静かに此方に向かってこようとしていた。

や、やる気ですな、お兄ちゃん。呉羽にお仕置きを……。

でも、吏緒お兄ちゃんも呉羽もなんか、福山先生を睨んでいるよ
うな……って、ハアッ！！

そ、そうだった、私今、先生にしがみ付いている！

そうなのだ。私は福山先生の白衣に身を隠そうとしていた為、先生にびつとりと引っ付いた状態であった。

つまり、

私にしがみ付かれています冷たい表情の化学教師に、それを真ん前で目撃してしまっている今会ってはいけない私の恋人に、

更にそれを少し離れた場所でのその全容を目撃した何だかやる気のない金髪執事、

という、何とも奇妙な三つ巴状態に……。

……………チーン。

な、ななななんじゃこりゃー！！

そんな叫びが私の脳内に響いたのであります。

第八話・何じゃこりゃな三つ巴（後書き）

カーリーはある意味、ミカのおもちゃ？

そんでもって、担任教師、出てきました。

美形だけど怖い。誰も近寄らない。

そんな彼ですが、ある秘密があります。

次回はそんな福山先生の秘密が……。

おまけに、ミカと呉羽の仲にも亀裂が！？

そんな感じでお楽しみに〜。

第九話：担任教師は 好き

屋上で不貞寝をしていたオレは、こんな気持ちのまま大して眠れる訳も無く、携帯のゲームをしながらごろごろと無駄に時間を過ごしていた。

そんなオレの耳に昼休みを告げるチャイムが鳴り響き、更に憂鬱になる。

しかしながら、こうしてごろごろと何をしていなくても、十代の若さつてのは自然とエネルギーを消耗するもので、オレの腹は空腹を覚えていた。

「あー、教室でっ時、弁当も持つてくりやよかつたな……」

教室に向かえば、あのム力つく金髪執事に会う事になる。それに何より、あの弁当はオレにとって最後の弁当になるかもしれない。

そう思うと余計に教室に向かうのが億劫になってくるのだった。

けれども腹の虫は早くと急かし付け、オレは体を起こすと、重い足取りで屋上を出る。

階段を下りてゆくと、目の端に白衣を着た教師の姿が映る。別に珍しい光景ではない。

オレは教室に向かおうとその教師とすれ違う事になったのだが、急にその教師がバサツと白衣を広げたのだ。

その教師は何かをボソボソツと言っていたのだが、オレはその教師の広げた白衣の中を見て我が目を疑った。

「ミカ!？」

そう、そこにはぴったりとその教師にしがみつくミカの姿があったのだ。

ミカの姿を見て、嬉しさや寂しさやら、色んな感情が湧いて出たが、

な、何だこれは！？ 夢か！？ 幻か！？
だとしても何で教師にしがみ付いてやがんだ！？

オレは教師の顔を見て更に愕然とする。

た、確かこいつは、ミカのクラスの担任で、福山つつたっけ？
愛想の欠片もねー教師だが顔はいいって、女子どもが騒いでんのを聞いた事あつけど……。

オレはもう一度改めてミカを見てみる。

不安そうにオレを見つめ、そして視線を外し、更に請う様に担任教師を見上げている。

その視線を外した時、オレの後ろを見ていたなんて知る由も無い。そこに金髪執事が迫っている事など……。

まあ、知った所で、結果は変わらなかったのだろうが、オレはミカが自分以外の男に縋り付いているのを見て、今までの苛立ちも合わさって、物凄い腹立たしくなったのだ。

そこでオレは、

「おい、ミカ！ お前何してんだよ！」

そう怒鳴って、ミカの手を掴もうとした。
しかし、

「ニ、ヤーーー！！！」

パシィッ！

ミカが奇声を発してオレの手を叩き落とした。
一瞬オレは、何をされたのか理解できない。
呆然とする中、ミカが真っ赤な顔で、

「だ、駄目ですニヤン！」

と叫ぶ。

ニヤン……これは切羽詰ったり必死になつて居る時に出てくる口癖だつてのは、ミカと付き合つて居る中で分かつてきた事。

ミカは今にも泣きそうに、クシャリと顔を歪めると、何か言いたそうに口を開けたり閉じたりしている。

すると、今まで無言だつた化学教師の福山が、グイッとミカの腕を掴んだ。

「行くぞ、昼休みが終わつてしまふ。いつまでもこんな下らん事で無駄な時間を過ごすつもりは無いぞ」

「えっ、あ……」

半ば引きずるようにミカを連れてゆく福山。

「お、おい」

オレは引き止めようとして、そのまま言葉を詰まらせてしまふ。
何故なら、福山が此方をじろりと睨みつけたからだ。
そして冷たい声で、

「教師として一言いっておくが、諦める事も時には大事だぞ」

そんな事を言っつてフンと鼻で笑つと、そのままミカを連れて階段を下りて行つてしまつたのだつた。

「……………」

呆然とその場に立ち尽くしているオレ。ふと自分の手に目を移す。大して痛くなかつたが、ミカが拒絶したその手は僅かに震えていた。

「これで分かつたでしょう?」

いきなり背後から声を掛けられ、ビクリと肩を震わせてしまつた。

「杜若……………」

今一番聞きたくないヤローの声だ……………。

「ミカお嬢様はあなたを拒絶した。つまりあなたはもう必要ないと
言う事です」

その言葉はグサリと胸に突き刺さつた。

「……………これからは私がミカお嬢様をお守りします。ですので、あなたはもう、ミカお嬢様……………いえ、ミカに会わないでいただきたい」
「っ……!」

オレはバツと振り返つて奴を睨みつける。

しかし、何処までも真剣で真つ直ぐな奴の瞳に、オレはすぐに目を逸らしてしまつ。

確かに、ミカはこいつと居る方が幸せなのかもしれない……。でも……。

ギリツと拳を握り締め、歯を食い縛る。

やがてフツと力を抜き、弱々しく笑うと、諦めたようにオレはこう言った。

「分かった……ミカとは会わない……」

すると、一瞬目を見開かせた杜若は、ホツとしたように小さく息を吐いた後、ニツコリと笑って、

「それを聞いて安心しました。実力行使も厭わない所でしたので……賢明な判断です。」

では、あなたのお話はここまでで致しましょう。私は先程の教師の件でミカを問いたださねばなりませんので」

そう言って、優雅な所作で礼をすると、オレの脇を通って行ってしまった。

オレは近くの壁に寄り掛かると、ハァーと溜息をつく。

「ああ、また振られちゃったな、オレ……」

ミカとはそんな事ないと思ってただけだな……。

+++++

私の目の前には、福山先生の白衣に覆われた背中。

腕を掴んで歩いていながらも、此方の存在など全く無視したような歩み。

殆ど駆け足のような状態で、私はその背中に必死についてゆく

「ちょ、ちよつと先生!? はやっ、歩くの速いです んぶっ!」

先生は私の言葉に答えたからなのか如何なのか、いきなり立ち止まり私は彼の背中に見事にぶつかつた。

あううっ、い、いたひですっ! 鼻ぶつけまひた……。

涙目で鼻を押さえていると、福山先生はゆっくりと此方を振り返つた。

途端に、ビシィツと固まる私。

こ、こはひ……。

今の福山先生をどう言つたらいいものなのか、ズウオオオオンと音が付きそうな位、何だか只ならぬオーラが噴き出している。

しかも、その眉間を走る縦皺は、いつもより数本多く、その目は冷たいなんてもんじゃなくて、極寒の地を思わせるブリザードの如く冷えに冷え切っていた。

「にゃ、にゃにゃにゃにゃにゃんですかっ!?!」

恐怖のあまり、プルプルと細かく震えながら、涙目で思わず去年の夏休みの負の遺産たる猫語まで使ってしまう。

だがしかし……。

「びっ!?!」

これ以上もう怖くなりようが無いと思われた福山先生の顔が、ますます恐ろしい事に……。

なんと皆様……彼はその表情で唇の端を持ち上げて、ニヤツと……ニヤツと笑ったのでありますよっ！

これはもう、怖いなんてもんじゃありません！ 恐ろしすぎますっ！

あうあう、こあいよこあいよ、呉羽んここに行きたいよ。

私はますますプルプルと震えてしまう。

すると、福山先生。これまた恐ろしく低いバリトンの声で、「おい……」と声を掛けてきた。

ぎゃひひ！ うわ〜ん、呉羽〜、助けて〜！！ 吏緒お兄ちゃんでもいいから〜！！

しかしながら、返事をしないことにはこの状況もこのままな訳で、私は消え入りそうな声で、「ひゃひ……」と返事をした。

すると先生はピクツと眉を動かして、またもや低い声でボソリと言う。

「……それは何だ……」

「ふあい？」

「だからそれだっ！」

「にゃっ……」

いきなり声を荒げるものだから、またもや猫語を発してしまった。同時に身体も縮込めてしまう。

福山先生はヒクリと口の端を引き攣らせると、

「……………何故猫語なんだ……………」

「へー!?」

「……………それに、何故微妙に震えている……………」

ソレハアナタガ、死又程恐ロシイカラデス……………。

「……………何故涙目なんだ……………」

恐ロシクテ、泣キソウナノデス……………。

「チワワの様に震えながら、猫語を話すとは何事だっ!!」

「ぬへええええええ!?!」

お、怒ってるのそこお!?!

先生は、教科書を小脇に挟み、自分の両手を眺めながら深刻そうに……………と言つか、何かに耐えるように、

「チワワと猫……………二つの可愛い生き物を一辺に表現するとは……………先程も見事な猫パンチだった……………」

「……………はい?」

先程? 猫パンチ?

……………ああ! 呉羽の手を叩き落としちゃったあれか!

アハハ、あれが猫パンチかあ って、えええええ!?! 何言ってるの、この人!?!

それで何でここまで怒ってるの!?! 嫌いなもの!?!

そう思って、怖いけど恐る恐る訊ねてみた。

「あの、福山先生って、チワワとか猫とかが嫌いなんですか？」

すると、福山先生は少しばかりキョトンとした顔になって首を振る。

「いや、大好きだが？」

「ええ!？」

「まあ、小さい生き物は皆好きだ」

じゃあ何でそんなに怒った顔してんですかね、この人！

福山先生は、再び両手を眺めて、その手をプルプルと言わせてきた。

「あのような可愛い生き物は、こう、思い切り抱き締めたくなくなるじゃないか……」

「は、はあ……」

「しかし、抱き締めたら抱き締めたで、愛しさのあまり抱き潰してしまいそうじゃないか……」

「……えっとじゃあ、何でそんなに怒ってらっしゃるんです？」

「怒る？ 私は怒ってなどいないが？」

「え？ でも、眉間に皺がいつぱい……」

「眉間？」

福山先生は不思議そうに、自分の眉間に触れる。そして、「ああ」と頷きながら眉間をゆるゆると揉むと、

「これは、思わず抱き締めて頬擦りしそうになる衝動を抑えていただけだ。人前で……しかも、生徒の前でなど、できる訳がないだろ

「う
……………」

つまりあれか？ その顔は必死に我慢してる顔だと？
抱き締めて、頬擦りしたくなるのを？
何を？ ……いや、誰を？

……………チーン。

私かあつー！！

私はズザザツと先生から後退る。

いーやー、こないでこないでえ！

ふわーん、呉羽あー！ ここに変態さんが居るようー！！

「一ノ瀬！？ 何でそういう所まで他の犬や猫と同じ行動をとる？」

少々ショックを受けた顔をする福山先生。つまり、犬猫を前にして、同じような顔をし、そして逃げられたようだ。

そりゃ当然だね。そんな恐ろしい顔で近付かれたら、どんな人懐こい犬猫でもそりゃ逃げるっしょ。だって、怖いもん。

だから私はきっぱりと言ってあげた。

「先生のその我慢顔が、死ぬ程怖いからです！」

ビシッと指を突きつける先で、先生はピシりと固まった。

あ、もしかして傷付いた？

やっぱり、面と向かって怖いと言っるのはなかったでしょうか……。でも誰かが言っただけじゃないと……。

それにしても、先生が犬猫好きとは……いや、可愛い生き物好き？どっちにしる以外です。

しかも、抱き締めて頬擦りとは……ハアツ！ 駄目だ！ 想像できないであります！

その顔で頬擦り？

……。

こわっ！ すっごい怖いって!!

「そ、その我慢顔を止めれば、に、逃げなくなるのでは？ きつと近づけるようになりますよ。頬擦りも思う存分出来ますって」

「本当か!？」

「ふにやああああ!!」

だからその顔で近付かないでえええ!!

私はまたズザザツと後退る。

先生はハツとなって、自分の顔を撫で、

「いや、すまない。そうか、顔か……自分では気付かぬものだからな。盲点だった……」

そしてぶつぶつと呟きながら、

「フム、我慢顔を止める……我慢するのを止めるんだな？ しかし、人前で締まり顔にならないようにと、常日頃から気を使っているか

らな……」

「それですよ！」

「は？ 何がだ？」

「先生、生徒達からも恐れられているんですよ！」

「それは教師としては……」

「違いますよ！ いつも怒ってる顔してるから怖いんですけど！」

「ここは普通に、そうもつと普通に！ そう！ 心をオープンに表情も開放しましょう！」

私は、この恐ろしい顔から開放されたくて必死であった。

だから、先生が今何を我慢してこんな顔になっているのか忘れていたのだ。

「心をオープンにか？」

「そうです、オープニング、カモン！」

グツと力を込めて言うと、先生は一度眉を顰めてから、キョロキョロと周りを見回し、「人は居ないな」と呟いてから決心したように頷いた。

そして、もう一度顔を一撫でした後、フーと息を吐き出し、ついでに肩の力も抜いて、福山先生は微笑んだ。

そう、微笑んだのだ。

その笑顔たるや、元々綺麗過ぎる顔をしている為に天使も斯くやと言うほどの聖なる微笑。

今までの恐ろしさが嘘のように、何の穢れもない心が洗われる様な、そんな微笑を浮かべているのだ。

流石の私も、その笑顔には身動きが取れなくなってしまうた。

本当に、無邪気という意味を、私はその笑顔から学んだような気がした。

なので、先生が此方に向かつて、両手を広げた時も、その腕に抱き締められた時も、全く反応できなかった。すりすりと頬擦りされ、互いのメガネが力チャリと当たる。

私の愛する普通メガネが、腑抜けた銀縁お洒落メガネと禁断ランデブー……。

ゾワゾワツと鳥肌がたつて漸く我に返る。

「ニヤァー！！ はーなーしーてえー！！」

「おお！！ 本当に逃げられずに抱き締めて頬擦りできている！」

先生は以外にもあっさりと放してくれた。

興奮に頬を紅潮させ、喜びいっぱいという顔をしており、今までの恐ろしい顔が嘘のように、キラキラと輝いている。

世の女性たちが見れば、一発で惚れてしまうこと請け合いだ。

姉なんぞが見たら、『いやーん、聖天使様あー！ メルヘーン！』とかつて言いそうである。

「そうか、この調子で他の犬猫にも接すればいいんだな？」

いまだ抱き締められて頬擦りされたショックの拭えない私の前で、福山先生は自分の両手を眺め、自信に溢れた顔で「これで、愛しのジャクリー又にも頬擦りできる……」と呟いていた。

ジャクリー又って何でありますか……。

そんな私の素朴な疑問を余所に、目の前の銀縁お洒落メガネのイケメン化学教師は、私の頭に手を置くと、

「良いアドバイスだった、礼を言う」

そう言って、犬猫にするように私の頭をわしゃわしゃと撫で繰り返したのであった。

第九話：担任教師は 好き（後書き）

抱きついて頬擦りしてますが、福山先生は変態ではありません。ただ犬猫が好きだけなんです。ミカの事は全然女性として意識していません。

普段目つきが悪いのは、ただ生徒に舐められちゃいけないという考えから、顔の筋肉を引き締めている為です。前のミカの担任の杉本先生は福山先生にとって反面教師だったりします。

因みに彼の女性の好みは、清楚な大和撫子。和風美人が好きなんです。ね。

結構大食いで、両生類と爬虫類が大嫌いです。

第十話・その想いは甘く痺れて……（前書き）

今回は、吏緒お兄ちゃん視点から始まります。

第十話：その想いは甘く痺れて……

「分かった……ミカとは会わない……」

そう言った如月呉羽を、私は半ばホツとした面持ちで眺めた。いくらミカお嬢様の為とはいえ、彼を騙すようで少々良心が痛む。しかしながら、後悔はしていない。これで、ミカお嬢様も早く彼を諦める事が出来るだろう。

例え、彼女がどんなに傷付く事になつたとしても……。

その際は、私があなたを支え守りましょう。私の想いで包み癒しましょう。

如月呉羽と同じ位……いえ、それ以上の想いであなたを愛します。

だからどうか、あなたも私を想ってください。少しでもいいから、私の事を見て下さい。ミカお嬢様……。

私の行動は、薔薇屋敷の執事としては失格だろう。

本来の主人を放り出し、己の気持ち優先してしまっている。

しかし、私を突き動かすこの想いは、誰にも止められぬ物……そう、私自身でさえも……。

否、止める気などさらさら無い。

甘く痺れるこの想いは、まるで……。

「そう、まるで麻薬のようですよ、ミカお嬢様……」

一人彼女を追う私は、その様に眩く。自嘲気味に笑いながら。

きつと私のこの想いは、ミカお嬢様……全てをあなたに晒すには少々重いやもしれません……。

だから、小出しに致しましょう。

少しづつ少しづつ、貴方が慣れるのを待ちましょう……。

それにしても、ミカお嬢様の担任の教師、福山譲。

何やらモヤモヤとする。

職員室に行くという話だったとお嬢様に付けさせている私の部下が言っていたにも拘らず、職員室にはまだ姿を現していないようなのだ。

ミカお嬢様がよもや、教師と禁断の恋に落ちるなど考えられないが、あの教師の顔を見て、少々不安を拭えないでいた。

あの教師は容姿が整いすぎている。

ミカお嬢様は何処か、そういった人間を引き寄せる何かを持っているようだ。

そして、その人間を虜にしよう。

あの教師とて例外ではないかもしれない。注意深く見ていなければならぬ。

新たな虫は、早々に駆除せねばならぬだろう。

部下からの連絡で、人通りの少ない特別棟の方に居る事が判明。

何故そのような場所に!?

よもや、私の不吉な予感当たってしまったのか……。

お嬢様につけていた部下を問いただしてみても、何やら歯切れの悪い返事が返ってくるだけ。余計に私に苛立ちと不安を与えた。

「ミカお嬢様!」

そうしてミカお嬢様の居る所まで辿り着いた私。ミカお嬢様はやはり福山譲と共に居た。

ミカお嬢様は、ハツとした様子で、何処か動揺した面持ちで私を見ている。

……やはり何かあったのか……?

「あ……う……吏緒お兄ちゃん?」

「……………」

ミカお嬢様の隣で眉間に皺を寄せ、私を無言で冷たく見返す福山譲。

私は彼を軽く睨みつけながら、ミカお嬢様には優しく語りかけた。

「ミカお嬢様、おだ昼食を済ませておられないのですか? もうお昼休みは終わってしまいますよ?」

すると彼女は、「ええ!？」と驚いた顔をして、携帯を取り出し時間を確認している。

「うわっ、本当です！ 先生、どうしますか!？」

「ああ、本当だな。私から呼んでおいてすまなかった。この時間では大して話も出来ないだろう。お前は教室に戻って、弁当でも食べ」

「えっと……はあ」

「その代わり、放課後は残れ。とても大事な話だからな。忘れて帰るような真似はするなよ。いいな？」

「は、はい……」

有無を言わせぬ上から押さえつけるような言葉。生徒に向けるには冷た過ぎるのではと思われるその視線。

到底、私の危惧しているような感情は無さそうに見える。

そのまま白衣を着たミカお嬢様の担任教師は、振り返りもせず去っていった。

ふとミカお嬢様に視線を移すと、何故か彼女は眉を寄せ、思案顔でブツブツと呟いている。

「……うーん、大事な話ってなんだろう？ それにあの変わり身……他の人にはまだ見せたくないのかな……？ 本当は照れ屋とか……？」

私はそんな彼女に声をかける。

「ミカお嬢様、実は私もお話があるのですが……」

「はい？ お話？」

首を傾げる彼女に、私は意を決し泣かれる覚悟でその事を告げた。

「如月呉羽はミカお嬢様ともう会われないそうです……」

「え？ そうなんですか!？」

「ミカお嬢様は、ただ吃驚した顔をしたただけであった。拍子抜けするほどあっさりとした反応。」

「あの、お嬢様……？」

「そっか、お兄ちゃんから話してくれたんですね？ 一週間会っちゃいけないって！ さっきみたいに、呉羽から近付かれたんじゃ、私防ぎようが無いですもん」

「いえ、その……それはちが」

「ありがとう、吏緒お兄ちゃん！ 大好きです！」

「っ！！」

ニッコリと満面の笑みを浮かべ抱きつく彼女に、これ以上何を言えるだろうか……。

おまけに、「大好き」とまで言われて私は舞い上がってしまった。全く、ミカお嬢様を前にすると、まるで初恋をしている少年のようだ。

おまけにここは学校、それがその事に拍車を掛けているのかもしれない。自分が同じ学生に戻ったかのような、そんな錯覚を……。

私はミカお嬢様が無邪気に抱きついてくるのをいい事に、思い切り抱き返す。

「私も、大好きですよ……」

「うえ！？ えへ、えへへ」

照れて笑う彼女が可愛くて、その頭の天辺に口付けを落とす。きつと、私が本気で告白した事なんて気付いていないのだろう。

今はまだいい。

如月呉羽の事も、私の気持ちの事も……。

少しづつ解らせていこう……。

今はこの笑顔が独り占めできるだけでいい。

+++++

あつっ、なんと言うのでしょうか、物凄くドキドキします……。
いやあ、抱きついたのは自分からなんだけどさ。

その後思いがけずウキユツと抱き返されて、「大好きですよ」と
言われて、おまけに頭にチューなんて……。

噴く！ 鼻血を噴いてしまふ！

もー、何でもこうお兄ちゃんはお色気むんむんなんでしょっか。

これでサングラスにオールバック、全身黒尽くめだったら……私
は今この場で死んでもいい……。

それにしても、吏緒お兄ちゃんから呉羽にちゃんとやってくれた
なんて……。

もう、あんなあからさまな拒絶なんかしたくないですもんね。あ
の時、呉羽ちよっと傷付いた顔してましたもん。

好きな人にあんな顔させたくないですもんね。

お兄ちゃんだったら間違いないです！

はうっ、これですいでに呉羽の持っているオヤジ達最新巻の事も
何か分ければ……。

「お昼に致しましょうっか」

吏緒お兄ちゃんが告げる。

「うーん、でも乙女ちゃんはどうしたんですか？」

「それならば、事前に私の部下に頼んでありますから」

「そう、なんですか……？」

それって、乙女ちゃんの執事として如何なんだろう？

思わず、首になってしまわないのだろうか、と心配になってしま
う。

その事を試しに聞いてみた所、

「その時は、私は正式にミカお嬢様の専属の執事となれますね」

と何処か嬉しそうに笑って言った。

ええ！？　って、それって駄目じゃん！　私執事雇うお金なんて
無いよ！？

我が家は父と母がお金持ちなんであって、私は月一万のお小遣い
で足りない分は何かバイトでまかなっているただの高校生だよ！？

すると、眉を顰めていた私に、吏緒お兄ちゃんは寂しそうな顔に
なって、

「ミカお嬢様は、私が専属執事ではお嫌なのですか？」

「ええ！？　いえ、そういう訳では……」

「私がお傍にいるのは、迷惑ですか？」

「そんな！　迷惑なんて、とんでもない！」

と言うか、その捨てられた仔犬のような顔は止めて下さい。

思わずきゅんとしてしまいましたとも。

あのクールで渋いスナイパー渋沢が、こんな顔をするなんて……。

これが噂のギャップ萌えというやつですね？

とまあ、そんなこんなで、私はこの特別棟の一角でお昼を食べる事になりました。

吏緒お兄ちゃんが何処からか持ってきてくれた椅子に座り、MYお弁当の、定番のタコさんウィンナーやら甘口玉子焼きをモゴモゴと頬張っていると、マジシャンのように何処からとも無くお茶を出して私に差し出して来る。

「どうぞ、玉露ですよ」

「あ、どうもです、お兄ちゃん」

いつも思うんですが、何処にそんな急須やら湯呑みやらを隠しているんですか！？

そんなスペース、そのぴったりとした燕尾服に無いよね！？

その摩訶不思議たるや、我が学校の七不思議の一つに連ねても可笑しくないよ！？

心の中ではそんな突っ込みを交えつつ、表面では何の変化も無い様に玉露を啜る私。

ホッと一息ついて、再びMYお弁当のミニハンバーグを頬張って、ジーンとお兄ちゃんを観察していると、今度は彼はナイフを取り出し、そしてりんごも取り出し、むきむきと皮を剥いている。と思ったらすぐに剥き終り今度は桃とかオレンジとかブドウとか……。

それはもう、見事なフルーツカッティングの技術を見せ付ける吏緒お兄ちゃん。あっという間に綺麗に盛り付けて、「デザートです」と言っって私に差し出して来る。

だから、そんなフルーツ何処に隠し持ってたの？ 吏緒お兄ちゃん……。

そんな疑問を心の中で呟いている時、吏緒お兄ちゃんが私の顔をじっと見てクスリと笑うと、

「ミカお嬢様、口の端にソースが付いていますよ」

「え！？ 本当ですか！？」

私は指摘され、舌で舐め取ろうとした。舌先に甘じょっぱいソースの味を感じたが、

あ、これは広がったっばい？

私は今度は指で拭おうとした所、その手を掴まれてしまった。

「吏緒お兄ちゃん？」

見上げると、驚くほど近い青い瞳。

ハッ、いけない！ 石化ビームが！！ と言っか、近づいて！
何でこんなに顔が近い……チーン。

ハアッ！！ まさかあ！！

舐める気ですか！？ 舐める気ですかー！！

この前の頬っぺチューを思い出してそう思った私、心臓は爆発寸前である。

うつきゃ〜！ 駄目だぞミカ！ あなたには呉羽と言っステキングな彼氏が居るんだから！

と、自分に言い聞かせ、ミハー心を抑えようとする。
しかし、そうしている間にも、吏緒お兄ちゃんの顔が近づいてきて、何だか拒む事が出来ずに、ギュツと目を瞑ってしまっていた。

「駄目ですよ、ミカお嬢様。手で拭おうとなさっては……綺麗な手が汚れてしまいます」

そんな言葉が、息が届く位に近くに聞こえる。

だがしかし、いつまで経っても、私の予想していたような事は起きず、代わりに唇に押し当てられるサラリとした柔らかな布の感触。その感触は、優しく私の唇を拭った。

パチリと目を開けた私。

やっぱり物凄い近い位置に吏緒お兄ちゃんの顔があるのだけれど、その青い瞳は、今拭っている行為に集中しているようだ。

ああああ！ 私ってば、なんて事を想像しちゃってたんですか
あー！！ 全くもー！

羞恥心と自己嫌悪に、アワアワとしていた私に、ハンカチをしま
って吏緒お兄ちゃんがひたと私の目を見据えてきた。

「どうしたんですか？ ミカお嬢様」

「おおお兄ちゃん！ な、何でもありませんよ！」

かなりどもってしまった。

おまけに、顔も真っ赤にしています。

するとお兄ちゃんは、クスリと笑って、まるで何でもお見通しで

すよって顔をして、

「もしかして、舐め取って欲しかったんですか？ 駄目ですよ、そのようないけない事を考えては……」

「……っ!!」

ズキーンとね、今ズキーンと打ち抜かれてしまいましたよっ！
流石はスナイパー……。

もー、ほんとにこの前からどうしちゃったんでしょー……お色気が、半端無いです……。

吏緒お兄ちゃんがお色気を駄々漏らせたお陰で、教室に戻ってきた私にカーリーが、

「どうしたの君、顔が真っ赤なんだけど！ 熱でもあるんじゃないの!？」

と、吃驚&心配をされてしまいました。

あっつ、カーリーやっぱり何気にいい人です。

「カーリー、大丈夫ですよ。心配してくれてありがとう御座います」

一応礼を述べた所、カーリーは顔を真っ赤にして、

「なっ、何を言ってるんだよ！ 僕が君の心配なんかする訳ないだろ!?! 君が風邪でもひいたら、隣にいる僕が真っ先につける可能

性があるじゃないか！」

「またまたあー、そんな事言っちゃってえー。カーリーがツンデレなのは分かりましたから」

「誰がツンデレだ！ 僕はツンでもデレでもない！ オールマイテイ無関心だ！」

「はっはあ！ オールマイテイ無関心！ 面白い事言いますねえ。

今度使わせてもらっていいですか？ 10円払いますから」

「何だよ10円って！ 売り出した覚えは無いよ！」

「えー、じゃあ20円ですか？」

「だからっ！ はあー、何やってんだる僕……」

酷く肩を落とすカーリー。急激に熱が冷めたようだった。そんな彼に、私はポンと肩を叩いていつてあげる。

「ドンマイ、カーリー」

ビシッと親指付きだぞ 贅沢者め

「君が言っなあ！」

そんな感じでお昼休みは終わったのでした。

そうして放課後。私は福山先生と約束したとおり、教室に居残っていた。

先生は、教室に私以外の生徒がいなくなった所で、私の前の席に

座る。

そして懐から茶封筒を取り出し、私に差し出してきた。

「昼休みの礼だ……」

ええ！？ まさかお金！？

イヤイヤ、教師が生徒に謝礼にお金を出すなんて、言語道断ですって！

しかし、先生が言う所には、お金ではないとの事。

「もっといい物だ」

そんな事を言うので、警戒しつつも茶封筒を開け、中身を取り出しました。

写真である。

「……………」

私は無言でそれを見つめ続けてしまいました。
何故ならそこには、真っ白でふわふわな毛並みの、青い目をした可愛らしい猫が写っていたから。

「あの、先生これは……………」

「ジャクリーヌだ」

ジャ、ジャクリーヌ……………昼間言っていた名前です。

「渾身の一枚だ……………」

いや、確かにべらぼうに可愛い一枚ではあるけどね!？
小首を傾げて、クリツとした目で此方を見ている様はとっても可愛いよ？

でも、お礼に普通、猫の写真を渡すだろうか……。

まあ、くれると言うのであれば、ありがたく貰っておくけど……。

「分かりました、お礼と言われるほど何かした覚えはありませんが（逆にされた感は大いにあるけど）、遠慮なく受け取っておきます。可愛い猫ちゃんですね」

「ああ、ジャクリー又は世界一可愛いんだ」

私が猫を褒め称えた途端、福山先生はほわつと嬉しそうに笑ったのです。それはもう、天使も斯くやというあの微笑で……。
本当に好きなんだなあと思わせる笑顔だ。

という事は、昼間のあれは、このジャクリー又の代わりにさせられた訳ですね？

何とも迷惑な話です。

お陰で、私の大事な普通メガネが、銀縁お洒落メガネと禁断ランデブーなどをしてしまったんですよ！

とまあ、こんな事を考えていると、先生は天使の笑顔を引つ込め、代わりに銀縁フレームをクイツと上げながら、ボソリと一言。

「二人きりの時は、猫語で構わないぞ……」

その頬は何処かほんのりと赤く染まっていた……。

って！ 何言ってるの!？

思わず、身体を仰け反らせて引いてしまいました。

何だこの、二人の時は名前で呼び合おう的な秘密の恋人風なノリは！？

「い、いえ……猫語はちょっと……。それよりも、話って何ですか？」

私はこの奇妙な雰囲気を払拭しようと、本題に入らせてもらおう事にした。

先生は、「ああ」と頷くと、私に再び茶封筒を渡してくる。

こ、今度は一体何！？ 猫の次は犬だったりして……？

しかし、中を見た私は、ピシリと固まった。

「それ、お前だろ。一ノ瀬」
「……………」

私は何も言えなかった。身動きも取れなかった。

封筒の中身は写真。

それも、私の写っている物。

だが、ただ私が写っている物であれば、ここまで固まる事は無かっただろう。

それは、私が姉の店でバイトをしているときの写真。つまり、ロリータ姿の、ノンシールドの私であった。

「ネットで、可愛い生き物を探していたら、偶然にもそれを見つけってしまった。それは、お前で間違いないな、一ノ瀬……………」

「……………」

私はゆっくりと顔を上げ、福山先生を見た。
銀縁メガネ越しにひたと此方を見据えられ、有無を言わせぬプレッシャーを感じる。

「そして去年、この学園内を騒がせた、鳥の巣クラッシュャーもお前だな……………」
「っ！！！」

私は金縛りが解けぬままに、目を見開いた。
それを肯定と受け取った福山先生は、一人納得したように頷くと、
「私の推測は間違っていないかったな」

と満足そうに、ニヤリと笑って私を見た。

第十話・その想いは甘く痺れて……（後書き）

カーリーとの会話はやっぱり楽しいなあ。神の様に舞い降りた「
オールマイティ無関心」もなんか何気に響きがいいなあ。

第十一話：普通は普通じゃない？（前書き）

またまた新しいキャラ登場。

可愛い癒し系でありたい……。

第十一話：普通は普通じゃない？

「ハア―……………」

私は朝っぱらから盛大な溜息をついていた。

頭の中は、もう昨日の放課後の事でいっぱいだ。

福山先生は言った。

私がおまけと今まで平均点を探ってきたのではないかと。

そして、私のバイト姿の写真を取り出し、これはお前だろうと。

おまけに去年学園内を騒がせた、鳥の巣クラッシュャーもお前だろうと言ってきた。

「ハア……………」

もう、何もかもお見通しであったのだ。

その後、一体何があったのか。

それは……………。

私の心臓が、バクバクと脈打っている。

私の目の前で、不適に笑う担任教師。

そして私達の間にある机の上に置かれた一枚の写真。

それはひた隠しにしたい、私のバイトしている姿。

一体全体どうしてバレたのか……………。

この普通メガネ（Myオアシス）のシールドが効かなかったと言
うのか……。

その事を告げると、福山先生はシールド云々に対して奇妙な顔を
したのだが、気を取り直して何やら紙を数枚出して見せた。

「これは……成績表？」

「そうだ。今までのお前の成績表だ……」

これが一体何だというのか。

ちゃんとオール平均点を取ってきた私は、ここに何か異常な部分
など無い様に思われる。

やはりあれでしょうか……期末テストで風邪なんかひいたばっか
りに……。

しかし先生は言ったのだ。

「一ノ瀬、お前は完璧主義者だな」

「へ……？」

「こつも完璧に、きつちりと平均点を探り続けているんだ。他の教
師はともかく、私の目は誤魔化せない」

先生は、銀縁お洒落メガネの奥から、その鋭い目で私を射抜く。

ええ〜！？ 平均点採っていたからバレた！？

それに完璧主義者！？ 私が！？

今までそんなこと言われた事も無ければ、意識してきた事も無か
ったので、戸惑いまくりである。

先生は、全ての成績表を私の前でズラツと並べて見せて、

「一年からの成績表を見てみれば、全部がその時の学年成績の平均点だ。それ以上も以下も無い。」

普通なら、多少なりとも上がったたり下がったり、得意科目なんかもある筈なのだがな……」

「……………」

私は何も喋らず、じっとその成績表を眺めていた。

そ、そんなつ！ 普通を目指して平均点を探っていたというのに、まさかそれが仇となるなんてっ…………。

私の中でシヨックは拭えない。

そして先生は更に言った。

「お前が一年の時にその事に気付き、ずっと観察していた。もしかしたらわざと平均点を探っているのではないか、とな…………」

「か、観察ですか…………？」

「ああ、それで分かった事は、普段から目立たぬように姿や言動、全てにおいて意図的に普通に行っているようだという事だ。それに、運動能力…………体力測定の数値まで全部平均値であった事…………。」

ここまで見ていて、私の考えは、もしかしたらがやはりに変わっていった」

頬がヒクツと引き攣るのを感じる。

脳内では例の如く、騒がしく隊長たちが騒いでいた。

たたたた隊長ー！！ た、大変でありますっ！！ 敵にずっと見張られておりましたあー！！

なにー!? それで、敵の目的は!?

今だ不明であります!! ど、どうすればいいでありますかぁー!?

又又又、敵の思惑が何なのか分からぬ今、無闇に動く事は得策ではない! まずは敵の思惑を探り出し、対処するのだ!!

イエッサーであります、隊長!!

私はゴクリと唾を呑み、先生を見据えながら訊ねる。

「も、もし仮にそうだとして、先生は何が仰りたいんですか?」

往生際が悪いかもしれないが、一応まだしらばっくれてみる。

しかし福山先生は、椅子の背もたれに身体を預けると、腕を組み足を組んで小さく首を振った。

「いや、何も……」

「は……?」

「単なる私的な好奇心だ。疑問に思った事は追及せねば収まらぬ性格でな……憶測が確信に変わった時点で満足していた……」

「じゃあ何故……」

今更こんな風に掘り出したり、特進なんかに入れたりしたのか……。

「それはな、お前の完璧が崩れてきた為だ」

「へ?」

「去年、今はお前の恋人に当たる如月呉羽と仲良くなった頃からか……今まで目立たなかったお前が少しづつ注目され始めた。さて、お前は一体どうするのだろうか、また私的好奇心により、再び観察

を始めた」

く、呉羽か……!!

確かに、あの頃から少しづつ目立ち始めちゃったものね。

乙女ちゃんとかも、最初は呉羽が好きで、それで私に突っかかりたりしたものね。

その後は、生徒会長の棚上げ嘔吐き男でありチェリーボーイ大空竜貴にも言い寄られてたりなんかもしましたしね……。

「そして、あの学園を騒がせた、鳥の巣クラツシャー騒動……」

私はハツと顔を上げた。

そうである。何故先生は私が鳥の巣クラツシャーだと判ったのか。

「先生は、何でその鳥の巣クラツシャーが私だと思うんですか？」

「私に隠そうとしてももう無理だぞ、一ノ瀬。何故なら、私はお前が鳥の巣クラツシャーになった前後を全て見ていた」

「なっ!?!」

「あの時、私は特別棟の化学室に居たんだ。そこでお前が、廊下の窓辺に立って何故濡れていたのかは分からないが、ジャージ姿で髪を乾かしているのが見えた。そして、人とぶつかり眼鏡を落として、校長のカツラにその眼鏡が刺さる所をはっきり見ていたんだ」

「……………」

私はぽかんと先生の事を見てしまう。

「み、見てた？」

「ああ。一部始終をしつかりと……………」

「窓から飛び降りた所も？」

「あそこまで運動神経がよかったとは驚きだ。それに、校長のフアンクラブの生徒達から逃げおうせている所も、四階の窓から落ちそうになった時も……流石にあの高さは無理であったようだな。私も肝を冷やした。近くにあの執事がいてよかったな……」

「……………チーン。」

それって殆ど全部じゃね？

ノーン！　なんてこったい！

ハッ、でもなんで先生はその時点で何も言っただけで来なかったんでしょーか……………？

「何度も言っているように、私的好奇心だ」

「そうだとしても、何で今、この事を言ってくるんですか？　私は普通科クラスでよかったのに、特進クラスに入れさせられてしまっし……………」

「まあ、何の断りも無しに勝手に入れてしまった事はすまないとは思っているが……………」

「そうですね。私、特進になんて入る気なんか無かったんですよ？　全然普通科でよかったのに……………寧ろ普通科プリーズだったのに……………。何ですか？」

すると先生は、銀縁お洒落メガネをクイツと上げて、鋭い目で私を見据えると、一言。

「お前、他の教師から疑われているぞ？」

「……………は？」

「今まで平均点しか採ってこなかった生徒が、いきなり学年一位になったんだ。疑って当然だろう」

「う、疑うつて……?」

「他の教師達は皆、お前が何かしら不正を行ったのではと言ってる」「っ……!」

ガーン!

不正!? つまりカンニングって事!?

ああっ! そういえばこの所、先生方の目線が痛かったような……あうっ、そんな目で見られてたんですか、私……。
ひーん、それはショックであります。

ズーンと落ち込んでいると、福山先生は言った。

「他の教師達はもう一度テストさせてはと言っていたが……」

「ハッ! そうですよ! もう一度テストすればよかつたんですよ! そうすれば あ……」

「そうすればお前は、また平均点を採ろうとして、不正だと確定されてしまっていただろうな」

「えーと……も、もしかして先生、他の先生方に……」

私が今までわざと平均点採っていた事を言っちゃったとか?

はうっ、そんな! 今までの私の努力は一体……。

「私は別にバラしてはいない」

「え?」

「一ノ瀬がここ最近、猛勉強をしていたと言っておいた」

「は、はい? 嘘をついたというか、信じたんですか? 他の先生方はその話」

「フン、日頃の私の行いの賜物だろう。大体の教師は信じた」

日頃の賜物って……何気に偉そうだな、この先生。

ハッ、でも大体の先生って……。

「信じない先生もいたんですね？」

「まあ、頭の固い一部の教師は信じてなかったようだが、短期間に満点が採れるようになる勉強法など考えられんのだろう。まあその実それは当たっているのだがな」

「それはまあ、そうですね……」

「私が責任をもって監督すると言って、その一部の教師を一時黙らせたがな」

「それは……」

どうもと言って礼を述べるべきなのだろうか。

そうして束の間会話が途切れる。

遠くで部活動に勤しむ生徒たちの声や、吹奏楽の楽器の音が聞こえる。

目の前の教師は、銀縁お洒落メガネの奥から、切れ長な鋭い目をじっと此方に向けて私の事を見ている。

私も何故だか対抗心が芽生え、M yオアシスな普通メガネの奥からじっと担任教師を見つめてみる。

……無理です。

イケメンはやっぱり苦手であります。

ふいつと視線を逸らした時、先生がこの静かな教室の中で口を開いた。

それは……

「よう、おはよう！」

「うひゃあおう！！？」

いきなりポンと肩を叩かれ、回想していた意識を強制的に戻された私は、素っ頓狂な声を上げてしまった。

「うおっ！？ 何だよ、吃驚した！」

「え？ ああ、君は昨日の……」

「おう、おはようさん！」

そこに立って居たのは、昨日の運動部をいくつも掛け持ちをしていると言う、名前を名乗らず聞かすのあの新入生の少年だった。

相変わらず朝に相応しい爽やかっぷりだ。

そして、今日は走ってこなかったのか、制服のブレザーをちゃんと着ている。

着崩してはいるが。

新入生で早々に着崩しているなんて……これだからイケメンはっ！

とそう思ったけど、彼は「あちー」とか言ってシャツをパタパタとしている。

どうやら単に暑くて着崩しているようだった。

とは言っても、まだまだ肌寒い季節。彼の言うように暑くは感じない。

後から聞いた話によれば、彼は極度の暑がりだそうだ。

そうしていると、彼の後ろからひょこつと何かが顔を出した。

それを見て、私はぽかんと口を開けてしまう。

「どうも、先輩。初めまして。僕、こいつの友人で 大沢 みこと
って言います」

ふわふわのくせ毛にクリクリとした目。ぷくぷくとした頬つぺた
に、人好きのしそうな笑みを浮かべている。

背はちっちゃく。頭の天辺が私の胸に届くくらい。

何だこれ！？ 物凄く可愛い生き物がいるよ！？
ほえ〜、ちっさいなあ〜。

そのちっさ可愛い生き物は、隣に立つ、倍位はある同級生の脇腹
を突付き、すまなそうに頭を下げてくる。

「すみません、先輩。こいつ先輩に対して失礼な態度で。でも許し
てやってください。ただ単細胞で馬鹿なだけなんです」

「先輩って、ええ！？ あんた先輩だったの!？」

「そうだよ元気！ ブレザーのラインの色見れば普通気付くたる！

全く、脳みそまで筋肉で出来てそーだよな、元気って……」

「って、ちよつと待てよ、単細胞で馬鹿っておれの事か!？」

「あのさー、いい加減、ワンテンポ遅れて突っ込むのやめよーよ、
な？ 脳みそに伝達いくの遅すぎるって……」

疲れたように溜息をつくみこと君。

どうやら、この爽やか少年は元気という名前らしかった。
ぴったりである。

これほどまでに彼に相応しい名前など無いだろう。

私はただ呆然と、いま目の前で繰り広げられる漫才を見ているし
かなかった訳で……。

でこぼこコンビだけど、入り込む隙のない、息の合ったやり取り

だ。
一体どれくらいの付き合いなのだろうか、M1に出れそうな勢いである。

「みことさあ、脳みそに筋肉ついてるって言うけど、当り前じゃん。脳みそにだつて筋肉あんだろ？」

「……………」

私とみこと君は無言になつてしまつ。

元気君はキョトンとした顔で、

「え？ 何だよその顔。脳みそ筋つてのがあんだろ？」

「……………あのね、元気。誰から聞いたのかしんないけど、そんなのは無いんだよ……………」

何だか、哀れな者を見る様な目をして、ポンポンと元気君の背中を優しく叩くみこと君。

私も彼と同じ心境である。

みこと君は、私に視線を移すと、肩を竦めて「こんな奴ですみません」つて顔をしている。

なので私も苦笑いを浮かべながら「いえいえ、其方も大変だね」という顔をした。

会つて早々、目で語り合えるつてそう無いと思う。

それほどまでに、元気君がお馬鹿さ加減が群を抜いていると言う事だろうか。

「ええ！ だつて、兄貴がそう言つてたんだぜ？」

「元気……………それ、からかわれてたんだよ……………」

「だー！ 兄貴の奴！ 帰つたら文句言つてやる……！」

「何かそのセリフ、毎回言ってるよな、元気って……」

つまり、いつもお兄さんにからかわれてるって事？

まあ、確かに。

彼はカーリーとはまた違った、からかいがいがありそうな感じがするなあ。

時間差ボケ&突っ込みという新たなスタイルが出来そうです。

彼らの会話を聞きながら、そんな事を考えつつ、私はふとある事を思い出し、ハァーと溜息をついてしまう。

昨日の一件の事についてである。

そして、その溜息は傍らにいる後輩二人にもバツチリ聞かれていたみたいで、怪訝そうな顔で見つめられてしまった。

「どうしたんですか？ 何か深刻そうな溜息ですね？」

「何だよ先輩。悩み事か？ おれ達でよければ相談乗るぜ？」

「おれ達って……僕も勝手にその中に入れられてんだよな……まあいいけど……」

それで？ 先輩、悩み事って何ですか？ 初対面で言うのもなんですが、僕たちに来る事であれば手を貸しますけど？」

「はあ……恐らく言った所で、どうにもならない問題なんですが……」

「んだよ水くせーな。おれ達には言えないって事か!？」

腰に手を当て、鼻息を荒くする元気君。

みこと君が「まあまあ」と彼を宥める。

そして私を見ると、

「まあ、ともかく、話を聞く位は出来ると思うんで、言ってみて下さいよ。愚痴でも全然構わないんで」

「そうだけ、先輩。話してみろって！ あんま難しい話だと眠くなっけど、眠りながらも聞くからさ！」

「元気、それ聞いてるとは言わない……………」

「うつつ、君達……………凄くいい子ですう……………」

私は感動して目がウルウルとしてきた。

会って早々、こんなにも親身になってくれるなんて……………。

感動した！ 私すごく感動しました！

世間はまだ捨てたもんじゃないね！

私は目を潤ませながら、彼らに話した。

「実はですね、今度のテストでオール満点を採らなくてはならなくなりました……………」

「はあ!?!」

「はい？ な、何で!?!」

「理由は聞かないで下さい……………」

目を丸くする後輩二人。

そうなのだ。あの時先生が言った事。

『他の教師達を完全に黙らせるには、実力を証明するしかあるまい。今度のテストで再び平均点を採ろうものなら、一ノ瀬が不正を行ったと思われても仕方がないぞ』

銀縁お洒落メガネをクイツと上げながら、福山先生はそうのたまったのであります。

まあ、こつなつてしまった以上、私も実力を出す事は各おんかではありませんが……。

私は再びハアーと溜息をつく。

「オ、オール満点!? そりゃあ、大変だな!」

「はは……確かにそれは、僕たちではどうにも出来ない事だよなあ……」

元気君が肩を落とす私におろおろと声を掛け、みこと君は何だか遠くを見て乾いた笑い声を発した。

二人とも、途方もない事だと思っているのだろうか。

しかし、ケアレスミスさえなければ、満点を採る事は可能である。しかしながら心は重く沈みこむ。

何もその目立つ行為に落ち込んでいるのではない。まあ、ちよつとはそれが原因にあるが……。

でも、それが主な原因ではないのだ。

一番の原因は、その後言った福山先生の言葉にある。

先生はこつ言った。

『一ノ瀬。お前は何を持って普通を演じてきたのかは分からないが、これだけは言っておく。』

平凡を極めようとすれば、もうそれは非凡でしかないぞ……』

つまり、普通を求め過ぎた為に、私はもう既に普通じゃないと言われてしまったのだ。

あつあつ、今までの私の苦勞は何だったと言つのでしょうか……

…。
普通を目指せば普通になれると思ったのに……。

「……普通は、普通じゃなかったんだね……」

ポツリと呟く私。

意味の分からない二人の後輩達は、互いに顔を見合わせている。

「おい、みことっ。先輩なんかすげー落ち込んでんぞ！ どーすりやいいんだ!？」

「僕に聞くなよ……僕だって掛ける言葉が見つからないって」

何処までも深く深く沈み込む私の傍らで、おろおろとしながらヒソヒソと囁き合う後輩二人の声が聞こえてくるのだった。

第十一話：普通は普通じゃない？（後書き）

漸く気付いた主人公。

後、新キヤラ みこと君。

彼は女の子みたいな容姿をしています。おまけに背もちっちゃいし。

かつてはそれをコンプレックスにしましたが、今はそれも個性だなど受け入れられるようになりました。

中学校の時は荒れてたりなんかして……実は喧嘩強かったりして……。

第十二話：偽りのQueen

普通を極めれば、それはもう普通じゃない……。

そう福山先生に告げられた私は酷く落ち込んでしまった。

あの完璧普通だと思っていたQueen of 普通の斉藤陽子
師匠でさえ、苦手得意科目があるらしいし。

私は昨日の福山先生の話の中で彼女について言ったのだ。
それを聞いた福山先生は頷くと、

「確かに、あの生徒ほど平凡という言葉が相応しい人間はいないだ
ろうな。お前と違って、彼女には得意不得意がある。

テストの成績についても、いい時と悪い時が存在するんだ。一ノ
瀬、お前のように完璧さは無い。

だからこそ上を目指そうとする欲求もあり、お前と違って注目を
浴びたいと思ったりもする。そういう者こそ本当の平凡と言えるだ
ろう」

178

そう言われてドンピッシャーと衝撃を受けましたとも。

目立ちたいと思う事こそが普通なのだと。

それと同時に、「流石師匠！」とも思いましたね。

師匠はやっぱりQueen of 普通です！

やはり私の目に狂いは無かったですね……。

益々持って彼女を崇拜してしまう私。

ええ、勿論。

普通を目指す事を諦めた訳ではないですとも！

等と、心の中で闘志を燃やしていた私に、みこと君がポンと手を叩いて「ああ、そうだ」と、何かを思い出したようだった。

「そういえば先輩。鳥の巣クラツシャーって知ってます？」

「……え？」

「あん？ 鳥の巣？ 何だそれ？」

元氣君が首を傾げているのが見える。私は体が強張るのを感じた。

「去年この学校を騒がせた人物らしい。向かいの家のお兄さんがこの卒業生で教えてくれた」

「……？ 何で鳥の巣クラツシャーなんだ？」

「ほら、校長先生ってカツラじゃん。しかも鳥の巣みたいな。去年そのカツラを奪った生徒が居たらしいんだよ」

「ああ！ 何かこの前、鳥が戻ってきたとかって大騒ぎしてたよな！」

そうなのだ。実は正しいの鳥の巣の如きカツラに住まう小鳥、ピーちゃんが卒業式の日素から解き放たれ姿を消した。

そして暫くは気落ちしていた正しい。

私たち生徒もやはり気分が落ち込んでいた矢先、新学期に入って朝礼を行った所、正しいの元にピーちゃんは帰って来た。

しかも彼氏を連れて。

状況の全く分からない新入生達を除き、二年三年の私達は正しいと共に大いに喜び騒いだものだ。

「そ、それがどうしたと？」

極力不自然にならないように装いながらも、やはり動揺からか声がどもってしまふ。

「いや、その鳥の巣クラツシャーって凄い美人らしくて、おまけに運動神経も恐ろしくいいって聞いたんですよ」

「なに！？ 運動神経！？ おれより凄いのか！？」

「……元気って、運動方面に関しては素早い反応だよな……」

「うん？ でも美人って事は、その鳥の巣クラツシャーって女なのか？」

やっぱり運動以外の事はワントンポ遅れるとかぶつぶつ言いながら、みこと君は頷き携帯を取り出す。

そして、そこに映し出されている映像に、私はピシリと固まった。

「これ、そのお向かいのお兄さんが送ってきたその時の映像。咄嗟の事だったらしくて映像はいまいちだけど、ぼやけててもどこか美人ほいって分かるかな」

急いで撮ったらしくぼやけた映像。

廊下を走っているその姿は、間違いなく私であった。

な、なな何と言う事でしょうか！！

まあ、あれだけの騒ぎになったんだから、誰か写真を撮っていたって可笑しくないけどさっ！

でもでも、あんな映像残っちゃって、バレちゃった時ヤバクね！？

みこと君はその映像を私に突き出し、可愛らしく小首を傾げると

(おお、ベリイキュート)、私に尋ねてきた。

「先輩はその時、鳥の巣クラツシャーは見たんですか？ どんなでした？ やっぱり絶世の美女でした？」

隊長ー！！ どうすれば！？
適当に言って注意を逸らすのだ！ 話題を変えよ！！
イエッサー！！

「そ、そんな大した程じゃありませんって！ こういうのは後々話
が大げさに大きくなるものだからね。それに、それほどの美人であ
れば、正体も今頃判っていても可笑しくないんじゃないかな！」
「うーん、それもそうですねえ。それほどの美人だったら、絶対
有名人になってるはずですよんねえ。先輩、そういう女生徒は居な
いんですよ？」
「ええ、そう。そうですね！ そのとおり！ 今だ正体が分かってい
ないのがその証拠！ だから、この話はもう……。別の話をしまし
よう！ んねっ！」

無理矢理な感は否めないが、早い所話題を変えたくて私はみこと
君にそう促す。
するとみこと君は、さっきのように、ポンと手を打ってこう言っ
た。

「そうそう、そう言えば！ 三年で名物のバカップルがいるって聞
いたんですけど先輩分かります？」

「へ？」

バカップル？ そんな人たちが居ましたっけ？

名物になるくらいなんだから相当なんだろうなあ……。

誰だろ？

「さっきも言った近所のお兄さんが、そんな事を言ってたもんで…

…。何か、一見の価値あり！　って言ってたんですよね」

「そんなに？」

「名物バカップルって……何がだ？」

「うーん、何か凄いラブラブって話。毎日彼女がお弁当作ってくるんだけど、それが重箱でだってさ。それだけでも凄いのは勿論なんだけど、その周りに居る人達も何か凄いんだって」

お弁当？　重箱？　あれ？

それに、周りに居る人たち？

「お嬢様とか執事とか、あと物凄いイケメンの人とか……」

「……………」

……………あれ？

「あと、前の生徒会長が物凄くその彼女にご執心でね、毎日のように言い寄ってたらしいよ。あつ、その生徒会長つてもイケメンだったって」

「……………」

……………あれあれ？

「この学校、お嬢様と執事がいるのか？」

「ほら、朝礼の時、一人だけ優雅に座ってた人いただろ？　その隣で立ってた金髪の外人って執事だよあれ」

「わり、おれ校長の頭ばっか見てて分かんね」

「まあ、あれは強烈だもんな。鳥まで乗ってるし。そっちはかり気がいって、お嬢様と執事存在には割と気付かない人が多いかもな」

「……………」

それって乙女ちゃんと吏緒お兄ちゃんだよな？
って事は、あれあれ？

「それでさ、そのカップルなんだけど、その組み合わせも変わって
てさ。彼氏の方は物凄く派手な格好で前髪が金髪の両サイドは赤っ
て言うロックな外見でさ。ピアスとかアクセサリもジャラジャラつ
けてて、でもやっぱりその人もイケメンなんだって」

「……………」

そ、それって呉羽？

「それで彼女の方は、物凄くじみーで普通の人なんだそうだよ」

私はその言葉に完全に固まってしまった。

そ、それって…………。

「地味で普通って言えば、先輩も見た目地味で普通じゃね？」

私はぎくりと身体を震わせる。

元気君が、私をまじまじと見下ろしていた。

「ちよつ、元気！？ 面と向かってそれは失礼なんじゃ……………」

みこと君が、私をチラチラと見ながら元気君に注意する。

いえいえ、地味に普通は私にとって最大の賛辞ですぞ！

しかしながら、私は何の反応も返せないでいた。

本来ならば礼を言うべき所。けれどここで認めると、私はその噂

のバカカップルに非常に近い存在となってしまう……。

いや、それよりも、今日はお弁当もって来て無くてよかったです。何か昨日言われた先生の言葉がショックで、ずっとボーっとしてましたからねえ……。

不幸中の幸いという事でしょうか。

と言うか、私達バカカップルですか!?

いや、時々自分でもそう思う時はあったけどね？ でも、そんな噂になるほどって……。

は、恥ずかしーですう！

でもそんな恥ずかしがってる場合じゃない！ 何とか誤魔化さなくては！

グツと心の中で拳を握っていると、またもや元気君は言った。

「でも、運動神経は凄いやな。何たっておれより足が速いもんな！ 地味だけどそっちはすげーよ！」

ハッ！ そうです！ その通りですよ！ だから、そのバカカップルじゃありませんよ！

私はウンウンと頷こうとした時、みこと君が元気君の言った地味と言っ言葉が私が気にしているとか思ったのか、気を使ってこんな事を言い出した。

「そ、そんな事より、そのカップルなんですけど。確か名前が、彼氏の方が如月呉羽で、彼女が一ノ瀬ミカって言っんですよ！ 先輩、分かりますか!？」

私はアガツと口を開けて動けなくなっていました。

おまけに、元氣君が追い討ちをかけるようにポンと手を打って私を見やる。

「そうだ！ 名前って言えばおれ、先輩の名前まだ知らなかった！」
「はあ！？ ちよつとそこは普通最初に聞くべき事じゃないの！？
って言うか、知らないでこんなに親しく話してたのかよ！」

バシツと背丈の差の為か元氣君の腰の辺りをど突くみこと君。見事な突っ込みである。

元氣君は「うおっ！」と叫び声を上げ、前につんのめる。
大して強く叩いていなさそうだったけど、この大きな元氣君をよろけさせるほどの力が入っていたようだ。

小さくか弱い容姿見合わず、以外にもみこと君は力が強いのかも
しれないなと何となく思ってしまう。

と言うか、こんな事を考えている場合じゃありません！

この状況はちよつとヤバイのでは！？

このままだと私は、彼らに自分が今話題に上った一ノ瀬ミカです
と名乗らねばならない。

隊長ー！ このままでは、噂の張本人だとばれてしまいます！

うっぬっ！ 少しばかり気が引けるが、ここはあの人物の力を借り
ようではないか！！

ハッ！ あの人物！ あの人物でありますか！？

イエッサーー！！

私は意を決して顔を上げる。

ど突き漫才のような遣り取りをしていた後輩2人も、私から名前を聞こうと此方に注目していた。

私はコホンと一つ咳をすると、少しばかり緊張した面持ちでこう答える。

「私の名前は、斉藤陽子です！」

そう、あの人物と言うのは、何を隠そう、私の尊敬すべき師匠で、普通の中の普通、Queen of 普通こと斉藤陽子さんである。

師匠！ 名前を勝手に使ってすみません！

緊急事態 なんです！！ 大目に見ておくんまし！

私はドキドキとしながら、元気君とみこと君を見やる。

2人は別段怪しがる様子も無く、素直に納得して頷いていた。

「斉藤先輩ですか。分かりました。改めて宜しくお願いします」

「ふうん。なんか思いつきし普通な名前だよな……あだっ！」

「こら！ んなこと言つなよ！ 失礼だろ！」

またもや思いつきり元気君をど突くみこと君。

ほうっ……よかったです。二人とも信じてます。

「元気の奴がすみません」

「いや、別にみこと君が謝る事じゃないし、私は全然気にしてないから」

すまなそうな顔をするみこと君に、私はそう答える。

最初疑わしそくに私の顔を覗き込むみこと君だったが、私は本当

に気にしていないし、寧ろ普通と言われるのは喜ばしい事だったし、本来この名前はQueenのものだったしで平然としていたので信じてくれたようである。

「それで先輩。如何なんです？ そのカップルの事……」

何か知らないかと此方を窺うみこと君。

私はギクツと体を強張らせ、でもここは頷いておく。

否定よりも肯定的な方が、不自然ではないでしょうからね。

と言う訳で……。

「はい、知ってますよ、その二人の事は。ゆ、有名ですよね」

あははーと笑いながら私はそう言った。

ハア……有名……。

自分で言つといてなんですが、とても不本意であります……。

と、その時である。

私のとあるセンサーがキュピーンと反応した。と言うか、目にも鮮やかなのですぐに目に入った。

私の前方に、他の路地から入ってくる、とても見覚えある金髪サイド赤。

そう、呉羽である。

呉羽は此方の路地に入ってくる際、私の存在に気付いたのか、私とばっちり目があった。

ドキンと胸が高鳴り、嬉しい気持ちで一杯になる。

おおー、呉羽ー。呉羽だよー。
大きく手をふって今直ぐ駆けて行きたいよー。

でも駄目であります！

吏緒お兄ちゃんの監視がー。
それとみこと君達の目がー。

私がーノ瀬ミカだとバレてしまふ！

「あつ！ あれってもしかして、今言つてた噂のカップルの彼氏の方じゃ……」

「お？ なんか派手だな……っーか、なんかこっち見てねえ？」
「そう？」

呉羽は私の事をじっと見ていたけど、何故か一瞬辛そうな顔をしたらかと思うと、ふいと前を向いて早足に歩いて行ってしまふ。

あつ？ 何でそんな顔を？

まあ、今は知らん振りしてもらった方が助かるけど……でもそんな顔をされると物凄く寂しくなっちゃうよ？

キュウツと胸が痛くなつて、しゅんと落ち込んでしまふ私。

「先輩、ねえそうですよね？ あの人が如月呉羽って人ですよね？」

「え？ あ、ああ……そうだね……」

「やっぱり！ 噂どおりの人ですね！」

「ん？ でも、なんか先輩落ち込んでないか？」

「へっ！？ そ、そんなこと無いよ？ ぜ、全然大丈夫」

ブンブンと首を振る私に、みこと君は「そうですか？」と若干気にしながらも頷いてくれた。

そんなこんなで、一番の山場は脱したかに見えた。

しかし、山を越えたと思ったら、また新たな山の出現に、私は慌てふためく。

「あ、外人だ……」

元氣君がポツリと言った。

「あ、あれって噂の執事！」

そう、そこにいたのは金髪執事。

ある時はスナイパー渋沢。

ある時は暗黒執事リオデストロイ。

その実体は、乙女ちゃんの専属執事の杜若吏緒その人である。

吏緒お兄ちゃんは、誰かを待つようにひっそりと道の端に佇んでいた。

しかしながら、例え控えめに立ってたととしても、その容姿からは目立ちまくって仕方が無い。

私はハツとなる。

彼がいるという事は、彼が仕える主人の乙女ちゃんもいるという事になる筈だ。

という事は、

『お姉さまへ、ご機嫌麗しゅう』

とか言って駆け寄ってきそうである。

アカンアカン！

そんな事になったら、折角誤魔化したのに、私が一ノ瀬ミカだとばれてしまふ！

そんな事を考えている内に、吏緒お兄ちゃんが私の存在に気付いた。

途端に、パアツと笑顔になって、『ミカお嬢様』と口が動くのが見えた。

あうっ、どうしましょう！

まだ、声が聞こえるほど近くじゃないからいいけど……。
不味い……この状況、不味いですよ！！

「あれ？ 執事の人こっち見てない？」

「ん？ そーか？」

「……………」

私は歩調を弱め、二人の後ろから吏緒お兄ちゃんに向かって、ブンブンと首を振り、手を交差して、言外にダメだという事を知らせる。

それを見て、訝しげな顔をするお兄ちゃん。

けれど、流石は吏緒お兄ちゃんである。

そこから私の願いを汲み取ったのか、それ以上は此方に注意を向けるような事は無く、一先ずホツとする私。

そして、どうやら乙女ちゃんも居ないようで、更にホツと胸を撫で下ろす次第である。

あれ？ だとしたらお兄ちゃんは何でここに？

私の疑問を余所に、理緒お兄ちゃんはその場を動かず、私達とすれ違ふ。

後輩二人は、興味津々でお兄ちゃんの事を見ているけど、私はチラリと其方に目を向けるだけ。

何事も無くその場をやり過ごす事に成功した。

しかしながら、また新たなる山がそびえ立っている事に、この時の私は気付く事も出来なかつたのである。

第十二話：偽りのQueen（後書き）

いやあ何とか無事更新できました。

私自身ちよつとスランプ気味なんですけどね。

中々筆が進まんです……。

気分的に沈み込む事が続きざまにありまして……。

まあ、何はともあれ十二話目です。

後輩達に偽りの名前を伝えてしまったミカですが、はてさてどうなる事やら。

いつばれるんでしょうかね。私にもまだ分かりません。

次回は呉羽目線から始まるかな。

二人のすれ違いはいつ修復を見せるのでしょうか。

早くバカップルに戻って砂はきっぷりを再開させたいところですが、他のキャラとも絡ませたい所。

あーでもないこーでもないで悩みまくっております。

第十三話：危機回避

足取り重く学校へと向かう。

本当なら学校に行く気など起きないのだが、女々しいと言うか往生際が悪いと言うか、今だミカと分かれるという事に未練たらたらのなのだ。

そして、とある曲がり角。

その角を曲がった所で、たった今、オレが未練たらたらだと言ったミカ本人が現れた。

向こうも此方に気付いたようで、しっかりと目が合うのが判る。

ドクンと心臓が跳ねた。

いつもなら重そうに手から提げている重箱のような弁当が無かった。

つまりはそういう事。

もうオレに弁当を作る気が無いという事だろう。

その事を苦々しく思いながら、それ以上ミカを見ている事が出来ずにオレは顔を背け、学校へと急ぐ。

早くこの場から離れたくて、ずんずんと進んでゆくと、前方に見覚えある外人が立っている事に気付いた。

あの金髪執事ヤローだ。

奴はオレの姿に気付いたのか、此方を見ると口の端を上げる。

奴の余裕な態度はオレの神経を逆撫でするものだったが、ここで奴に殴り掛かったりでもしたら余計に奴を喜ばせてしまいそうで、

すぐに奴から顔を背けた。

そして、オレも無言、奴も無言ですれ違う。

きつと奴はミカを待っているんだろう。

そして仲良く朝の挨拶を交わし、手でも繋ぐのか？

いつもオレとミカがしていたみたいに……。

……。

すっげー面白くねえ。

チツ、やっぱそう簡単に割り切る事なんて出来ねーよなあ……。

ハアと溜息をつきつつ、校門に差し掛かってきた時だった。

またもやオレの前方に、見覚えある人間が居た。

「……………」

何でここを卒業したヤローがここに居るんだ……。

今は大学生になった筈だろーが……。

そいつはオレを見つけてニヤリと笑って、掛けている眼鏡をクイッと上げる。

「如月呉羽、一人で登校か？　一ノ瀬さんはどうした？」

「……………」

この笑顔を見れば、こいつが何かしら知っているとこの事は明らかである。

と言うか、こいつに垂れ込んでるのは誰なんだ!?

いくらなんでも、昨日の今日で知ってるのっておかしくねーか？

「フフッ、どうやら君達が喧嘩をしていると言つのは本当らしいな。大方、一ノ瀬さんが君に愛想を尽かしたんだろう」

ああ、そうか、流石に別れたというのはこいつも知らなかったか。それにしたって、こつ情報が早いのはどうなんだ？

「ああ、そうさ！ 俺には最初から分かっていたとも！ 一ノ瀬さんに相応しいのは如月呉羽、お前じゃない！ この俺、大空竜貴だ！」

「朝っぱらからウルセーんだよ。少しは黙れ、このアホが」

こいつ相手に突つかかるのも面倒だ。

そう思つて無視を決め込むつもりだったが、思わずといった感じが出た言葉は、自分の思った以上に低く、苛立ちを含んだものだった。

まあ、今更言い直す気も、こいつに気を遣うつもりも無いけどな。つーか、寧ろこいつで今直ぐ憂さを晴らしたい気分だな……。

そんな、オレから漂うただならぬ黒いものに気付いたのか、目の前の元生徒会長は、だからだと汗を流し、おどおどとし始める。

やはりこいつはヘタレだ。

「そ、そんな風に脅したつて無駄だぞ！ 君は一ノ瀬さんに相応しくない！」

「あー、そーだな……」

「な、何だその目は！ そんな風に睨んだつて、お、俺は怖くないぞ！」

視線を下に向ければ、足が震えているのが見えた。

ああ、やっぱりヘタレだ。

誰がなんと言おうと紛う事無きヘタレだ。

これ以上は時間の無駄と、オレは一步前が出る。

途端にズザッと後退る元生徒会長に呆れながら、オレはその脇を通った。

「……ミカの事はオレにはもう関係ない。あんたが何しようがあんたの勝手だ。

だけど生憎だったな。

もうミカには相手が居るみたいだぜ？」

「はっ！？ な、何だった！？ それは誰だ！？」

オレが親切にも言ってやれば、元生徒会長は怖がっていたのが嘘のようにオレに詰め寄ってくる。

オレはそんな奴に向かって、黒い笑みを作りながら教えてやる。

「あの金髪執事だよ」

「ひ、ひいいいっ！！」

「じゃあな」

真っ青になる元生徒会長をその場に残し、オレは先を急いだ。

この元生徒会長は、今まで散々あの金髪執事にお仕置きと称して色々な恐ろしい事をされていたらしいからな。

奴に対してトラウマになってしまっているのかもしれない。

そうだとしても、毎回懲りずにミカの前にやってきてたのには関心すっけど。

そうして学校の門が見えてきた頃、オレは背後に気配を感じ、ハッとして振り返った。

「っー!!」

かなりビビった。

恐ろしく綺麗で整った顔をしているが、だからこそ眉間にこれでもかと皺が寄っていると、とてつもなく怖い。

銀縁の眼鏡の奥から、鋭く切れ長の目がオレをじっと見下ろしている。

確かこいつはミカのクラスの担任の福山……。

何でオレをじっと見てるんだ？

っーか何で怒ってるんだ？

オレ、何かしたか？

そんな止め処なく溢れる疑問を余所に、福山はクイツと眼鏡を上げると、口の端も上げ、ニヤリと笑った。

「つつっ!!!？」

オレはピシリと固まってしまふ。

何っーこえー顔で笑うんだよ!!!

本当にオレ、何かしたのか!?

オレがビビっている事に気付かないのか、福山は懐を探ると、オ

レに茶封筒を差し出してきた。

あ？ 何だこれ？

思わず受け取ってしまったと、福山は一言。

「餞別だ……」

「は？」

「礼はいらない……」

「え！？ ちよっ」

福山は満足そうに頷くと、颯爽と去っていった。

って、餞別って何のだ！？

オレがミカと別れた事への餞別か！？

つか、何で一教師が生徒のんな事知ってただよ！？

ハッ！ もしかして、奴もミカ狙い！？

オレは頭の中で悶々と考えながら、手元の封筒を見やる。

飾りつ気も何も無い、何の変哲もないただの茶封筒だ。

軽い、何かやばい物が入ってそうで、試しに日に透かしてみる。

四角い薄っぺらい何かが入っている。

オレは意を決して中身を取り出した。

「……………」

オレは無言でそれを見つめ続けてしまう。

何というか……ふかふかのクッションに、真っ白い猫が腹を上

して伸びをしている写真であった。

「な、何なんだ……？」

わっかんねー！ 全然分かんねー！
一体何の意味があるってんだよー！！

心の中で叫んだ所で解決する訳も無く、オレは諦めて学校へと入って行くのだった。

+++++

「やあ、おはよう！ いち ガフツ！」

私は靴を脱ぎ、思い切り振りかぶっていた。

「ハッ、いけない！ 靴の中の砂を取り除こうとしたら、うっかり手を滑らせてしまったあー！！」

「ええ！？ 何か思い切り狙いを定めてたような……」
「随分しつこい砂だったんだな」

大きな山を越えたと思ったら、予想外の山が聳え立っていて吃驚です。

私の目の前には、この学園を卒業したはずのチエリーボーイな元生徒会長、嘔吐き棚上げ男 基、大空竜貴が居た。

彼は私を見つけると、徐に懐からロープを取り出し、微笑みの貴公子よろしくな笑顔で、私に駆け寄ろうとしたのだ。

しかも、「一ノ瀬さん」とはつきり言おうとするものだから慌てまくってしまった。

まあ、口にする前に、こうして撃沈させたけど……。

しかし、所詮は靴。

大したダメージも与えられず、すぐさま復活する大空元会長。

イカンです。このままでは後輩二人にバレてしまいます！

もう片方の靴を脱ごうとした時、私の隣を物凄いスピードで駆け抜けてゆく影があった。

ああ、今の影。金髪に燕尾服を着ていたような……って、吏緒お兄ちゃんです！

完全復活した大空元会長は、いつの間にもやらの前に立っている金髪執事に顔面蒼白になる。

そして叫ぶ。

「し、執事！ 何故目の前に……って事はやっぱり、一ノ瀬さんの新しい相手ってのは本当だったのか！」

……………チーン。

はい？ 新しい相手？

一体何の事ですか？

相手って、何の相手だろ？

うーんと首を傾げている私に、大空会長は視線を向けてくる。

ハッ！ いけない！ このままではまた名を呼ばれる！

と思っただけけれど、その前に更緒お兄ちゃんがむんずと彼の顔を掴むと（眼鏡を掛けているので顔の下半分）、ずりずりと何処かへと引きずって行ってしまったのだった。

……ああ、あれって息出来ないっばいね……。
哀れナリ、大空元会長……。

「な、何だっただらろう……」

「なあなあ！ 今の外人、すげー速くなかったか！？ 先輩とどっちがはえーかな！？ それにすげーバカ力だし！ みこととどっちが強いかな！？」

「ないよ？ そんなキラキラとした目で期待されても、あの人と勝負なんてする事無いんだよ、元気……」

「私も、り　あの人は勝負なんてしないからね？」

思わず更緒お兄ちゃんと言いそうになりながらも、きつぱりと否定する私。

元気君は「そっか……」と酷くしょんぼりとした。

ああ、なんか垂れ下がる耳と尻尾が見えるようです……。

やはり、でかいわんこにしか見えませんね……。

何だか頭を撫でてあげたくなった。

ハッ！ イカンイカン！

撫で撫でするのは、萌えきゅんした呉羽だけであります！

はっつ、暫く呉羽萌えしてないな……。

何て事を考えていると、みこと君が此方を振り返った。

「あの、先輩？ さっきの金髪執事に連れてかれた眼鏡の人って誰なんですか？」

「チエリーボーイ棚上げ嘔吐き男です」

「……はい？」

「元生徒の長です」

「お、おさ？」

物凄く難解な顔をするみこと君。

元気君はというと、パツと顔を上げ、

「ヤベツ！ 今日おれ日直だった！」

そう叫んだかと思うと、

「じゃあ先行ってるな！」

とさつさと走って行ってしまった。

そんな彼の背中を私とみこと君は見送る。

そして私の隣で、みこと君がポツリと言った。

「先輩っていい人でしょう」

「は？ 何をいきなり？」

「いや、元気って実はああ見えて人見知りか激しいんですよ」

「ええ！？ 見えない！」

寧ろ初っ端から親しく話しかけてきたよ！？

吃驚する私にみこと君は更に言った。

「そんな元気があんな風に打ち解けてるって事は、先輩がいい人って証拠です。あいつが仲良くなる奴は大抵。」

「あいつ、そういうの嗅ぎ分けるのが上手いんですよ。もう何となくか野性的直感というか、犬並みの嗅覚というか……」

「ああ、元気君わんこですもんね。言い得て妙です。」

私はフフツと笑うと、みこと君を見下ろした。

「じゃあ、みこと君もいい人って事だね」

「え！？ 俺……いや僕は……」

みこと君は真っ赤になってもじもじとしている。

「かわいいなあ、もう。」

でも、あれ？ 今俺って言って僕って言い直さなかった？
うーん……ま、いつか。可愛ければそれで

私は暫し、その可愛い仕草で癒されていたのだった。

「おはよう御座います、カーリー」

「……………」

「あれ？ カーリー？ おはよー、聞こえてますかー？」

教室に入って、いつもの如くカリカリと机に向かって問題集と睨

めっこをしているカーリーに、朝の挨拶をばと声を掛けたのだが、彼は此方を見る事もせずに黙々と問題を解き続けている。

よもや集中していて聞こえないのかと思ったのだけれど、此方をチラリと見ても黙って続きをしているカーリーに首を傾げた。

あつっ、どうしたんでしょうか？

いつもならここで突っ掛かってくる筈なのに……。

「カーリー、何かあったんですか？ どこか具合でも？」

「別に……至って健康だけど？」

あ、話しかけてくれた。

「そうですね、良かった！ でも全然挨拶を返してくれないんで嫌われちゃったかと思いましたよ！」

「元より僕は君が嫌いだけど？」

「またまたあー、カーリーがツンデレなのは分かっていますから！」
「……………」

カーリーはまたも無反応であった。

「あれ？ ツンでもデレでもない、オールマイティ無関心だーって言わないんですか？ あ、実は昨日使ったので……はい、20円」

実は昨日父に向かって早速使わせてもらった。

いやあ、なんかしつこくバニーガールの格好をさせようとするんだものな。

『ミカさんの網タイツが見たいんだー！』

と叫んで……。

断り続ける私に、父は『ミカたんはツンデレっ子だもんなあ』とか言いやがるから、早速カーリーの20円ギヤグを使わせてもらったのであります。

ウフフ……父、大口開けて酷くシヨックを受けた顔してましたねえ……。

その後、『酷いやミカたん!』とか言って、いつも母が使う小鳥の小部屋に閉じ籠ってしまいましたが、特に誰も……母でさえも扉を叩いて呼ぼうとしなかった。

というか、私が手作りのケーキを出したので、夢中になって食べていたんですけど、母が珍しく面白話をしてきたので一緒に食べながら大盛り上がりしていたら、いつの間にか父が背後に立っていて、えぐえぐと泣きながら、

『俺が悪かったです。仲間に入れてください……』

と言っていた。

何だか可哀想になってきたので、ケーキを出してあげると、グスグスと鼻を嚙りながら大人しく食べておりました。

内心「小学生か!」と突っ込みを入れていましたが、敢えて生温かい目で見守ってやりましたとも。

「いやあ、結構使い勝手がいいですねえ。特許とつたら如何ですか?」

等と言いながら20円をカーリーの机の上に置く。

褐色のコインがチャリンと音を立てて転がった。

すると、カーリーがカリカリと動かしていたシャーペンがピタリと止まり、芯がブツツと折れた。

おおう、微細にバイブレーション……。

彼の額には青筋が浮かんでいるように見えた。

しかし、カーリーはゆっくりと息を吐き出しながら、搾り出すように言葉を発する。

「ふ、ふん、ここで君の怒鳴りつけた所で、僕がバカを見るだけだからね。それにもう直ぐテストも控えているし、君に構っている暇も無いんだ。その時、改めて君の実力を見せてもらおうとするよ」

こめかみを押さえながら力チカチとシャーペンの芯を出して、一度私を見てから再び問題を解き始めるカーリー。

その際、私を見る彼の目はとても挑戦的で、ほんの少し怖かった。

「あうっ、そんなに睨まなくても……あ、でも。実力というほどのものはわかりませんが、次のテストは満点採りますんで……」
「はあ!？」

カーリーが目を吊り上げた。

と言うか、周りの空気が変わった。

カーリーだけではなく、他の生徒達も私をなんだか睨んでおります。

おおう、こ、怖いであります！

思わずガクブルと震える私に、カーリーは言った。

「それは僕に対する挑戦状か。ふん、分かった……受けて立ってやる」

のえええええ！？ いつの間にやら私、挑戦状を叩きつけた事になってるよ？

と言うか、他の人たちも挑戦的な目つきになってるし！

あうううゝ……折角まぶダチに一步近付いたと思っただのに……。

その後、いつにも増して教室内のカリカリ音が半端無かったです。

第十四：おせっかい（前書き）

大分間を開けてしまいました。が、漸く更新。

楽しみにして頂いている方、お待たせしちやって本当に申し訳ないです。

第十四：おせっかい

『突如集められた何の接点もない男達三人。

そこは険しい山の頂上に建つ不可思議な洋館。

誰が何の為に建てたのか。

その洋館の主は誰なのか。

何故彼らは集められたのか。

まるで迷宮のような洋館の中、彼らは一枚の写真を見つけた。

それは仲睦まじい一組の家族の肖像。

そして、その写真を見つけた事から、物語は意外な展開を見せてゆく。

そして、また新たに現れた、彼らとは別の男達の存在。

謎の女の出現。

その女の背には美しい蝶のタトゥーがあった。

果たして、彼女は誰なのか！？

写真の家族の正体は！？

シリーズ最高傑作 長編バイオレンスマステリー

《新・オヤジ達の沈黙 山脈の頂で愛を叫ぶ獣達》 近日発売！！』

「お、おおおおおー！！！」

私は携帯を掲げながら訳の分からぬ声を上げる。

いやはや、携帯でオヤジ達の新巻情報を検索して見つけましたこの一文。

ぬはっ！ これはこれは、とてつもなく期待させられる紹介文であります！

今度のオヤジ達はミステリーなんですか！？

それにそれに、この謎の女性というのは、もしかしくとも、るみ子ですよね！？

蝶のタトウーなんて如何にもじゃないですか！ 実際のるみ子の背中には蝶のタトウーがあるしね！

ムフフ、そこはあえてのネタバレですな？ るみ子ファンには堪らんでしょう。

呉羽つては何気なるみ子ファンだからなあ……。

あー……と言うか、呉羽の手にはもう既にこのオヤジ達があるんですよね。

はうっ、羨ましいですう。

晴れてお仕置きが解除になりましたら、早速感想を聞き出さねば！
とは言ってみたものの、気になって気になって、今直ぐ呉羽の元に行きたくてなりません。待ちきれないよう。

これは反動が凄そうですね、私……可笑しな行動をとらないといいんですけど……。

そんなこんなで、私が「うーん」と唸っていると、隣に座っているカーリーが私の事を見た。

「君、さっきから五月蠅いんだけど。なに唸ってるんだよ？ もしかしてさっき出された問題？」

まあ、確かにあの問題には僕もてこずって
「いいえ、それでしたら出された時点で解いてしまいました」

「なっ!？」

カーリーは私の言葉に、信じられないと言っような顔をしているので、証拠のノートを見せてあげた。

「こ、これは……他の応用問題まで……」

「はあ、時間が余ったもので」

「か、完璧だ……」

カーリーはフルフルと震える手で、わたしのノートを持って、そこに書かれている問題をじっと眺めている。

さすがはカーリー。

ちゃんと正解かそうでないか分かるようです。

学年一位は伊達じゃありませんね。がり勉君だしね。

あつ、今は元か。現在は私が一位だし。

普通を目指す私としては不本意極まりないですけど。

等と、カーリーが聞けば、恐らくは腹立たしい事この上ないような考え。

勿論口には出していないのだけれど……。

「……何か今、物凄くムカつく事考えてなかった? 何だか今、こ

うイラッとしたと言うか、もやもやするんだけど」

「エ? 何ノ事デスカ?」

おおぅ、カーリーってばエスパー?

「何でいきなり片言? って言うか考えてるよね? その顔絶対考えてるよね!？」

「ええー？ ワタシちつとも考えてないアルよ？ 元学年一位のがり勉君なんてちつとも考えてないアル」
「何でまたいきなり中国人訛りになるんだよ！ 新渡戸先生じゃあるまいし！」

新渡戸先生と言うのは、新渡戸稲作と言って、去年担任だった杉本先生がおたふく風邪になった時に臨時で入った先生の事である。パンダが好きなため中国が好きらしく、怪しい中国人の格好をしている非常に変わった先生であった。

今は杉本先生が復帰して、その先生はいないのだが。

「と言うかさ、元学年一位のがり勉君って、それ嫌味だよな？ 明らかに僕をバカにしてるよね！」

「キャツ！ 他人の心を覗くなんて、カーリーのエツチ！」

「エ、エツチって！ ていうか、やっぱり考えてるじゃんか！」

エツチと言われて、顔を真っ赤にしながら焦っているカーリー。

バンと机を叩いた後、ズイツとノートを付き返してくる。

そのノートを受け取りながら、私はそんな事よりも、なんだか可笑しくてブククと笑ってしまった。

だって……ねえ？

「考えてるじゃんか」ってさあ……「じゃんか」って……何気に可愛くない？

普段、生真面目ですましている分、そんな幼い少年のような言葉遣いは、なんと言うか胸がきゅんとした。

ハッ！ まさかこれって“萌え”！？

カーリー萌え！？

あつつ、なんか最近、呉羽以外に胸きゅんしています！
う、浮気じゃないですよ！ 私の心は呉羽だけなんです！

「ムカつく位にニヤけていたと思ったら、何でいきなりおたおたし始めるんだよ？」

「私は呉羽が大好きです！」

「は？ 何でいきなり僕が君の恋人への想いを告げられる訳？」

「呉羽を愛しているんです！」

「だから何で……ハア、本当にバカップルだよね……そういう事は本人に言いなよ」

心底疲れたという顔を溜息をつくカーリー。

しかしながら、私はその言葉にズーンと落ち込む。

「出来る事ならそうしたいですが、今は会っては駄目なんです……」
「はあ？ 何でさ。彼が来た時も隠れてたけど、喧嘩でもしたの？」
「お仕置きなんです……暗黒執事なんです……」
「はあ??？」

益々もって訳の分からないという顔をするカーリー。

私はと言うと、ズーンと沈み込んだまま、机に突っ伏した。

足りない……足りないであります……。

私から呉羽が足りない……。

期限の一週間まで半分位しか経っていないというのに、これでは先が思いやられるというもの。

そこまで私は呉羽にひたひたに浸っていたと言う事だろうか。

「何だよお仕置きって、暗黒執事って」

「リオデストロイ……」

「何それ」

「石化ビームで相手を攻撃するんです」

「……それってアニメとかヒーロー物の話？　ハア……全く、ひとが心配してみれば……」

カーリーは何やらボソリと言ったけれど、それは私にはよく聞こえなかった。

「うん？」と首を傾げてみれば、カーリーはハツとした様子で、「ありえないっ」と言いながらブンブンと頭を振っていた。

「どうしたんですか？」

「な、なな何でもない！　と、とにかく！　あんまりウンウン唸っていると、こっちは五月蠅くて勉強に集中できないんだ！　悩むなら一人で静かに悩んでもらいたいものだね！」

何故だか異様にどもりながら答える彼であったが、最後にはフンと鼻を鳴らしながら冷たく言い放つカーリー。

あうっ、カーリー今日は冷たいです。

やっぱり今度のテストで、私をライバル視しているからでしょうか。

何だか彼のその態度に、悲しくなった私は、今日の所はそれ以上彼をおちよくって遊ぶ事はしないでおこうと思った。

何より私がそんな気分じゃないしね。

そうこうしている内に、次の授業を告げるチャイムが鳴った。

私は教科書をこそそそと出しながら、

「呉羽に会いたいな……」

ボソリと小さく呟くのだが、それを聞きつけただろうカーリーが、僅かに眉を顰めて私を見ていた事には気付かずになっていたのだった。

+++++

その日の放課後。

今だ自分はミカにふられたのだと思っっている呉羽は、帰宅途中であつた。

何処にも寄る気は起きず、かといって素直に家に帰るのも、思っっていた。

バイトもあつたのだが、元よりミカの為に始めたもので、しかも自分の嫌いな父親の店でのバイト。正直もう辞めようかとも思っっていた。

そして、そう思っていたその時、携帯が鳴って呉羽は携帯を取り出した。

なんと、丁度考えていたその人物からの電話である。

なんとも言えない嫌な顔をしてその携帯に出る呉羽。

「……何だよ」

『やあ、呉羽。何だよは父親に向かって失礼じゃありませんか』

「うつせーよ。オレはあんたを父親なんて呼びたくねーんだよ」

『おや？ どうしたんですか？ いつに無く不機嫌ですなえ』

「オレが不機嫌でも何でもいーだろーが。あんたには関係ねーだろ

「！」

その取り付くしまもないような呉羽の言葉に、携帯の向こうから苦笑とも呼べる笑い声が聞こえて、呉羽は更に不機嫌な顔になった。自分でも分かってている。これは八つ当たりだと。

そして、きつとこの携帯の向こうの人物は、その呉羽の心情に気付いているに違いない。

その証拠に、

『ミカさんと喧嘩でも?』

と訊いてきた。

呉羽はグツと唇を噛み締めると、

「うううせーな！ あんたには関係ねーって言ってるだろ！」

そう怒鳴り返していた。

『否定しないと言う事は、凶星なんですね？ 全く、不甲斐ない…』

…』

わざとらしい溜息が聞こえてきて、呉羽は携帯を真っ二つに折りたくなつた。

額を押さえ、やれやれと言うように頭を振っているに違いない。その姿がありありと思ひ浮かんだ呉羽の顔の筋肉はヒクヒクと引き攣っている。

だが不甲斐ないのは事実であり、咄嗟に言葉も出ない呉羽であった。

「チツ、確かに不甲斐ない事は認めっけど……んな事より一体なん

の用なんだよ」

『ああ、そうでした。それはですねえ……』

「ああ、そうだ。バイト今日は行かぬーからな。つーか、もう辞め」

『駄目です』

呉羽の言葉を遮りピシヤリと言われた。

電話越しながら有無を言わせぬ声。

ムツとしながら呉羽は訊き返した。

「何でだよ！」

『貴方には居て貰わないと困るんです』

「っ！」

真剣な言葉だった。

確かに呉羽にとって天敵と呼べる存在であるが、母と別れる以前はまだ父親として慕っていた事もあった筈である。

なので、少しばかりグラリと心が揺れたが、その後に『売り上げ的に』とボソリと言った事が全て台無しにしていた。

呉羽の携帯を持つ手がブルブルと震えている。

『いやあ、貴方私に似て顔はいいので、ここのところ女性客が増えて増えて。なので今辞められると、売り上げがガタンと下がります』
「知るか！」

このまま携帯を切ろうと思っていたが、変な所で律儀な呉羽は、取り敢えず用件を聞く事にした。

『とにかく、今日はなんとしても来てもらいたいんですよ』

「……なんでだよ？」

その声はまたしても真剣なものだった。
呉羽は少しばかり警戒しながら訊ねてみる。

『今日は私の店でバースデイパーティーがあるんですよ。開店当初からの常連さんでしてね、私個人でもお世話になった方なんです』
「?? それで何で俺が必要なんだよ? そんなに客が入るのか?」

パーティーと言うからには団体客なのだろうかと思ったのだが、

『いえいえ、パーティーと言っても少数です』

「じゃあ何で……」

『御指名です』

「は?」

『ですから、そのお客様じきじきに、呉羽にエスコートしてもらいたいと』

「断る!」

今度は呉羽がピシヤリと言い放った。

(エスコートってアレか! いつもこいつが予約制の誕生日イベントで、客の手をとって席まで案内したり、その客の為にケーキ切り分けたり飲み物をサービスしたり……)

とにかく付きっ切りでその客の相手をしなければならないのは事実である。

まあ、この人は自分の気に入った女性であれば、そんなイベントがなくても常にエスコートしているのをよく見るが……。

はつきり言って、ここはホストクラブかと突っ込みたくなる。

「冗談じゃねーぞ！んなホストみてーな事できつかよ！」

『いいじゃないですか、ホスト。だってミカさんと喧嘩したんでしょ？ 丁度いいじゃないですか。新しい出会いも待ってますよ。』

その代わり、私がミカさんをもらっちゃいますけど」

「誰があんたみたいな節操無しにやるか！！」

怒鳴ってからハツとする。

今の自分にこんな事を言う資格などあるのだろうか。もうミカは自分のものではないのに。

すると、携帯の向こうで笑う声が聞こえる。とても愉快そうな声だ。

『全く……ミカさんが大事なら、さっさと無様な姿勢して土下座でも何でもして仲直りしてしまいなさい。貴方の事だから、きつと相手の事ばかり考えて、自分の気持ちを押し通す事を諦めてしまったんでしょ？』

『嫌な所が似ちゃいましたねえ』と呟く声がする。

そういえばと、音羽が「そういう所はあの人そっくり」とか言っていたのを呉羽は思い出した。

と言う事はこの人もそうだったのかと、物凄く嫌だと呉羽は思った。

(こいつが！？信じらんねえ……ってか認めたくねえ！)

そんな事を苦々しく考えていると、まるで諭すように、教師のような口調で言われた。

『まずは諦める事を諦めてしまいなさい。同じ諦めるでも、こっちの方が何倍もスッキリしますし、手に入るものも多いでしょう。で

ないと思うなるか……ここに反面教師がいるでしょう？」
「……………」

呉羽はグッと携帯を握り締める。そして悔しそうに唇を噛み締めた。

不覚にも素直に聞き入れようとする自分がある。その事を認めたくなくて、いつまでも黙っている、フツと苦笑するような気配が携帯の向こうからした。

『まあ、私も受け売りなんですけどね。分かった後にはもう遅かったんですけど、貴方はまだまだこれからでしょう？』

私の言う事を素直に聞き入れてくださいとは言いませんけど、取り敢えず今日はお店に来てください。実は今日のお客様がさっきの事を私に言ってくれた人でしてね。色々と相談してみるといいですよ』

「なあ、その人って……………」

『百聞は一見にしかず。会ってみれば、その人となりを理解できるでしょう』

そう言うと、『では』と言ってプツリと切れた。

何だか言いたい事だけ言っていった気がする。言いくるめられた感もしないでもないが、何となくそのい人物に会ってみたいような気にもなってきた。

「それにしても、なんか物凄く父親みたいで気持ちわりー……………」

いや、実際自分の父親であるのだけれど、ここまで父親らしい態度をとられた事が正直なかったの、もやもやとした気持ちと共に苦虫を噛み潰したような顔で携帯を睨みつける呉羽なのであった。

そうして、再び帰路につく呉羽の前に、立ち塞がる人物が居た。何だか夕日をバックに、逆光で顔がよく見えない。

「誰だあんた？」

「フン、如月呉羽だな」

歩み寄ってくる人物は、顔がよく見えてもやっぱり面識の無い男子生徒で、誰だかさっぱり分からなかった。

制服など着崩して、アクセサリーなどをジャラジャラつけている自分と違って、きっちりとした格好をしている優等生タイプに見える。

そんな人間に声を掛けられる謂れは無いと訝しく相手を見た。

とにかくその人物は不機嫌そうな顔をしていて、呉羽の事を忌々しそうに睨んでいる。

(……オレ、なんかしたか?)

そう疑問に思うのだが、性分というかなんと言うか、無遠慮に睨まれて、呉羽も釣られるように相手を睨み返してしまう。

けれどそれに怯む事無く、その眼差しを正面に捕らえるこの人物は、腕を組み高圧的な態度で言い放った。

「一ノ瀬ミカと仲直りしろ！」

「……は？」

一体何を言われるのかと身構えていた呉羽は、その意外な言葉を聞いて口をポカンと開ける。

そんな事はお構い無しに、目の前の男子生徒は苛立たしげに言い

募った。

「何があつたのかは問わないけど、無関係の僕まで巻き込まないでくれるかな。毎日隣で溜息を付かれ、会いたいだのお仕置きだの、オヤジ達だのと訳の分からない言葉をぶつぶつと隣で呟かれて僕はいい迷惑だ！これで成績下がったら君達のせいだからな！バカップルはバカップルらしく馬鹿馬鹿しくイチャイチャしている！」

ビシッと指を突き付け鼻息も荒くそこまで一気に言つた優等生風の男子生徒は、ぜいぜいと肩で息をしながらフンと踵を返した。

「え？ お、おい！」

言いたい事を言いたいだけ言われ、訳の分からない呉羽は呼び止めようとするが、ここでピタリと歩みを止める男子生徒はもう一度ビシッと指を突きつけた。

「一ノ瀬ミカに、僕をおちよくるのは止めるよう君から言っておいてくれないか！ 彼氏なら自分の彼女の管理くらいしっかりしろ！」

また、フンと鼻息を荒く言い放つその生徒は、それで満足したのか頷きこの場から去ろうとする。

「って！ 一体お前は誰なんだよ！」

見ず知らずの優等生に、己の恋愛事情をとやかく言われる謂われは、はつきり言つて無い。

せめて名前を聞きだそうと問い掛けた。

すると、その男子生徒は「ああ」と声を発し、顔だけ振り返ると一言、

「カーリーだ……」

それだけ言うと、何故だか一瞬動きが止まり再び動いたかと思うと、電光石火の速さであつと言つ間に姿が見えなくなつた。

その場に残された呉羽は、一人呆然と立ち尽くし、

「カーリーって何だ？」

そう呟くのが精一杯であつた。

第十四：おせっかい（後書き）

カーリーはやはりツンデレなのか！？
自分自身でカーリーなんて名乗っちゃってます。激しく自己嫌悪
することでしょう。

次回予告

カーリー目線なお話。

これからもペースが遅くなるやもです。PCの調子も悪いので。

第十五話：カーリーの憂鬱

「会いたいな……」

そう隣の席から聞こえてきた、寂しそうに切なげな声を聞いて、見れば今聞いた声と同様の表情をしていた。

それで僕は言い知れない胸のざわ付きを覚えた。

その理由なんて分かる筈もなくて、苛立ちも同時に覚えて、何だか納得いかないものも感じていた。

それにより、いつもより授業に集中できなかったり……（何でだ!??）。

次のテストで満点を取ると豪語した一ノ瀬ミカの挑戦を受け取った僕に対するこれは嫌がらせなんだろうか。

そう思った僕は負けず嫌いな性格も災いして、柄にも無いお節介なんてものをやく羽目になる。

いや、説教も含まれていたような気もするが。うーん……まあ、そつちは別にいい。いつもの事だし。

最初は本当、そんな事するつもりなんて無かったんだ。

ただ、その日の放課後、家路につく僕の目の前に、目にも鮮やかな金と赤の色を見かけてしまい、昼間感じたイラ立ちともやもやが蘇ってきて……。

そして……。

言いたい事を言ってやってその場を去ろうとする僕に、あの男は

こつ訊ねてきた。

「つて！ 一体お前は誰なんだよ！」

そう問われ、僕は立ち止まると、そう言えばまだ名乗ってなかったなと顔だけ其方に向けて名を告げる。

「カーリーだ……」

と……。

そして、言った所で僕は我が耳を疑った。

ちよつと待て僕。

今なんて言った！？

カーリー！？ カーリーって何だよ！？

何であのーノ瀬ミカの名づけた渾名を名乗ってんだ僕は！？ さも本名かのようにっ！！

イヤイヤ、僕の名前は仮屋学だ！ 親に付けられた立派な名前だ！
カーリーなんてふざけた名前では断じてない！

チラリと今名乗った相手を見る。

金髪サイド赤の派手な出で立ちの男子生徒、如月呉羽を見れば、彼はポカンとした顔で僕の事を見ていた。

僕はその視線を前に居た堪れなさを感じ、この世に生を受けてから初めてと言っても過言はない位の俊敏さで（自分でも吃驚の早さだ）その場を立ち去った。

如月呉羽の姿が見えなくなった所で、僕は立ち止まり、道の脇によつてそこにある何処かの店の看板に手を付き深い溜息をついた。
いきなりの速度変化に、少しばかり筋肉が軋む感じがする。

おまけに体の中に乳酸が溜まり、酸素補給の為、心臓が悲鳴を上げているのも分った。

ああ、僕って体力ないな……。

改めて自分の運動能力の低さに呆れながら、先程の光景を思い出し両手で顔を覆う。

「……一生の不覚だ……」

この気持ちの有り様をどう表現すればいいのだろうか。

何だか新学期に入って、あの一ノ瀬ミカに出会って、ずっとこんな気持ちを味わっているような気がする……。

今日の事然り、テストの事も然り。

僕は何だか言い知れない敗北感を感じながら重い足取りで家路に着く。

ああ……壁に張り出されたテスト結果に、当たり前のように自分の名前がトップにあると信じて、そこに違う名前を見つけてしまった時の敗北感とはまた違った感じのような……。

うーん……。

そもそも、何で僕はこんな御節介な行動をしているんだろう？

バカツプルが喧嘩して、その仲直りの手伝い？

馬鹿じゃないのか、僕。

放っておけばいいじゃないか、こんな事。

何わざわざライバルを応援するような事をしてるんだ？

このまま行けば、彼女が落ち込み続けて、ついでに成績も落ち込んでくれれば、また僕が一番になれるじゃないか。

いや、ちょっとその考え卑怯かもしれないけど……。
せこいかもしれないけど……。

イヤイヤ、そもそも恋愛なんかにつつつをぬかしているからそんな事になるんであって、自業自得とも言える。

学生の本分は恋愛じゃなくて学業だろ!?

って、じゃあ何でそこで僕が助ける必要がある!?

……自分の為?

……そう、自分の為ではある。

うん、そうだ。自分の為だ。

僕の隣で始終ぶつぶつと愚痴を呟かれていては集中力に欠けるからだ。現に今日は授業に集中できなかつたじゃないか。

それに、あの不景気そうな顔もいただけない。

あの、今にも泣きそう……消え入りそうな声も……。

そこまで考えて、慌てて僕は首を振る。

いけないいけない、またそっちに意識をもってかれた。

こんな考えは早々に打ち切るべきだ、うん。そうだ、そうだ。

近々行われるテストに向けて色々と準備もしなければならぬ。
な。

一ノ瀬ミカに挑戦状まで叩きつけられたからには、僕だって負けてはられないのだ。

なので、僕は途中参考書やら問題集を買う為に本屋に寄る事にした。

きっと、次のテストで彼女の实力は測れるだろう。

満点を採るとか言っていたけど、僕でもそう簡単には満点なんて取れた試しはない。

一ノ瀬ミカが、本物か偽者かはつきりする筈だ。

そして、目ぼしい物を見つけてレジに向かう途中、とある本棚の前で僕は足を止めた。

そこにはシリーズ物の小説が並べられている。

その小説の名前は……。

『オヤジ達の沈黙シリーズ』

「……………」

僕はそれを無言で手に取った。

何だかとても渋く重々しいシリーズ名である。

確か、去年映画化してたよな。

あの紅小鳥が出た事で、ちよつと話題にもなったよな。

しかも旦那であるロック歌手が主題歌を歌っていると言って、夫婦競演だとか言われてたよな。

僕もちよつとファンだったりするんだよな、紅小鳥。

そんな、一時期話題になっていた小説を見ながら、僕は一ノ瀬ミカを思い出していた。

これか……。

これだよな？ 一ノ瀬ミカが言ってる本って……。

『オヤジ達に謝ってください！』

怒りで真っ赤になりながらそう言っていたのを思い出し、何故あそこまで空想上の人物に感情移入なんか出来るのか……僕は彼女が理解できない。

しかし、ふと顔を上げてみると、丁度鏡張りになっている壁があつて、そこに僕が映っていた。

僕は笑っていた……。

とても穏やかな微笑だった……。

「……………」

それを認識すると共に、壁に映っている僕の顔は驚きの表情をとつて、次には口を一文字に引き結ぶ。

な、何で笑ってるんだ、僕は！？

これじゃまるで、僕が一ノ瀬ミカの事を思い出して微笑んでいたみたいじゃないか！

……………。

イヤイヤイヤ、違うぞ！ これは微笑じゃない、嘲笑だ！

幼児のように実在しない空想上の人物の為に一喜一憂する彼女を、あざ笑っていたただけだ！

ハッ、てんでガキだな！！ と……………。

ここで一旦僕は冷静になった。
壁に映る僕は、この一瞬の間に目まぐるしく表情を変えていた事
だろう。

「……何やってんだろう……」

溜息混じりに出た言葉だ。

本当、何やってんだろうな、僕は……。
うん、さっさとこれ買って、家に帰って勉強しよう。

レジで会計を済ませた僕は、家路に急ぐのだった。

そして家についた僕。
遅かったのねと出迎えた母に本屋に寄った事を告げ、自室へと向
かう。

階段を上がってすぐの扉には、「MANAMI」書かれた札がぶ
ら下がっている。

真奈美、僕の妹だ。現在中三。

フツ、僕に似てなかなか優秀なんだ。

ハッ！ い、いや、べつにシスコンって訳じゃない！

さっき本屋で妹の為に参考書などを買ったけど、断じてシスコン
とかじゃないから！

マザコンって言われて、おまけにシスコンなんて目も当てられな
いじゃないか！

フン。

全く、何がマザコンか、一ノ瀬ミカめ。
弁当なんぞ、母さんが勝手に作ってるだけだ！
それはもう絶品だけど！ 特にミニハンバーグとか玉子焼きとか！

等と心の中で一ノ瀬ミカに悪態をつく。

この苛立たしい気持ちは妹の顔を見れば払拭されるかもしれない。
きっと真奈美は、この扉の向こうで、高校受験の為に机に向かっ
て勉強に勤しんでいる事に違いない。

そう信じて僕は、扉をノックし返事も待たずに扉を開けた

「まな　っ！！？」

僕は目の前の光景を見て絶句した。

黒と白。

部屋がひらひらした物で埋め尽くされていたのだ。

「ちょっ　お兄ちゃん！？　何勝手に入ってきてるのさ！　もー、
プライバシーの侵害！　早く出てっつてよ！」

あまりの事に、真奈美が烈火の如く怒りながら僕に詰め寄ってき
た事に気付かないくらいだった。

ハッと我に返り、どういう事か説明をしてもらおうと視線を妹に
向けて、そこで更に僕の思考は途絶えた。

くっ、唇が黒いつ！？

なんと妹の真奈美は化粧をしていたのだが、それだけなら別に驚
きはしない（怒りはするが）。

しかし何故か妹の唇に塗られた口紅は黒かった。
というか、全体的に黒い。

着ている服が。

よく見れば爪も。

ゴシッククロリータ。

所謂ゴスロリと呼ばれる物を、妹は身に纏っていたのだ。

……な、何だこれ？

黒いよ！？ 白いよ！？ ヒラヒラだよ！？

いや、似合っていないって言ったら嘘になるけど！ 寧ろ真奈美は
可愛いけど！

ある意味、女の子らしいっちゃ女の子らしいかもしれないけど
でも、無い！ 無いよその必要以上の白と黒！

真奈美、何を白黒ハッキリつけたいの！？

ハッキリつけなくていいから！

白黒ハッキリしてるのは、パンダだけで十分だから！

僕の脳内は目の前の事を受容できずに現実逃避をし始めたようだ。
なんだかもう、支離滅裂である。僕の思考……。

神様、僕は妹の趣味が理解できません……。

その後、色々あったが、今は自室にて静寂を保っている。

当然、僕は真奈美の姿を注意した。

今は受験生でもあるし、そんなものに現を抜かしている場合じゃ

ないと。

しかし、真奈美は激しく僕を非難した。

何でこの服の素晴らしさが分からないのだと。
勉強するのに格好なんて関係ないではないかと。

確かに、どんな格好をしていようと、勉強する事は可能ある。

しかし！ しかしだ！

なんでロリータなんだ！？

しかも喪服を模した様なおどろおどろしいゴスロリなんて……。
せめて、もっと明るいのでだな……。
ピンクとかオレンジとか……。

僕は人知れず溜息をつく。

全く理解の出来ない僕に、妹は雑誌を見せて、ロリータの良さを説き伏せようとしたけれど、やっぱり興味の持てない物は持てないので「くだらない」と一蹴したら酷く驚かれた。

「そんな、この美しさに無反応なんて……」とか「ドール様に落ちないなんて……」とか言っていたが、何の事かと思えば、その雑誌の表紙のモデルの事のようにだった。

まあ、確かに物凄い美少女であったが、不思議と心は動かされる事はなかった。

それよりも、その表紙に写っているモデルの笑顔を見て、何故だか僕の隣の席のあの迷惑極まりない女生徒の事を思い出していた。

~~~~~!? 何でここで一ノ瀬ミカを思い出すんだ!?

「とにかく、そんな事にかまけている暇があるなら、しっかりと勉強しろ!」

脳裏に浮かぶ彼女の顔を振り払うように少しきつめに言って、ずっと手に持っていた渡す予定であった参考書を真奈美に突き出す。納得できないと言う様に唇を突き出し頬を膨らませる真奈美。とても可愛い仕草であったが、これを他の男の前でやっていないかどうか、兄として非常に心配になった。しかし、その事を問い詰める事も出来ずに、僕はそのまま「もう分かったから早く出て行って!」と真奈美に追い出されてしまったのだ。

「はあ……勉強しよ」

僕は全ての思考を振り払うと、さっさと着替えを済ませ机に向かうのだった。

+++++

一方、カーリーこと仮屋学が去った、彼の妹の部屋では……。

「ねえねえ、ちょっと聞いてよ! 今僕の兄貴がさ」

ゴスロリに身を包んだ真奈美は、携帯に向かって今しがたあった出来事を相手に告げる。

そして、電話の向こうの相手は真奈美の只ならぬ様子に、どこか面白そうだと言つかのように上擦った声で訊ねた。

『なんやなんや、何があつたんや黒母!?!』

「もー、何でそんなに楽しそうなのさ。まあいいや、それよりもちよつと聞いてよ紅百合! 兄貴つては信じらんない!」

『なんや、あんたの兄貴がどうしたつて言つんや? あのかそ真面目で頭が固いつちゅーあの兄貴やる?』

「そうだよ、その兄貴だよ」

『その兄貴がどうしたつて?』

少しばかり興奮が冷めたのか、真奈美は溜息をついた。

「それがさ、今さつきドール様の載った雑誌見せたんだけど」

『何や! 一発で惚れたんか!? また新たな信者の誕生か!?!』  
「違う違う、その逆! “くだらない”の一言で一蹴されちゃったんだよ!」

一瞬、無言が続いたかと思えば、次の瞬間には『な、何やてー!』と叫ぶ少女の声。

真奈美は携帯を耳から外し、そのキンキンと通る声を遠ざけた。

真奈美には彼女の気持ちがよく分かる。だつてついさつきまで自分も全く同じ心境だったのだから。

あわよくば、口煩い兄を沈静化できないかと思ひ、ドールの姿を見せたのだ。

後、また新しい信者が増えれば尚いいと（実は母はもう既に信者にだつたりする）、真面目すぎる堅い頭な兄が少しは柔らかくなつてくれればいいと思つたしだいである。

しかし、蓋を開けてみれば、柔らかくなるどころか、彼の頭はダ

イヤモンド並に硬かったようだ。

「全く……兄貴の美的センスを疑っちゃうよ……」

「ハア……」と溜息混じりにそう言えば、電話の向こうで紅百合が、『いや、ちょっと待ちいや黒苺。もしかしたら、それはちょおっとばかり違うかもしれんで……?』

と、何か含むように言うのが聞こえる。

何となく、真奈美の脳裏には紅百合のニヤリと笑う顔が思い浮かんだ。

「違つって、どついつ事?」

『黒苺、落ちて着いて聞くんやで?』

「な、何!?!」

何だか声を低くし念を押してくる紅百合に、若干ドキマガとする真奈美。

一体彼女は何を告げるといつのだろうか。

紅百合の言うとおり、割と身構えて次の言葉を待っていたつもりであった。

しかし、携帯に当てている耳から聞こえてきた言葉は、真奈美を激しく動揺させるに十分だったようである。

その言葉とは……。

『あんたの兄貴やけどな?　うちが思うにこれはきつと恋をしているに違いないで!』



一人しか今は目に入らないんや。

だからドール様のお姿を目にしても心動かされんかったんや』  
「た、唯一人……?」

何となく夢見心地のような口調な紅百合の言葉が、何一つ兄と結びつかなくて、真奈美はヒクリと頬を引き攣らせる。

(に、似合わない……!)

しかし、今の紅百合には何を言っても無駄だろう。

真奈美達のようなお年頃な女子には恋ばなは不可欠だ。

真奈美自身、自分とは全く無関係であったのなら、紅百合に便乗してキヤイキヤイと花を咲かせていた事だろう。

しかし、生まれてからずっと身近に居る実の兄の事なのだ。

なんと言うか、気恥ずかしいというか、顔を合わせづらいというか。

けれど電話の向こうの紅百合にとってはそんな真奈美の心境など何処吹く風である。

全くもってお構い無しに、寧ろ意気込んで彼女は叫んだ。

『よっしやー!! うちらでその恋、成就させてやるうやないか!』

「えっ!?! ちょっ、何言ってるの? 何言ってるのお!?!」

『なははは! 最近ドール様や竜貴兄に会えなくて寂しい思いしとつたけど、なんか楽しくなってきたわ!』

「楽しくって……僕の身内の事なだけど!」

『まあまあ、いいやないか。黒母かてドール様と会えんと鬱憤も堪つとるやる?』

「それはそうだけど……」

『いい気分転換になるとちゃう? それに、成功すれば、あんたの兄貴も少しは考え方が甘くなるんとちゃう? 一石二鳥やないか』

「うう……そうかもだけど……」

『小豆にはうちから言つとくし、色々と作戦立てようやないか!』

半ば押し切られる形で真奈美はそれに頷いていた。

確かに信じられない話ではあるが、これが真実本当なのなら真奈美は純粹に応援してあげようという気になった。

(勉強ばつかりの兄貴にも、漸く春が!？ だとしたらその相手つてどんな人なんだろう?)

非常に気になる所である。出来る事なら、自分の趣味にも寛容な人であれば尚いいと思った。

こうして、ドール教信者たるロリータ三人衆が一人、黒母改め、本名 飯屋真奈美は、まだ見ぬ兄 学の思い人に思いを馳せるのだった。

## 第十五話：カーリーの憂鬱（後書き）

新事実！ カーリーの妹は、三人衆の僕っ子黒莓だった！（なんちやって！）

三人衆の一人、ありんす小豆ちゃんが出番がなかった。（ごめんよ）  
彼女達は普段は至って普通の中学生を演じています。結構優等生。  
この三人衆が今後どう関ってくるかが見物ですね。

## 第十六話：大和の肩書きとオプシヨン

「ただいまー」

そう何時もの如く、帰って来た私は、玄関にて帰宅の挨拶をば…。

『おかえりー』

「ん？ この声は晃さん？」

返事は無いと思われたけれど、リビングにて返事があり、その声は聞き覚えのある声で、どうやら今日は晃さんがいるのだと分かった。

晃さんというのは、父の友人で、父のバンド『武士ギヤラクシー』でドラムを担当している人。因みに私の初恋の人でもあります。

彼の声がするという事は、父も帰っていると云う事ですね？

ムムム……また変な事言わなければいいんですけど……（主にエツチイ事）。

父つてば予測不可能な事をよくやりますからね。

何をしでかすか……。

まあ、その時は躊躇い無く鉄槌を下しますけどね。

そんな事を考えながらリビングに向かう私は、そこで隅っこでギターを持って頂垂れている父を見た訳であります。

ぬおっ!？

な、何がありましたか父!？

なんか黒い霧ときのこを背負っているように見えるんだけど!？

父の髪は相変わらずの派手な赤い色をしていたけれど、今日ほどこかくすんで見えた。

その表情は憂いを帯びて儂げで、うるさい位に鬱陶しいいつもとは別人のよう……。

「……何してんの、父……」

誰に聞くとも無く呟く私。

すると、いつの間にもやら此方に来ていた晃さんが肩を竦めながら苦笑いしていた。

「晃さん、何ですかアレ？」

父を指差し訊いてみる。

「アレって……あんなでも父親だろうに……」

「いえいえ、甘やかすと付け上がりまくりですからね父。それはもう目も当てられないほどに」

「まあ、確かに……」

呆れ納得したように頷く晃さん。

いつも煩わしい位の父ではあるけれど、こんな風になられても鬱陶しく感じる。

ある意味、処理の難しい有害物質と言えなくも無い。

「それで？ 一体全体アレはどういう事で？」

「うん、まあ……ここん所小鳥さんに会えてないからね」

「ああ、長期ロケで海外行ってますからね」

何を隠そう、『オヤジ達の沈黙 ザ・ムービー』第二弾の撮影中なのです！

色気ある役をさせたら右に出る者は居ないという海外でも有名な女優の母、紅小鳥。

オヤジ達の沈黙では不滅のヒロイン、バタフライるみ子を演じています。

今回の映画の全貌はまだ明らかにされていませんが、今から楽しみでなりませんよ！

ムフフー！

「そういう事。ついさっきも電話で話してたんだけど、大和の奴それで余計に会いたくなっちゃったみたいで……」

それを聞いた私は、何も言えなくなってしまう。

いつもなら冷たくあしらう筈の父の行動に、同情の気持ちが生えただ。

だってだって、今現在私も父と同じ悲しみ苦しみ味わってますからね。

好きな人に会えないこのもどかしさが、手に取るように解ってます。まう。

「父……」

よしっ、今日の晩御飯は父の好きな物を出しましょう。

全品父の好きな物でまとめますよ！

私は心にそう誓って、キッチンに向かおうとした。

しかしその時、父がいきなり立ち上がり、ギターを鳴らし出した

のだ。

私と晃さんが見ている中で、父はポロロンとどこか物悲しい音で、それはまるで父の心を表現しているようだった。

それから父は口を開いて歌い出す。

「甘く優しく包み込む」

「……父？」

「オレの心に色づく君」

父、それって母の事を歌っているんですか？

切なくバラード調の歌を歌う父は、いつものおちゃらけた雰囲気では無く、派手で激しいロックを歌う武士ギヤラクシーのYAMA TOの姿とも違う。

その姿は唯一人の女性を思う唯の一ノ瀬大和としてそこに佇んでいるのか……。

「君を求めてやまず

離れば想いは棘の様にオレを鋭く突き刺す」

どこか遠くを見つめるその眼差し。

焦がれるようなその瞳は、父の想いをそのままに表しているようだった。

分かる……分かりますよその気持ち。まさに今の私の気持ちを代弁しているようですよ。

何か今日は父に優しくしなきゃなんて思います。

肩でも揉んであげようかな、つば押しの方がいいかな……あ、痛  
いっばは抜きで……。

そんな事を考えている間にも、父の歌は情感たつぷりに盛り上が  
りを見せようとしていた。

私はそんな父の歌に聞き入るばかり。

嗚呼、こんなにも父の歌に感化された事なんてありません。何か  
感極まって泣きそうです。

「 ああ……今すぐ君に逢いたい」

「 うん、うん……」

「 柔らかい君……揉み心地のいい君……」

「 ……うん？」

「 優しくオレを包み込む……そこに顔を埋めたい……」

「 ……」

「 そう、君は……君は……」

コトちゃんの オツパ ゲフウツ!!」

「 やっぱりそうきたかあー!!」

私は皆まで言わず、近くに置いてあつた新聞紙を超高速でハリ  
セン状にして「スパアアン!」と父の顔にお見舞いしてやった。

そう、父はやっぱり父でしかなかったのだ……。

もうっ、もうっ!

さっきまでの私の気持ち返してくださいっ! 危うく泣く所でし  
たからね!

新聞紙を振りかぶった体勢のまま肩で息をしていると、顔の中央  
を赤くした父がそこを摩りながら此方を振り返る。

「いったあーい、何すんのおー!? って、あれ? ミカたん何時の間に帰ってたの?」

「ついさっきです! って言うか、なんて歌歌ってんですか! サイターです父! 父サイター!」

「えっ? 今サイターって二回言った!?」

「ほらっ! 晃さんだって呆れて空気になっただじゃないですか!」

私は今まで一言も喋らないでいた晃さんを指差す。

彼は普通の日の母ほどじゃないにしろ存在が希薄になっていた。

それだけ父の歌に呆れてたって事じゃないですか!

存在が希薄になるほど呆れるってどんだけっ!?

「うん、いやなミカ、俺は別にそこまで呆れてたってほどじゃないぞ? ツーか知ってたし。以前にもあの歌聴いた事があってな」

「えっ!?! だってあんなに存在が希薄に……!」

「おお! 晃は普段から無意識で空気になれる男だ! 存在感が無いのは昔から変わらないぞ! 目立つ為に金髪にしたのに目立たない……どんだけ!?! アッキーどんだけ!?!」

「何言ってるんですか父! 平凡な上に存在感が薄いなんて最高じゃないですか! どんなに目立とうとしてもその平凡さは損なわれないなんて、そこが晃さんのいい所ですよ! 美德です、び、と、く!」

「いや、うん……まあ、その……あのな? 取り敢えず泣いてもいいか?」

その時の晃さんは何処か遠くを眺めていて、その目には光るものが見えました。

「取り敢えず、お下劣な歌を歌う父はサイテーだと思います。よつて、今日の夕飯は抜きでいいと思います」

「えー!? 何言っちゃってんの? ほら、折角アッキーも来てくれてんだし、お客様をもてなさないとは何事かつ! って、今のどう? 父親っぽかった?」

「あ、晃さんはちゃんとお夕飯用意するので待ってて下さいね!」

「えー!? スルー!? ミカたんパパの威厳に満ちたお言葉をスルー!?」

スルーも何も、初っ端から父の言葉なんて聞く耳持ちませんよ。

見直していたのにぶち壊したのは父の責任です。

というか、どんなに威厳に満ちた言葉だとしても、父が口にした途端、その言葉はゴミの様に汚れる事でしょう。

もう父は、威厳クラッシュヤーという肩書きを一生背負うといいと思う。ついでにアホさ加減とお下劣な所はオプシオンでいいと思う。

父に対してぷりぷりと怒りながらキッチンへと向かう。背後で父が何やら喚いているけどそれを華麗にスルーする私。

あ、華麗と言えば、今日は鰯の煮付けにでもしましょうかね。

うん、そうしましょう。今日は和食です。

お米とがなきや。

いそいそとエプロンを装着していると、いつの間に傍に居たのか晃さんが声を掛けてきた。

「なあ、ミカ」

「はい？ 何ですか、晃さん。今日は鰯の煮つけをメインとした和食ですよ」

「おお、それは美味そうだな。楽しみにしてる。って、違う違う」「ん？？」

「ミカ、何か元気ないだろ。悩み事なら聞くけど？」「っ！！」

私は吃驚して晃さんを見やる。

流石晃さんです。こんな短時間で私が悩んでいると判るなんて……。

よし！ ここは一つ、晃さんに相談してみましよう！

吏緒お兄ちゃんに協力はしてもらってますけど、また別の視点からと言うのも大事な事の筈です。

と言う訳で、私は晃さんに全てを話しました。

あ、ちゃんとお料理は作りましたよ。

晃さんはキッチンカウンターに座って、真剣に話を聞いてくれました。

嗚呼……何故この人が父親でなかったのか……。

父だったらここまで真摯に聞いてくれるか怪しいですもんね。

それ所か、面白可笑しく話をややこしくしそうです。

「うーん、そうか。そんな事があったのか……」

「はい、杏也さんの口車に乗せられたばかりに、話がこじれてこじれて……」

「いや、杏也君ばかりじゃないだろう。あの執事君も……」

「は？ 吏緒お兄ちゃんですか？」

難しそうな顔をする晃さん。

吏緒お兄ちゃんがどうしたと言っただけですか？

彼は私に協力してくれて……ああ、何か色々と迷惑を掛けてしまっ  
ってますよね。

今度お詫びをしなきゃ。

何がいいでしょうか？ 父のサイン……は何か癪だから嫌です。  
手作りで作った方がいいですかね。

お菓子？ は甘い者が苦手だった場合はあれですし……直接好物  
を聞くしかありませんか。

あ、そうだ！ 乙女ちゃんに聞きましょう！

そうです、それがいいです。

「ミカ？ 話聞いてるか？」

「ハッ！ ご、ごめんなさい晃さん！ ちょっと考え事してました  
！」

いけない、いけない。

またも思考の彼方にトリップしてしまったようです。

全く私ったら、折角晃さんが相談に乗ってくれているのに……。

これはお詫びに父秘蔵のお酒をふるまわなければ。

洋酒ですが、母が言うには和洋どんな料理にも合うと言っていま  
したから大丈夫でしょう。

うんうんと頷きながら、鰯がうまく煮つけられているのを確認し  
てお料理を終えました。

うし！ 後は盛り付けるだけ！

「晃さん、後は盛り付けるだけです。テーブルで待っていてください」

「ハハツ、まーた話聞いてなかったな」

「ハツ、しまった！」

「しょうがない、料理中に話を促した俺もいけなかったんだ」

「うつつ、ごめんなさい」

「いいって。さ、腹が減ってきたから早く食べようか」

「はいです……」

落ち込みながらも盛りつけた私は偉いです。

「この皿は持って行っていいの？」

「え？ そんな、いいですよ。晃さんは席に座っててください」

「いやいや、毎回お邪魔してご馳走になってるのはこっちなんだから」

うつつ、やっぱり晃さんっていい人です。

何故この人が父親でないのか……。 (二度目)

私も盛り付けが終わったのでお料理をテーブルに運びます。

すると何という事でしょう。父が既にテーブルに着いてスタンバっております。

「父……父のご飯は抜きと言ったはずですが……」

「え！？ あれ本気だったの！？ ひどいやミカたん！ 毎日ファーンに追われてクタクタなのに！ オマケに今はコトちゃんに会えなくて精神的にもクタクタなのに！ 唯一ミカたんの手料理が楽しみなのに！ あ、もちろんミカたんとお喋りする事も楽しみだからね」

「うつつ、なんですかいきなり。おべっかですか！？」

「えー、違うのにー！」

ブーイングと共に頬を膨らませる父。

いい歳こいた大人がしても、気持ち悪いだけだと思っ

「なあミカ、大和の奴ああ見えて反省してるんだ。それに仕事で疲れてるのは本当だぞ？ だから許してやってくれないか」

「お？ アッキーいい事言うねー」

「……父、本当に反省してるんでしょっか……」

疑わしい事この上ないです。

「大和……お前俺のフォローが台無しだ……」

ほら晃さんも言ってる。

ジト目で父を見てみると、晃さんがコソツと話しかけてきた。

「何だかんだ言って、ちゃんと大和の分も作ってあるんだろう？  
大和、ミカの料理本当に楽しみにしてるんだ。だから、な？」

きつと今、私は真っ赤になっている事だろう。

気付かれないように作っていたつもりだったが、どうやら全てお見通しだったようだ。

私は少しばかり唇を尖らせると、フィツと父から顔を逸らして言った。

「晃さんがそこまで言うのなら仕方ありませんね。しょうがないので父の分も用意してあげます」

全く、父は晃さんにもっと感謝するべきですよ。

最初反省しているようだったらちゃんと用意してあげようと思っ

てたのに、全然そんな素振り見せないからお預けになる所だったんですからね。

「オイ、聞いたかアツキー！ ミカたんが、ミカたんがツンデレった！ マイドーター、ツンデレーション！」

「お、おい。そんなんだからミカに嫌がられるんだぞ？」

「まっ！ 何を言うのアツキー！ ミカたんがパパを嫌がるなんてある訳ないでしょ！？ だってミカたんにはしっかりとオレ様の血がどんぶらこと流れているのだ！！ さあ、思う存分オレ様に甘えるがいい！！」

「お、おい大和？ えつとミカ？」

「……………」

ぶうちいっ！！

「私はツンでもデレでもない！！ オールマイティー無関心だあ！！ ふざけた事抜かすなよ？ この威厳クラッシャーを背負って、お下劣とアホがオプシヨンのくせにい！！」

両手を広げて、さも私が甘えてくるのが当たり前のように振る舞う父に、とうとう私は切れてしまった訳だけれども…………。

ああ、父が両手を広げたまま固まっている…………。

あ、今目から涙が流れ出した。

父って偉そうなくせに打たれ弱いからなあ…………。

あ、そう言えば思わずカーリーのギャグを使ってしまった…………。  
20円払わなきゃ。

私は溜息をつくと席についた。

晃さんも呆れたように父を見やると、やれやれと首を振って私同様席についたのだった。

それから固まったままの父をそのままにして、何事もなかったように食事を始める私達。

「なあミカ、一番大事なのはお前の気持ちだ」

「晃さん？」

「一度、呉羽君とちゃんと話をすべきだ」

「でも……」

「第三者に意見を求める事は別に悪い事じゃない。でも、鵜呑みにし過ぎると自分を見失ってしまうよ」

晃さんは優しく笑って、そう諭してくれた。

「……分かりました。明日にでも話してみます」

私がそう言うと、晃さんは私の頭を撫でてくれたのです。

本当に何故晃さん（以下略）

くおまけ的な何か

「お、この酒うまいな」

「なに！？ アッキーずるいぞ！（グビッ）おおっ、本当だ！ これはオレ様秘蔵の酒にソックリな味だ！」

「……あー、それってもしかして……」

固まっていた大和が復活して、賑やかになった食卓。

うまい食事と酒に舌鼓を打っていた晃であったが、大和の言葉に手元のグラスを見つめる。

(あー、絶対これ大和の秘蔵の酒だ……)

ハハツと乾いた笑みを浮かべた。

晃がミカに目を移すと、何やら携帯を持って難しい顔を浮かべている。

「どうしたミカ？」

「ああ、晃さん。どうせなら明日と言わず、今日話そうと思ったんですけど繋がらなくて……今日って、バイトあつたかなあ？」

「何か用事があつたんだろう。心配しなくても明日会えるんだから」「それもそうですね」

「ああ、そうさ」

「オイ、アッキーにミカたん！早く食べないと冷めちゃうぞ！」「んでもってアッキー酒全部飲んじゃうぞ！」

「いや、大和？その酒って……」

晃の言葉も聞かずにグビグビと酒をあおる大和。

晃は諦めたように溜息をつく。

晃の脳裏に、後日秘蔵の酒が無くなっているのを見て騒ぐ大和を思い浮かべるのだった。

第十七話：なむじえい……

「なむじえい……」

一体何故こんな事になっているのか……。  
オレの目の前には正じいが不思議なポーズで構えている。

「ま、正しい？」

「ふぉ〜〜……」

おまけに、変な呼吸までしている……。大丈夫か!?

えーと、確かオレは親父の店で客の誕生日パーティーを  
するとかで呼ばれたんだったよな？

ああ、ここは親父の店だ。

それなのに何で此処に正じいがいるんだよ!?

オレは親父に頼まれたとおり、その客のエスコートをしていた。

エスコートつつつても別に特別なことをするでもなく、  
そもそもオレにエスコートを頼む時点で間違いだと思っただがな。

それでも、その客はなんか浮世離れた上品なばあさんで、  
自然とオレにエスコートさせてくれるっつーか……。そうさせられてる  
っつーか……。

とにかく、なんか只者じゃねー様な雰囲気纏ったばあさん  
なんだ。

「まあまあ、本当にお父さんそっくりね。呉羽君、私の事は咲さん  
って呼んでね」

「えっと、はい……咲さん」

「私、あなたのお父さんの先生だったのよ」

「え？ そうなんすか？」

「あらあら、そうなんですか、よ。正しい敬語を使いましょうね」

「うっ……はい」

とまあ、こんな風に自己紹介なんぞしつつ何気ない話をしていた  
最中だったと思う。

いきなり店の入り口がバーンと開いて、正じいさんが乱入してきたん  
だ。

相変わらず頭には鳥の巣が乗ってて、その中には仲睦まじく体を  
寄せ合うピーちゃんとピー助がいた。

皆が皆ぼかんとした顔をして正じいを見てた……否、一人だけ……  
…咲さんだけはニコニコしてたけど。

んでもって、正じいは店内を見回し、そして此方を見たかと思う  
と、そのままこっちに向かってきて、並んで座っている咲さんと才  
しを見て、もう尋常じゃないほどに震えだした。

その異常さに、「正じい大丈夫か!？」と慌てたが、正じいは才  
しを真っ直ぐに見つめ……というか、これって睨んでる？

つか、ものすげー怒ってないか、これ？

何でだ!？ オレ正じいに何かしたか!？

それから正じいは、震えをぴたりと止めると、オレから距離を置  
いて、さっきも言ったようにポーズをとり始めたんだ。

「ま、正しい!？ どうした!？ 何でここに!？ って言うか何  
してんだ!？」

「あゝ……もどよう！！」

「はあ！？ も、もう土曜！？ 今日は土曜じゃないぞ？」

正しいお決まりの意味不明な言葉に、オレは戸惑いの声を上げる  
しかない。

「つか、本当にどうした、正しい！？」

オレがおろおろしていると、場違いに穏やかな声が。

「あらあらまあまあ。正一さんの南無三式」バット、懐かしいわあ」

「はああ！？ 南無さん……なんだよそれ！？」

咲さんの謎の言葉に戸惑うオレ。

相変わらず謎のポーズのままの正しいに場違いなくらいにニコニコ顔の咲さん。オレと同様に戸惑いを見せる親父達一同。

「なむじえい……」

そして冒頭に戻るわけだが……。

「つか咲さん正しい知ってるの！？」

「あら？ 言っただけだったかしら。正一さんは私の旦那様ですよ」

「なああああ！？」

今日一番の衝撃だった。

……つか、南無何たらって何だ？

「うふふ、南無三式」バットは、正一さんの一撃必殺の壮絶に強力な攻撃ですよ。早く逃げないと……あの攻撃を受けたら大変よ?」  
「へー、あれって攻撃なのか……って攻撃!? 何で!？」  
「どうやら私があるにちよっかい出だされていると思ったみたいねえ」

「なあっ!! ちよっ、正じい!! 違うからっ!!」

いくらなんでも歳離れすぎだろーがっ!!

思いつきり手を前に出してぶんぶんと首と一緒に横に振るが、正じいは聞く耳を持たないらしい。

正じいからはゆらゆらと何かが立ち上っているように見える。さつきからピリピリと肌が痛い。物凄いプレッシャーを感じる。

その何とも言えない感覚に、口の中が乾き、じわりと背中に冷たい汗が流れ落ちた。

今にも何かをけしかけそうな雰囲気、正じいに、成す術のないオレ。そんなオレの前に立つ者が居た。

すると今まで感じていたプレッシャーが和らぐ。

「あ……さきちゃ?」

「正一さん、早とちりしては駄目ですよ?」

「あ……はちり?」

正じいが訝しげに顔を顰めて首を傾げると、オレと咲さんを交互に見やる。

「そうですね。正一さんの早とちりですよ」

「あ……さきちゃ、めんじゅ……」

正じいはあっけなく咲さんの言葉に納得すると、両手を合わせて謝った。

もうさっきまでの重々しいほどに感じていたプレッシャーは微塵も感じない。おまけに小首を傾げる仕草付きだ。

普通なら、大の大人が、それも普段から「まともに字が書けんのかよ!」とつつこみたくなるほど震えてる歳くつたじいさんが、そんな仕草をすれば気持ち悪いだけだが、不思議と正じいがするとあまり違和感がない。むしろ愛らしさを感じるとか……。

そんな正じいはオレの学校のマスコットの存在な訳で、おそらく正しいファンクラブの連中だったら無条件で許していただろうその仕草。しかし……。

「あらあら、謝るのは私じゃなくて誰かしら?」

「っ!?!」

その時の咲さんの微笑みを何と例えればいいのかだろうか。

オレは、その時感じた悪寒を一生忘れることはないだろう。

ああ、正じいの震えが止まったんだ……。

そして次の瞬間には震えを取り戻していたけれど……。  
なんかいつもの震えじゃ無かった気がする。

正じいはその柴犬の様な円らな瞳をオレに向け、プルプルと震えながら謝ってきた。

うん、謝ってたんだと思う。

相変わらずの言葉遣いだっただから。

「あ……ごめちゃ！」

「え、いや、あの……ま、まあ別にもう気にしてないっすよ」

「ふふふ、正一さん。呉羽君が優しい子で良かったですね」

とまあこんな感じだったんだが、一步下がって様子を見ていた咲さん。彼女はそんな感じで穏やかに笑っていた。

そして、それを見た正じいの額にオレはしっぴかり汗を発見したのだった。

もしかして、これがカカア天下ってやつか!?

なんかそんな感じがする……。

ふと目線をあげれば、相変わらず正じいの鳥の巣の中でピーちゃん。とピー助が仲むつまじく寄り添っている。

我関せずといった風情である。

しかしながら、この後に言った咲さんの言葉にオレは凍り付いた。

「まったく、正一さんたら。ピーちゃんが卵を温めているのに南無三式」バットなんてやつちゃだめですよ。もしそれで卵が割れちゃうようなことがあったら、離婚しちゃいますよ」

「あゝ、めっ!！」

咲さんの離婚発言に激しく首を振る正じい。

けれどもオレは、驚きと衝撃に正じいの頭を凝視する事を止める事が出来ない。

た、卵!? ピーちゃん卵産んだのか!?

い、いつの間に!?

いや、つーか振るな!! 正じい頭振るな!!

「正じい、卵!! 頭っ!! 振る、割れる!!」

あまりの事に片言になつてしまったが、なんとか正じいには伝わったようである。頭を振るのを止めてくれた。

そして、そんなになつても卵を温め続けているピーちゃん夫婦にちよつと感動しないでもない。

それから少し落ち着いた正じいは、咲さんを見てちよつとばかりビクビクしながら席に着いた。

因みに咲さんの隣である。

例えカカア天下でも、ベタボレなんだな、正じい……。

それを見てオレは、せつかくなので夫婦水入らずだと思つて二人を残して席を立とうとしたけれど、咲さんに止められてしまった。

正じいは不満そうにしていたけれど、咲さんに微笑みという圧力を掛けられて大人しくしていた。

どんだけ尻に敷かれているんだろう。

彼らの普段の夫婦生活がほんの少し気になった。

「ふふふ、お話し途中だったでしょ? 何か悩みがあるって聞いてただけけど? こんなおばあちゃんじゃなければ相談に乗るわよ?

それに正一さんの学校の生徒みたいだし、校長として正一さんも力になつてくれるはずよ。ね、正一さん?」

「あ、あい!!」  
「……………」

有無を言わせないただならぬ雰囲気、正じいは元気よく返事をしたのだった。

それからどれほどの時間が経ったのだろうか。

オレは咲さんと正じいに自分の悩みを打ち明けた。いや、打ち明けさせられた。

ムリヤリとかそういうのではなく、「アレ?」と思った時には全てを話した後で、しかも気持ちがつきりしていた。

自然の流れの中で、全て、包み隠さず、洗いざらい話してしまった。

何というか、聞き上手なのだ。それから相槌も絶妙で、いつの間にか誘導されている感じた。

この人はただ者じゃない…………。

そう思った。

(因みに、この時正じいは真面目な顔で空気になっていた)

しかし、しかしだ。

一言言わせてもらいたい。

“何故こうなった!?”

全て話し終わった後は、誕生会もお開きにしようという流れにな  
っていた筈じゃなかったのか……。

オレも咲さんに礼を言っつて、席を立とうとしていたのだ。

その時には親父も出てきて、挨拶をしていただろう！？

あははうふふでサヨナラする筈じゃなかったのか！？

じゃあ何故だ！？ 何故オレは今、正じいに弟子入りする事にな  
ってんだ！？

それでももつて何で南無なんたらとかいう技を伝授してもらおう方向  
にいつてんだ！？

「あらあら、呉羽君は金髪で腕っ節も強いイケメン執事さんに愛す  
る彼女さんをとられそうなんでしょう？」

戸惑うオレに咲さんは言う。

確かにそうだがあんな完璧な奴そういるものじゃないし、ミカが  
選んだのなら、幸せになれるのなら……。

「でもそれはただの逃げでしょう？」

心の中で言い聞かせていたつもりが声に出していたらしい。

顔を上げると、少しばかり厳しい表情で咲さんが此方を見据えて  
いた。

「彼女さんが選んだのなら、幸せになれるのなら、なんてただ自分  
を守る為の言い訳にしかないでしょう？ 自分が傷つかないよ  
うに偽善者ぶってるようにしか聞こえないわ。傷つかない恋愛なん  
て存在しないでしょう？」

勝てないのなら勝てる努力をなさい。幸せは自分で掴むものよ。  
このままじゃ逃げ癖と負け癖が付いちゃうわよ」

そんな感じで時には厳しく、諭すように言ってくれた。

オレは今の言葉を噛み締めていた為、咲さんが親父の方をチラリと見た事と親父が自嘲気味に笑っていた事には気づかなかった。

その時、ポンと肩に軽い衝撃を感じた。

見れば正じいが凜々しい笑顔でサムズアップをしていた。

「あゝ……ぎょうかいだ!!」

「は？ 業界だ？」

「あらあら、違いわ呉羽君。正一さんは“修行開始だ”って言うてるのよ」

「……………」

やはり正じいの言葉は理解不能である。

でも、その修行をしたらもしかして正じいの言葉がわかったりするのかな……。

何だか正じいのだや顔を見ていたら不思議とやる気が湧いてきた。  
多分、他のじいさんがやってもムカつくだけだろう。

「えっと……正じい、修行って一体なにすんだ？」

「あゝ……やまもり!!」

「えーと、山盛り？」

「うふふ、山籠もりですって」

「へへ、山籠もりって一文字抜けただけかあ……ん？ 山籠もり？  
はあ!？」

驚くオレを余所に正しいはオレの襟首をむんずと掴むと、物凄い力でオレを引きずってゆく。

「ぬおっ！？ ま、正しい！？ どっからそんな力をつ！？ つーか首が締まる！！ それよか山籠もりつて！！ 突っ込み要素が山盛りなんだけど！！」

オレはダメ元で親父の方を見る。

何とも言えない生温かい眼差しをしてやがった。助ける気はこれっぽっちも無いようである。

因みに、先輩たちは床にはいつくばって笑っていやがったから、常にスルーしていた。

はあ、と一つ溜息をつく。

あゝあゝー！！ 一体どうなるんだオレ！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1437/>

---

ショーウィンドウのドール・新学期

2011年10月2日16時49分発行